
物語から伝説へ・・・

愚者の夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

物語から伝説へ・・・

【コード】

N05000

【作者名】

愚者の夢

【あらすじ】

魔法の世界で、魔法が効かない少年。

一人の少女と出会い運命が動き出す。

少年の物語は語られ、伝説へ・・・

0話・・・出会い(前書き)

はじめまして！

何も知らない素人が、投稿します。

お目汚しになるかと思いますが、読んで頂ければ、幸いです。

では、宜しくお願いします。

0話・・・出会い

こことは別の世界。

様々な物語や伝説が紡がれる世界。

とある一人の少年の物語を語ろう。

「キヤーーーーー」

突然、森の中から少女の悲鳴が響き渡った。

少年は悲鳴を聞き、すぐさま森の中に駆け出した。

少女はファンブル（猪型の獣）に、崖の壁に際し追い詰められていた。

ファンブルは少女に狙いを定めて、蹄で地面を掻いている。

ファンブルは蹄で地面を蹴り、突進してきた。

少女は目を閉じ、身を強張らせていた。

ドン！ ドサッ

「大丈夫？」

少女は聞き覚えのない声の主に、顔を向け小さく「はい」と頷いた。

少女は周りの様子を確認し、少し離れた所にファンブルが倒れていた。

そして、目の前の少年の顔が近く、自分が少年に抱き抱えられているのに気が付き、慌てて離れた。

「きゃっ」

離れた時に躓き転んでしまった。

「君、大丈夫？怪我してない？」

少年は心配そうに声を掛け、手を伸ばしてきた。

少女は手を取り、起き上がると、少年に向かって

「危ないところを助けてもらい、ありがとうございます。・・・私の名前はセシーと言います。」

お礼を述べた。

少女との出会いが、少年の物語の始まりとなる。

0話・・・出会い（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。

前書きでお伝えしたように、作者は小説の基本も知りません。

こんな愚か者ですが、少しずつでも書いていきたいと思えます。

これから、宜しくお願いします。

1話・・・王家の塔へ

「・・・私の名前はセシーと言います。」

僕は、セシーと名のる少女を改めて見てみると、旅用のフード付きのマントは、所々破れていたが、怪我は無いようだ。

「大丈夫みたいだね。こんな森の奥に君一人で来たの？ここには獣や魔獣などもいて危険だよ。森の外まで送るよ。っあ！名前言ってなかったね。僕の名前はサーク。宜しく。」

僕はセシーを安心させる為、笑顔を心掛けて話し掛けた。

セシーは慌てて

「え！っあ・・・その、他の仲間とはぐれてしまって・・・」

少し吃りながら答えた。

僕は、何か慌てさせる様な事をしたかな？と考えつつ

「じゃあ、一緒に探・・・」

ポオオオオツ・・・

言葉の途中で、炎の魔法が僕らに向かってきた。

僕はセシーを庇うように間に立った。

ドオオオオン

足元に炎が着弾し、地面をえぐり、石などが弾けた。

「誰だ！」

僕は炎が飛んできた方向に向かって叫んだ。

そこには二人の男女が立っていた。

女は僕に対して

「セシー様から離れなさい！」

ザッ

言わないなや、剣を構え突進してきた。

シュシュシュツ　　ザン！

連続突きからの切り落としを完全に見切り回避する。

タン

剣が地面に迫ったのを見て、そのまま足で踏み付けて剣を封じ込める。

そして、セシーに向かって

「セシー、この人たちを止めて。」

セシーは大きな声で

「二人とも止めて下さい！この方は恩人です。無礼ですよ！」

男は次の魔法を撃とうとしていたが、セシーの声で止めたのを確認した。

1話・・・王家の塔へ（後書き）

作者の愚者です。

ここまで、読んでいただき、ありがとうございます。

また、短い駄文ですが投稿します。

2話（前書き）

相変わらず短い駄文ですが、宜しくお願いします。

2話

僕はセシーの声で魔法を止めたのを確認した。

「君達はセシーの仲間だね。僕はサーク、セシーに何もしてないよ。」

踏み付けていた剣から、足を離し距離をあけた。

改めて見てみると、かなりの綺麗な顔だが、勘違いをしていたことが恥ずかしかつたか、顔を朱く染めている。

男の方かというと、いつの間にか、セシーの横に移動していた。

「セシー、大丈夫かい！ あの男に何もされていないかい？」

男は僕を無視してセシーに話し掛けた。

「私は大丈夫です。先程も言った通り、この方は危ないところを助けて頂いた恩人です。」

セシーは男にそう言うと、僕の方に向いて

「サーク様、仲間が無礼をし、申し訳ありません。」

そして仲間に向かって

「二人ともサーク様にお詫びをして下さい。」

二人は顔を見合わせて

「すまなかった。」「すみませんでした。」

僕に同時に頭を下げた。

「いいよ。それだけセシーの事を心配していただけだから。」

と、手を振りながら応えた。

「あ！」

セシーは何かに気が付き、僕の手を取り

「レイラさん、サーク様に癒しの魔法を」

見てみると手の甲から血が出ていた。

「これくらい大した事ないよ。気にしないで。それに……」

「そんな訳にはいけません。」

間髪入れずにセシーが言う。

レイラが近くに来て魔法を使うと、

パーン！

癒しの魔法が弾けて消えてしまった。

「「「え!」」」

三人とも驚き声を上げた。

レイラがもう一度魔法を使ったが、結果は同じだった。

僕は皆に

「僕に魔法は効かないから、もういいよ。傷も大したことないから。」

と言うと、セシーは自分魔法を掛けようと、僕の手をとった。

「生命を司る光よ。彼の者の傷を癒し給え。」

「!...!」

驚くことに、レイラより小さな魔法は、僕に弾かれることもなく、傷を癒していった。

「へへ 魔法で傷が癒えるのって、こんな感じなんだ。」

僕は手を返し返し見て、つぶやいた。

2話（後書き）

ここまで読んでいただき、きありがとうございます。メインキャラクターが揃ったので、今度キャラ紹介でも作ります。

3話

僕が手を見ながらつぶやいていると、セシー達が聞いてきた。

「サーク様は、魔法の効きにくい体質ですか？」

「君は、何か封魔のアイテムでも使っているのか？」

「レイラの魔法は弾かれて、セシーの魔法は効くのはなにかあるのかい？」

上から、セシー、レイラ、誰???

「え〜と、別に仕掛けもアイテムでもなく、体質的に魔法が全く効かないはずだったのに、セシーの魔法は効いたな〜？それより、貴方の名前は？」

そう言つて、男の名を尋ねると

「あ〜、すまん。名のつてなかったな。名はカルロ よろしくな。」

カルロはそういえばみたいな顔で名のつてきた。

僕は軽く会釈を返し、セシーに向かって

「セシー、君の魔法は何か特別なの？」

逆に尋ねると少し慌てて

「え！ 何か変でしたか？」

「さつきも言ったように、昔から僕に魔法は全く効かないから、今みたいに回復したことがなかったから……！」

と話している時に気が付いた。

「光魔法ってことは、セシーは王族の血筋を引いているの？」

セシーは頷くとフードから顔を出した。

「はい。本当の名前はセシリアと言います。」

フードから出した顔は、綺麗な金髪で、絹の様な滑らかな髪をポニーテールしていて、深く蒼い瞳は一種の神秘さを讃えているようだ。

顔立ちが少女の可愛らしさの中に、大人に成長する美しさがあり、僕は少しの間、見とれてしまった。

「サーク様、そんなに見つめられると困ります……。」

セシーは頬を染めて目を逸らしながら呟いた。

僕はドッキッとし

「ごめん。」

と何故か謝ってしまった。

セシーの隣では、カルロが顔に手を当てて

「姫様、折角お忍びで来ているのに、簡単にバラして・・・つつつ
つ　いった!」

ガン!と音が聞こえぐらいの勢いでレイラがカルロの足を踏み付け

「カルロは少し黙っていなさい!サーク殿、私達には事情あって、
セシリア様の事は内密で、お願いします。」

「ええ、分かりました。王家の森に係ることですか?」

(王家の森は、聖域に指定されており、奥には王家の神殿がある。
森の中には獣だけでなく、幻獣などもいるので、一般の者は近づか
ない。)

僕は返事をする。

「もし良ければ、僕が森の中を案内しますよ。」

次の言葉を告げる。

3話（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。

設定（前書き）

今回は設定のみの投稿となります。

設定

世界観

中世から近代にかけての文化で魔法が一般的に使われる。

人種

・人族・・・瞳は基本的に青色で、髪の色は各祝福を受けている属性を反映する。

・魔族・・・瞳は基本的に紫色で髪の色は基本黒色やグレーが多い。自分の魔力を力に変換が可能で、接近戦が得意な者が多い。

エルフ族・・・瞳は各祝福を受けている属性を反映している。容姿は美しい者が多い。非暴力の平和主義だが、同族意識は強く護る為には戦いをする。又、自分達は自然の一部という考えで、自然を護る姿勢である。

国家

世界には三大大国として次の各国がある。

- ・光の神を信仰する人族が主に住む国
- ・闇の神を信仰する魔族が主に住む国
- ・精霊神を信仰するエルフ族が主に住む国

各国の属国など有り。

国では無いが、最も尊き神を奉り、宗教の中心である都市

宗教

各国毎に祝福を受けた神を信仰する。

神

最も尊き神として三柱

- ・ 創造と破壊の神
- ・ 時を司る神
- ・ 空間を支配する神

一般的に信仰するされている上級神として三柱

- ・ 光の神（生を司る）（金）・・・アルテシア
- ・ 闇の神（死を司る）（黒）・・・オルティーナ
- ・ 精霊神（自然を司る）（銀）・・・シルティーンア

その各上級神の属神として、各属性司る神十二柱

- ・ 火（赤）
- ・ 水（青）
- ・ 風（緑）
- ・ 土（茶）

魔法の特性

			攻：防
光系	4	6	
闇系	6	4	
精霊	5	5	

同じ量の魔力を込めて、魔法を放つと上の攻防比になる。

通貨

通貨は世界共通で基本3種類が使われている。
一部例外で各国毎の通貨もある。

金貨〔G〕・・・1枚約2万円ぐらい
銀貨〔S〕・・・1枚約2千円ぐらい
青銅貨〔B〕・・・1枚約百円ぐらい

他の設定はまた書きます。

設定（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。

次の投稿はキャラ紹介を考えています。

おかしな点やわからない点が御指摘下さい。

修正します。

キャラ紹介

サーク（主人公）

歳 18歳
身長 175
体重 58

武器 祖父の形見の片刃の剣（イメージは日本刀）刀身は黒く銘は不明

髪型 長めの髪を後ろで結んでいる

髪の色 黒、前髪の一部に金髪あり

瞳の色 黒、光の加減で深い藍色

外見 黒髪黒目の珍しい特徴がある。容姿は上の中。笑顔は男性に安心を、女性にときめきを与える。本人は人並み以下と思っている。体つきは無駄な肉はなく、しなやかな中に力強さを感じる。

特技 剣術、体術はS

魔法は全く使えない

魔法効果を受けない

動物に好かれ易い

人を引き付けるカリスマあり。本人自覚無し

セシリア（ヒロイン）

歳 17歳
身長 155
体重 ??? (本人の希望により秘密)
スリーサイズ 胸：可愛い 腰：細い お尻：もう少し

武器 杖(王家に伝わる杖。世界樹の枝から作られる)魔法の効
果を高める

髪型 ポニーテールで解くと腰までの長さ
髪の色 金髪
瞳の色 深い青(一種の神秘さを持つ)

外見 金髪青目の王族の特徴が伺える。容姿は上の上。可愛らし
さの中に、大人へと成長する美しさがある。体つきは今でも魅力的
だが、本人はもっと成長を望んでいる。

特技 光魔法、火・水・風・土の属性魔法が使えるが、D(昔は
A)
体術、杖術はD
サークに唯一魔法をかけれる

レイラ(カル口の双子の姉)

歳 19歳
身長 165

体重　　??（書くと・・・）
スリーサイズ　胸：ボン　腰：キュツ　お尻：ボン（スタイルはかなり良い）

武器　　レイピア、魔銃（魔力をそのまま撃ちだせる）

髪型　　肩より少し長いセミロング

髪の色　　緑色

瞳の色　　明るい青

外見　　目が少しきつめで、眼鏡をかけて制服を着れば、委員長タイプ。真面目な見た目が先行し、遠巻きに見られることもあり。容姿、スタイルが良いので女性の憧れを集める（一部はLOVE）。

特技　　風魔法はB、水魔法はC

剣術はC

銃の腕はB

カルロ（レイラの双子の弟）

歳　　19歳

身長　185

体重　75

武器　　槍、箆手（魔法の効果を高める呪印を施している。打撃武器として使用可能）

髪形　　短髪の逆髪

髪の色 緑色
瞳の色 明るい青

外見 黙っていれば、上の下として十分二枚目。しかし、大雑把な性格で行動を起こすと二枚目半。体は鍛えて、筋肉質。

特技 風魔法はA、火魔法はB、土魔法はC

槍術はB
体術はC

ランクはS/A/B/C/Dの5段階

Sは最高ランクにして、世界に数人

Aは超一流として、大陸に数人

Bは一流として国に数十人

Cは達人として国に千人未満

Dは素人に毛が生えた程度から、玄人まで

キャラ紹介（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。
次からは話を進めていきたいと思えます。
よろしくお願ひします。

4話（前書き）

本編を再開しました。

4話

「もし良ければ、僕が森の中を案内しますよ。」

次の言葉を告げる。

話し掛けた時に、王族の方に対して、いつもの口調ではまずいと思い、口調を変えた。

「セシー…… セシリア様、僕の家系はこの森の管理を王家から任されています。森の中は知り尽くしているから、安全に移動できると思っています。」

セシリアは少しショックを受けた顔で

「サーク様、先程までの砕けた話し方のままで、お願い出来ませんか？」

僕はセシリアの顔を伺いながら、少し考えて

「わかった。」

セシリアの顔がパツと明るくなった。

「その代わりにセシリアも、僕に様付けは止めて。」

「でも、サーク様は恩人の方ですし……」

僕はセシリアの言葉の途中に話した。

「困っている人を助けるのは当たり前前で、何も特別なことをした訳じゃない。特別なことは何もないから、様付けは止めて。」

セシリアは納得のいかない顔だが

「うう、分かりました。次からサークさんと呼びます。」

話し方がまとまろうとした時に

「駄目です！セシリア様は王族の方ですから、自覚を持って頂かないと、示しが付きません。」

レイラはセシリアに対して説教を始めた。

30分後……

セシリアはレイラに対して

「私のお願いをきいて下さい。」

少し涙を浮かべて言った。

レイラは少し怯んで、了承の頷きを返した。

僕はその姿をみて、セシリアは以外と、したたかな性格をしているなと思った。

僕はそろそろ良いだろうと思っ

「セシリア、この森の何処に行くの？」

「はい、森の中心部にある塔までです。」

「塔までかく、今から向かうと着くのが夜になるから、一旦僕の家で泊まり、明日の朝から向かおう。」

4話（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。

短い文で小まめに更新するのと、更新が遅くなるが長い文を書くのと、迷っています。

どっちが良いでしょう？

5話

「・・・明日の朝から向かおう。」

僕達は一度森の外れにある僕の家に向かった。

僕は向かっている道中で、気になっていたことを尋ねた。

「セシリアはどうしてファンブルに追いかけられていたの？」

セシリアは僕から目を逸らしながら

「え〜と・・・その〜・・・」

恥ずかしそう言ってきた。

「お昼ご飯を食べたから、休憩しているとファンブルの子供が寄って来たので、遊んでいました。」

「ちょっと遊びに夢中になって、レイラさん達とはぐれてしまいました。」

「すると、草むらからファンブルの親が出て来て追いかけられました・・・」

横で聞いていたレイラは

「セシリア様、急にいなくなり、どれだけ心配したとお思いですか！これだけは言わせてもらいます・・・」

・・・20分後

「・・・良いですか、これからはしっかり守ってくださいね。約束ですよ！」

説教が終わったと思ったら、セシリアは僕の背中に回り込み、レイラに向かって

「いっだ！」

と言って隠れた。

レイラは怒った顔になり

「セシリア様！」

怒鳴り声を上げた。

その後はカルロが止めに入って、殴られたり・・・

まあ、そんなやり取りをしていると一軒の家が見えてきた。

「あれが僕の家だよ。今日は誰も居ないから遠慮はいらなから。」

そう言って、皆を家に招き入れた。

・・・そうして、出会いの日は過ぎていった。

5話（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。

6話

・・・夜が明けて、間もない時間、僕はいつものように、鍛練に打ち込んでいた。

誰かが近づいてきた。

「へえ〜 すごいなー」

カル口は感嘆を漏らすと、自分の槍を持ち出して

「一つお手合わせ、願いたい。」

「良いですね。」

僕は返事をし、組み手を楽しむことにした。

祖父が他界してから、組み手相手が居なかった為、一人での鍛練ばかりだったが、なかなかの実力者との組み手に、自然と笑みがこぼれた。

「ルールはどうします?」

「そうだな〜、寸止めの何でも有りでもいいか?」

「はい。では、勝敗は参ったするまででいきましょう。」

僕達は5メートルぐらい離れ、互いの武器を構えた。

・・・ジリ・・・ジリ

僕は間合いを押し量り、詰めようとする。

カルロは槍を構えている為、間合いは広く、なかなか隙がない。

・・・静寂に包まれた。

ザッ

ガツキン

僕は、一瞬で間合いを詰めて、薙ぎ払ったが、カルロは冷静に槍の柄で受けた。

「くっ！」

小さなうめき声と共に、後ろに後ずさる。

「かなり重い攻撃だな。」

カルロは手の痺れを払う様に手を振りながら声を掛けてきた。

「いや、隙があまり無いから、防御ごと吹き飛ばそうかと。」

「おいおい、寸止めて言ってなかったか？」

「カルロさんはあれ位の攻撃なんって、余裕で防御すると思いましたが。」

僕は仕切り直しとばかりに、武器を構え直す。

「先程までの隙の探り合いも鍛練の一つですが、攻防の鍛練の為、動いていきます。」

「ああ、こつちも攻めていくぞ！」

お互いの武器の特徴を活かし、遠くの間合いからの槍の一つ突き。槍を回避してからの、剣での連撃。

斬撃を柄でまともに受けずに、受け流しをしている。

・・・30分後

「最後に少し本気でいきます。上手く受けてください。」

シュツ。

僕はそう言つと、消え去る様に見える移動術から、カルロの背後に回り込み、袈裟切りを放つ。

カルロが反応し、少し無理な体制で防御した。

僕は間髪入れずに、足払いを放つ。

カルロがひっくり返り、僕は顔の近くに、刃を突き付ける。

「・・・参った。強いな。良い練習になった。ありがとう。」

「こちらこそ、いつもは組み手相手が居ないので、今日は楽しかった。またお願いします。」

僕達は握手を交わし

「そろそろ、朝ご飯を食べましょう。食べ終わったら森の中の塔を目指しましょう。」

二人で家の中に戻って行った。

6話（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。

戦闘の表現は難しいです。

表現力のない駄文ですが、投稿していきます。

これからもお願いします。

7話

僕らが家の中に入ると、レイラが朝食の用意をしていた。

「おはよう。勝手に朝食を用意したが良かったかな？」

僕は用意された朝食を見ると、感心しながら

「ええ。ありがとうございます。僕が作るより、美味しそうです。」

そう言うと、レイラに笑顔を向けた。

レイラは頬を赤く染め

「……っ あ セシリア様を呼んできます。」

慌てて、呼びに行った。

僕は慌てさせる様なこと言ったかな？と頭を傾げていると

「くくく」

横でカルロが声を噛み締めながら、笑っていた。

僕はカルロに

「何を笑っているのですか？」

「いや、大した事じゃない。けど、あの『アイアン・メイデン』と

呼ばれるレイラが照れて逃げ出したか。」

僕は何の事か分からなかったが

バン！バン！

「気にするな。楽しくなりそうだ。」

カルロはそう言って、僕の肩をたたいた。

「気になっていたんだが、俺達にも敬語はいらないぞ。年上と言っても一歳しか変わらないんだし。」

ただかれた肩を摩りながら

「わかった。それより、力入れすぎ、痛いつて。」

「おお！悪かった。」

カルロは素直に謝ってきた。

しばらくして、レイラはセシリアと共に戻ってきた。

僕はセシリアと挨拶を交わした。

「おはよう。夕べはよく眠れたかい？」

「はい！色々とお世話になり、ありがとうございます。」

「気にしないで。それよりレイラさんが朝食を作ってくれたから、

食べよう。」

皆が揃ったので、朝食を食べ始めた。用意された御飯は、どれもオーソドックスな料理だが、丁寧に調理されているのが分かる。

僕は一口食べてみる。

モグモグ・・・ゴクン

「うん！思った通り、美味しい。あれしかない食材を上手いこと使っているな。」

レイラに向かって、声をかけた。

その後に何気なく言った言葉と最高の笑顔が、爆弾となり派手に爆発した。

「これなら、いつでもお嫁さんになれますね。旦那さんになれる人は羨ましいな。」

バン！

「レイラさん、貴女これを狙って、朝食の準備をしたのですか？」

セシリアは食卓に勢いよく手をつき、レイラを問い掛けた。

「・・・え！ え！いえ、そんなことは無いです。泊めて貰っているので、お礼のかわりと思わせて。」

レイラはサークの笑顔を見たまま固まっていた為、反応が遅れた。

「サークさん、私の料理も今度食べて下さい。料理は得意なんです。」

セシリアはサークに顔を近づけて、迫る様に言ってきた。

僕は少し怯みながら、だが反面近づいた顔のアップにドッキッとして

「あ・ありがとう。期待してるよ。」

と応えた。

僕は泊めたお礼に、二人してそんな事しなくても良いのになと
考えていた。

「くくく・・・」

カルロが先程みたいな笑い声を漏らし

「セシリアにレイラが・・・サークやるな。」

小さく呟いている。

「カルロは黙っていて(下さい)!!」

セシリアとレイラは同時にカルロを怒鳴りつけた。

「はいはい 要らないことはいけません。」

両手を口の前に持って行き、言わ猿のポーズをして言った。

賑やかな朝食も終わり、僕達は王家の塔に向かって、出発をした。

7話（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。

また投稿するのでよろしくお願いします。

8話

・・・王家の塔に向かう途中、僕は後をつける気配を感じ取った。

カルロも気配に気が付いたみたいで、僕に目配せをし

「すまん。少し先に行っててくれ。直ぐに追いつくから。」

セシリアは、少し考える様な仕草をし

「うーん、何かありましたか？」

「いや、男のゴールデンタイムですよ！」

「????？」

セシリアは余計に分かりませんって顔をした。

「サーク、セシリア達の案内、よろしく！」

「うん。分かった。直ぐに戻って来いよ。置いていくよ。」

「ああ。直ぐに戻る。じゃ！」

カルロは片手を軽く上げ、森の中に入って行った。

「一体、何があるんでしょう？」

セシリアは納得がいかない顔をしている。

.....

カルロは気配を感じる方へ一気に駆け寄る。

「さてと、そろそろ出て来たらどうだ。」

すると、木の影から黒い衣装を纏った、いかにも暗殺者という者が出て来た。

「用件は分かっている。雇い主は誰か答える！」

カルロは槍を構え、何時でも動ける様にする。

「愚かな。依頼を遂行するのみ。」

暗殺者は低い声で言い放つと、短剣を構えつつ、火の魔法を放った。

「炎の矢よ！」

ポオオオオ・・・

カルロは迫り来る炎を、槍で払いのける。

ブウン！

「無駄だ！」

「いや、十分役に立っているよ。魔法で気が逸れたお陰で、身を隠せた。」

男の声が辺りに響き、距離と方向が掴みづらい

カルロは神経を研ぎ澄まし、相手の出方を伺う。

シュツ！

背後から、飛来するのを感じ取った。

それをギリギリ回避すると、背後に向き直す。

向き直るタイミングで、反対側から、短剣を構えた男が接近し、攻撃をしてきた。

シュツ シュシュ ガシ！ ドン！！

カルロは相手の攻撃を完全に見切り、相手をつまみ上げた。

「ゴホオ・・・くう！確実に逆のタイミングだった・・・。」

「おまえに付きやって、かくれんぼをしている時間が勿体ないから、隙を見せただけだ。」

「さてと、もう一度聞くが雇い主について、喋るきはないか？」

「無い。商売柄、口は堅い方だ。死んでも話す気はない。」

「そうか。ならば死ぬ。」

カルロは何の感情も浮かべずに告げ、相手を放し、風の魔法を放つ。

「風よ、竜巻となりて、我が敵を刻め」

男は素早く逃げようとしたが、それより早く魔法が発動し、竜巻にのまれて、断末魔の声を上げた。

「グウギャー――」

竜巻によって、物言わぬ紅い肉塊になったのを見て、カルロは

「まあ、喋っても喋らなくても、結果は同じだな」

表情は何の感情も無しに、言い放った。

「さて、急いで戻るか。」

カルロはその場を後にした。

8話（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。

戦闘シーンが難しいです。

皆さんにわかって頂けるか心配です。

いつもながらの駄文ですが、よろしく願います。

9話

・・・一方、サーク達は森の中心部向かって進んでいく。

「カルロの用事って何かしら?・・・」

僕は考えながら歩く、セシリアに声を掛ける。

「セシリア、考え事をして昨日みたいに、はぐれないように!」

「はい。・・・そうだわ!私に名案があります。」

セシリアは僕の側に来て、僕と手を繋いで、笑顔を浮かべた。

「こうすれば、はぐれて迷子になる事はありません!」

自信満々に言い放つと、僕の顔を伺った。

「・・・御迷惑でしたか?」

僕がドキドキして、返事が遅れると不安そうな声で聞いてきた。

「あ・・・うん。別に構わないよ。」

「セシリア様! 男の方と手を繋ぐなんて、うらやツ、うんん・・・
自覚がたりません。」

レイラが手を繋ぐ姿を見て、駆け寄って言った。

僕はレイラが、一部言い直した事に、気が付いたが触れずにいた。

セシリアはここぞとばかりに

「レイラさん、今の言葉の中で何か言い直しをしましたか？」

レイラは最初の勢いを無くし

「あの、その……」

吃った返事しか返ってこなかった。

「レイラさん、素直になりましょう。サークさんの手は一つ空いていますよ？」

セシリアは天使の笑顔で、悪魔の囁き唱える。

レイラは少し迷ったが、悪魔の囁き乗ってしまった。

「失礼します！」

顔を赤らめながらレイラは、僕の空いている手を握ってきた。

僕はレイラも迷子になることがあるのかな？って心の中で思っていた。

そんなやり取りをしていると、不意に声を掛けられた。

「お！サーク、両手に花で羨ましいな」

声の聞こえた瞬間、レイラは僕の手を放した。

「カルロ、おかえり。どうだった？」

「駄目だな。収穫無し。後片付けはしたが。」

「そうかあ、ま〜いいや。セシリア、もう少しで塔が見えてくるよ。少しして、木々の間から塔が見えた。」

僕は塔の前に着いた。塔には入口は無く、セシリアに聞いてみた。

「昔から、この塔に入口が無いから、どうやって入るのか、疑問に思っていたんだ。」

セシリアは直ぐに応えてくれたが

「サークさん、この王家の塔は、王族の者しか入れませんよ。」
僕は軽くシヨックを受けた。

「そうなんだ。中がどうなっているのか興味があったんだけど、入れないのか。残念だな。ところで、この塔の中で何をするの？」

「すみません。秘密です。」

セシリアは申し訳なさそうに、謝った。

9 話（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。

10話

・・・セシリアは申し訳なさそうに謝った。

「サークさん、これから私はこの中に入ってきます。」

セシリアの表情は強張り、覚悟を決めた顔の様だ。

僕は心配になり

「この中は危険なことはないの？」

危険がないか聞いてみた。

「ええ、大丈夫です。中では少し試されることがあるだけです。」

「サークさん、私たちはセシリア様のお帰りをお待ちしましょう。」

「そうそう、セシリアの事を心配するのは分かるが、過保護になりすぎだぞ〜・・・俺たちは信じて待つ！だ。」

二人から言われ、セシリアが準備している様子を見た。

・・・僕は昨日の夜に聞いた話を思い出していた。

カルロは二人になった時に、真剣な表情で語り始めた

「・・・セシリア様はこの国の王女だ。王位継承の為、王家の塔で王の証を手に入れることだ。」

「何故、それを僕に教えるのですか？機密事項では？」

「今更だな。サークはセシリアの正体を知っている。それに事情を説明し、味方になってくれると助かるからな。」

「王位継承の為と言いましたが、普通そのまま継承されるのではないのですか？それともその事情が関係するのですか？」

「普通ならそうだ。しかし、セシリアは普通では無いという事だ。セシリアの小さい頃は、『全ての神に愛され者』と呼ばれるくらい、光の魔法以外の火・水・風・土の属性魔法も全て同じ様に高レベルで扱えた。」

僕は魔法を扱えないが、生来の属性魔法以外を扱う難しさは、知識として知っている。2つの属性を操る才能だけでも、周りから賞賛を受けるのに・・・

「全ての属性をですか・・・」

驚きを通り越し、咳きしか出なかった。

「自慢じゃないが、俺は3属性を扱えるぞ！」

カルロは少し胸を張りながら言った。

「え！ 凄いじゃないですか！」

僕は今度は素直に驚けた。

「話がそれたから戻すが、今から約8年ぐらい前のある日を境に魔法が使えなくなってしまった。今では努力して、使えるようになったが素人に毛が生えた程度だ。そもそも王族の血筋は魔法に長け、それを持って権威を示す様になっている。」

「そんな背景があり、セシリアは王に相応しくないという考えの者や、セシリアと別の王族筋の男との政略結婚の話が出てきている。結婚話については、王妃様が頑なに拒否をされているが・・・」

「そういった輩を抑える為に王の証を取りに行くのが目的だ。この旅の途中で過激な輩の邪魔が入るかもしれないから、協力をお願いする。」

カルロは僕に向かって、頭を下げた。

「わかりました。僕も乗りかかった船ですから、協力させてもらいます。」

僕は笑顔で返事をした。

.....

セシリアの準備が終ったみたいだ。

セシリアは塔の前に立ち、胸の前で手を組み何かを唱えた

「我、光の血筋に連なる者也、我が声を聞き中へと導き給へ」

辺り一面が光に包まれ、僕は目が眩んだ。

10話（後書き）

ここまで読んで頂き、ありがとうございます。
今回は文の構成が違っているので、読み辛かったら、すみません。
これからも、宜しくお願いします。

11話

・・・辺り一面光に包まれた。

「さて、セシリア様が戻られるまで、私たちはここで待ちましょう。」

「

「そうだな。サーク・・・あれ？どこに行った？」

カルロとレイラは辺りを探したが、サークの姿はなかった。

・・・僕は目が慣れて、周りを確認するとセシリアと塔の中に居た。

「あれ？ここ塔の中だよね。」

「そうです。・・・え！何故サークさんが中に入っているのですか？」

セシリアは驚きの声を上げた。

僕は少し考えたが

「うん・・・何故って言われても困るが・・・」

両手を上げお手上げの仕草をしながら答えた。

「取り合えず、目的を果たそうか。」

「そうですね。ここで話していても、答えが出できませんし。」

「塔の中で何をすれば良いのかな？」

周りを見回してみても、上に続く階段があるだけであった。

「塔の最上階に証を手に入れる儀式をする部屋が在ります。先ずはそこを目指しましょう。」

僕達は、最上階を目指して塔を歩きだした。

僕はセシリアに話掛けた。

「セシリアは証を取って、どうしたいの？」

「急にどうしたのですか？」

「昨日の夜、カルロに事情を聞いたよ。今のままでは王位を継承するのが難しいから、皆が納得する様に証を取りに来ていると」

「はい。その通りです。」

「別の王族の人に王位を、譲っても良いのでは？」

「それとも、王位を得て何かしたい事でもあるの？」

「それは・・・もしお城の中がまとまっていれば、誰でも良いと思います。しかし政治は色々な思惑で動いています。それは全て良い思っただけではないのです。」

セシリアは悔しそうな表情を浮かべ

「恥ずかしながら、中には民の暮らしより自分の利益を優先しよう
と考える者もいます。」

「私は全ての民が笑って暮らせる国にしたいのです。それに誰とか
は覚えていませんが、小さな頃に交わした約束を守りたいのです。」

セシリアは決意の固めた表情で、熱く語った。

僕は、セシリアの表情を見て、いつもの可愛らしい表情でなく、覚
悟を決めた美しさを見た。

そしてこの方に仕えて、理想を叶えてあげたいと思った。

「セシリア様、あなた様の理想を叶える為、私は貴方の側に仕えさ
せてください。」

僕は、セシリアに向かって膝を付き、頭を下げた。

「・・・サークさん！そんな事はやめて下さい。貴方は私の恩人で
仲間です。手伝って頂けるのは嬉しいですが、仲間としてお願いし
ます。」

セシリアは僕に近づいてきて、僕を起こして言った。

「しかし、セシリア様は王位継承者としての身分があります。いく
ら王家に縁のある家系でも、平民である私が、仲間として側にいる
ことはできません。」

セシリアは悲しそうな顔をし、顔を左右に振った。

「そんなことはありません。私は身分の違いで人の全てが決まると思っています。身分の違いで、やるべき事の責任が変わるかもしれませんが、人と人は同じだと思います。」

セシリアの瞳には涙が溜まっていた。

「わかったよ。今まで通りにするよ。セシリア。」

僕はセシリアの涙を拭い、微笑を向けた。

「はい！そうして下さい。」

セシリアも笑顔で返してくれた。

・・・二人で最上階の部屋の前までやって来た。

11話（後書き）

ここまで読んで頂き、ありがとうございます。

短い文ですが宜しく願います。

読んで頂いた皆様に質問です。

短い文ですが更新の早いのと、長い文で更新が遅いのとどちらが良いですか？

意見がありましたら、参考にさせていただきます。

12話

・・・二人は最上階の部屋の前に着いた

「ここが目的の部屋だね」

セシリアは頷き返す。

「準備ができたなら入ろう。」

「ひゃい！」

セシリアは緊張の為か、少し上擦った声で返事した。

「セシリア、落ち着いて。僕が側にいるから。」

セシリアは、落ち着く為に目を閉じ深呼吸を始めた。

スー　　ハーーーー　　スー　　ハーーーー

目を開け、覚悟を決めた。

「サークさん、入りましょう。」

僕はセシリアの横に寄った。

「ああ。行こう。」

「あ！手を繋いでも良いですか？」

セシリアは顔を赤く染め、僕の手を握ってきた。

「森で手を繋いだ時に、安心して気持ちが落ち着いたので……」

「いいよ。じゃ、中に入ろう。」

「はい！」

部屋の中に入ると、中央に魔方陣らしき円陣があり、周りの壁には呪印が施されている。

僕は部屋の様相を眺めていると

「サークさん、私は円陣の中で儀式を行います。少し待っていて下さい。」

「ああ。気をつけて。」

僕は何があってもセシリアを守れるように、辺りを警戒した。

セシリアは円陣の中心で両膝を付き、両手を胸の前で組んだ。

「我は光の末裔也。我は後継者の証を求めし者。光の女神を我が声を聞き届け、我の資格を試せ。」

セシリアが祈りを捧げて、少し経つと凜として透き通る様な声が聞こえてきた。

『……我が祝福を受けし末裔の子よ。そなたの資格、我が力を持

って試そう。』

声が終ると同時にセシリアの前に光が現れ、そのままセシリアの体内に入っていた。

セシリアは苦しみながら、前に倒れた。

「セシリア！」

僕はセシリアの元に駆け寄り、セシリアを抱きかかえた。

『少年よ、大丈夫だ。すぐに治まる。』

光の神が言った通り、セシリアの様子は治まってきた。

「……うん」

「セシリア気が付いた？体におかしいところとかない？」

「ええ、特にはないです。……ええ〜！」

セシリアは自分がサークに、抱きかかえられている事に気が付き、慌てて離れた。

『我が祝福を受けし子よ。そなたには封印がされておる。その為本来の力を発揮できない。封印は我が力でも解くことは出来ぬ。しかし証を授けると同時に、光魔法については封印の影響を少しでも抑えられるようにした。』

『少年よ、貴方の名は？』

いきなり僕に話しかけられて驚いたが、何とか返事を返した。

「私の名はサークと申します。」

『サーク殿、貴方の運命はこの先想像の及ばない道が続きます。苦難の道程になるでしょうが、諦めず進んで行くように・・・』

「私の運命とは？何かご存知なのですか。よろしければ教えてくださいませんか？」

『お教えできません。しかし、これだけは告げときます。この世は全て表裏一体で成り立っています。一つだけが正しい事はありません。多くの事を知り、広い考えで判断して行って下さい。』

「・・・わかりました。アルテシア様の意思に添えるか分かりませんが、自分で考えて悔いのない判断をしていきます。」

『今はそれで良いです。では、貴方たちに幸あらんことを・・・』
そう言い残し、気配は去っていった。

僕はこれから先の何が起きるか分からないが、何が起きても良い様に覚悟をした。

「サークさん！どうしてですか？」

「分からないが、神様の忠告だから真摯に受け止めておくよ。」

「いえ！そう言うことでなく、いや、それもありますが、何故にア

ルテーシア様の御名をご存知なのですか？」

「え！……そういえば何でだろう？」

神々の御名は、信仰される中心の位の高い者しか、知らないのが普通である。

故に、一般人は御名は知らずに信仰をしている。

「何故か自然に出てきたんだ。」

「そうですか。」

セシリアは納得出来ません！って顔をしてこちらを見ている。

僕は答える事も出来ないので、話題を変えた。

「それより、証を手に入れたなら、急いで二人の元に戻ろう。きつと心配しているからね。」

「そうですね。急いで戻りましょう。」

僕は、塔を降りていった。

12話（後書き）

ここまで読んで頂き、ありがとうございます。

王家の塔の話がもう少しで終る予定です。

もう少しお付き合いください。

これからも宜しくお願いします。

13話

・・・僕達は、階段を下りた。

1階まで下りると、床が光っていた。

床の上に二人で乗ると、光は強くなり、辺りに広がった。

光で眩しく目を閉じた。

目を開けると、僕達は塔の外に出てた。

「セシリア様、お帰りなさいませ。」

「セシリア、お帰り・・・それとサークも」

二人はそれぞれ声を掛けてきた。

「二人とも、ただいまあ。」

「ただ今戻りました。」

僕達はそれぞれ返事をした。

カルロは僕に確認してきた。

「サーク、どうやって塔の中に入ったんだ？」

「そうです。塔は王族しか入れないはずですよ。」

レイラも疑問を投げかけてきた。

「僕にも分からないんだ。気が付いたら中に入っていて・・・」

僕は素直に答えた。

「サークは常識の壁を超えるくらい、セシリアのことが心配だったか。」

カルロは茶化す様に言ってきた。

レイラはこのままでは話が脱線するかもしれないと思い、

「それより、セシリア様は証は手に入れられましたか？」

レイラはセシリアに向かって話しかけた。

セシリアは笑顔を浮かべて、右手の甲を見せた。

「ええ。この通り証を頂きました。」

「これで目的は達成できました。後はお城に戻って、正式に王位継承の儀式をすれば良いです。」

レイラは一先ず安堵を漏らした。

塔の中に入っていた時間が数時間であったが、今から森の外に出るのだけでも日が暮れるので、

「今日も僕の家泊まって下さい。今から帰れば、日暮れ過ぎには着くと思つので。」

僕の家泊まるように勧めた。

「そうだな。今日も泊めてくれ。」

「そうですね。またお世話になります。」

「ありがとう。今日もお願いします。」

上からカルロ・セシリア・レイラの順に返事があつた。

帰りの道中は、カルロがセシリアをからかったり（塔の中でサークと二人きりだった事）して、和やかに帰った。

家に着くと日が暮れえて、辺りが薄暗くなっていた。

家の中から光が漏れ、誰かがいることが窺える。

「父さん達が帰ってきているのかな？」

僕は独り言のように、呟きを漏らした。

「サークさんのご両親はどこに行かれていたのですか？」

セシリアは聞こえていたようで、父さん達の事を聞いてきた。

「森の反対の村に用事があって、出かけていたんだ。」

僕は家の中に入ると

「ただいまー、お客さんを連れてきたよ。」

家にいる父さん達に伝える。

「おかえりなさい。お客様って、どちらの方？」

奥から、優しそうな声で返事が返ってきた。

「母さん、ビックリしないでね。お姫様だよ。」

出てきた母さんに向かって伝えた。

「え！サークの彼女を連れてきたの？」

母さんは、ビックリしながら声を上げた。

セシリアは母さんの「彼女」の言葉で顔を赤くしながら、小さな声で何か呟いていた。

「……え！そんな彼女なんて、けど……ここは恥ずかしく無い様にご両親にご挨拶を……」

僕も「彼女」の単語にビックリし、慌てて否定した。

「違うよ。この国のお姫様！なんで彼女って話になるの。」

僕はセシリアが気分を害していないか、様子を窺った。

セシリアは僕の顔を潤んだ瞳でじっと見つめ

「そんなに直ぐに否定しなくっても良いのではありませんか？」

小声で何か言ってきた。

僕はセシリアの小さな声は聞き取り辛く、気分を害したと思い。

「ごめんね。母さんの早とちりで、気分悪くさせて」

「お母様の言葉ではないです！」

セシリアはフンって感じに顔を横に振った。

僕にはセシリアが何故に怒ったか分からなかった。

・・・僕は食事の席で、両親にセシリア達の紹介と今日の粗筋を説明した。

食事が終わり、セシリア達は親父達にいろいろと質問をしてきた。

「お母様はきれいな金髪ですが、王族の血筋なのですか？」

「さう？どうでしょう。遠いご先祖様に王族の血筋の方がいたかも知れませんが。」

「サークさんは、魔法が一切効かない体質と言っていました。幼い頃からですか？セシリア様の光の魔法が、効果あったのは何かある

のですか？」

「え！サークに魔法の効果があったのは本当ですか？生まれて今まで効果があったことは無かったのに。」

いくつかの質問が終わった頃、今まであまり喋っていなかった父さんが口を開いた。

「そろそろ夜も更けてきた。明日、王都を目指して帰るなら、あまり夜更かしをしない方が良い。」

そうして、解散しそれぞれの割り与えられた部屋に行って、休息をとった。

13話（後書き）

ここまで読んで頂き、ありがとうございます。

短い文ですが、これからも宜しくお願いします。

14話

皆が解散したあと、僕は両親にこれからの事について、自分の考えを伝えた。

「僕はセシリア達と王都に一緒に行こうと思う。」

母さんが僕に聞いてきた。

「サーク、急にどうしたの？今までそんな事、言ったこと無いのに」

「セシリア達と塔に行ってきたが、セシリアは国の為、人々の為に王になり、この国を笑いの絶えない平和な国にすると、真剣に語っていた。その話を聞いた時に、僕はこの方に仕えて支えていきたいと思った。そして塔の中で光の神アルテシア様に、これから先に苦難の運命が続くと言われました。今のまま、森の中で生活をしていても、その運命に吞まれてしまう。運命を切り開く為に、世界を知りたい。広い視野で物事を考え、判断をして後悔が無いようにする為に！」

両親は顔を見合わせて、頷き合い僕の方へ向いた。

父さんが僕に聞いてきた。

「サークよ、王都に行ってから、どうやって生活をするんだ？」

「セシリア達と王都に行ってから、何か仕事を探そうかと思っただ。」

「見つからなければ、セシリア様達のお世話になるのか？」

「いや、そんな事は考えていない。」

「人が生活するのはそんなに簡単ではないぞ。特に町では自給自足みたいな生活はほぼ無理だ。」

「しかし、このままだと何も出来ない。何もやらない。そんな未来は嫌だ。何事もやってみてから、後悔はしたい！」

父さんは僕が出て行くのを反対していると思い、つい感情的になって大きな声を、出してしまった。

「わかった。少し待っている。」

そう言うと、父さんは自分の部屋に行った。少し待つと父さんは戻ってきて、僕に一通の封筒を、渡してきた。

「昔、父さんがお世話になった方への紹介状だ。いままで喋った事は無かったが父さんは昔お城に仕えていた兵士だったんだ。仕事の関係で、王家の森にも来ていたから、母さんとも知り合いになれたんだが……」

ゴホン！

「話がそれたな。取り合えず、明日急に行く話でなく、しっかり準備をしてから旅立て。その間に父さんの方も、王都にいるその方に連絡を取っておくから。」

「……良いの？」

僕は反対していると思っていたから、紹介状の話を理解するのに間が空いてしまった。

「良いも、悪いもあるか。息子が世界を見て大きく成長をしようとしているのに、反対する親がいるか！男が一度家を出て行くんだから、故郷に錦を飾るまで帰ってくるなよ。」

「父さん、ありがとう。」

「もう一度言っておくが、出発は明日とか出なく、そうだな・・・一週間後だ。相手方に連絡し、返事を貰わなければいけないからな。」

「ああ、分かったよ。母さん急に言い始めてごめん。」

僕は父さんに返事をしてから、母さんの方を向いて謝った。

母さんは少し悲しそうな顔をしたが、直ぐに笑顔を向けて

「いいのよ。貴方が羽ばたこうとしているのだから、私は子離れをしなくっちゃね。応援しているわ。」

そうして、今夜は休んだ。

僕は次の日の早朝にいつもの鍛錬をしていると急に声を掛けられた。

「サークさん、おはようございます。朝から精が出ますね。」

「おはよう、セシリア。今日は早いね。」

セシリアは少し拗ねた様に

「別に今日が早いのではなくって、昨日が遅かっただけです。」

僕はそんな仕草が可愛いなと思いつつ

「そうか。それで何か用事？」

聞き返すと、セシリアは表情を曇らせて

「いえ、特に用事ではないのですが……ご迷惑でしたか？」

「そんなことはないよ。」

僕は、笑顔で返す。

「……………あ・その、今日王都に帰るから少しお話を出来たら良いな」と思いました。」

セシリアは顔が少し赤く染まり、返事に少し時間が開いてしまった。

僕は偶に時間が空いてしまうのがセシリアの悪い癖だな」と思っていた。

「サークさん、昨日の夜にご両親とお話されていた件ですが、偶然聞こえてしまって、最初に謝っておきます。すみませんでした。」

「いや良いよ。朝にはセシリア達にも伝えるつもりだったし。」

セシリアは恐る恐る聞いてきた。

「・・・では、サークさんは王都に来てくれるのですか？」

「うん。昨日も言ったけど、セシリアの理想を叶えたいと思っているから。」

「サークさん・・・」

セシリアは両手を胸の前で組み、感無量といった表情になった。

「おい、セシリアさん聞いていますか？」

どこかに意識を飛ばしている、セシリアは僕の言葉を聞いていないと思い、目の前で手を振りながら、声を掛ける。

「・・・」

セシリアは、ビックリするように意識が戻った。

「はいっ!」

「僕は王都に行くって言っても、直ぐには行けないんだ。準備の加減で一週間後ぐらいの後に出発になるかな。」

「そうですね・・・まだ、一緒にいられると思いましたが」

セシリアは少し寂しそうな顔を浮かべた。

僕は会話の中で、次々と表情の変わるセシリアを見て、感情豊かで

可愛らしいな」と場違いなことを考えていた。

その後、僕達は朝食を食べて、別れの時が来た。

「サークさん、この度は大変お世話になりました。ありがとうございました。王都に来られたら、いつでもお城に来てください。歓迎いたします。」

セシリアは深々と頭を下げてきた。顔を上げると素晴らしい笑顔だった。

「サークさん、セシリア様共々お世話になりました。王都に着かれて分らないことがあれば、いつでも尋ねて来た下さい。これが私の住所です。」

レイラはそう言うと、サークの手にメモ紙を握らせた。

「サーク、世話になったな。王都にきたらいつでも声を掛けてくれ。色々案内してやるから。」

カルロは、親指を立てて、歯を見せるように、ニッと笑い顔を見せた。

「皆、王都に着いたら連絡するから、その時は宜しくね。王都までの道中、気をつけてね。」

僕は皆が見えなくなるまで見送った。

14話（後書き）

ここまで読んで頂き、ありがとうございます。

これで、王家の塔はひと段落になります。

次の舞台は王都になります。

素直に王都に行くかは分かりませんが……

これからも宜しく願います。

15話・・・王都へ(前書き)

いつも読んでもらいありがとうございます。

設定に通貨を書き足します。

15話・・・王都へ

セシリア達が王都に戻って、1週間が過ぎた。

僕は父さんと約束したように、この1週間は旅立ちの準備をしていた。

父さんは僕を呼び、了承の返事が返ってきたと告げた。

「サークよ、王都にいるグレンバツ八さんから、お前を世話しても良いと返事を貰った。前にも言ったが、父さんが兵士をしていた時の上官になる。くれぐれも失礼のないようにな！」

「わかっているよ。それと今回の件は、ありがとう。」

「気にするな。この先は自分の力で切り開け。母さん、今晚は気合を入れて料理を作ってくれ。サークの旅発ちの祝いだ！」

「ええ、分かりました。腕によりを掛けて作ります。楽しみにしておいて下さい。」

・・・その夜は、いつもよりも豪華な食事となった。

次の日の早朝、僕は両親に見送られて、王都に向かって出発した。

僕は母さんの笑顔で見送ってくれたが、瞳に溜まっていた涙が印象に残った。

王都に向かうのには、乗り合い馬車を使う方法と、自分の足で歩く

方法があるが、僕は賤別を節約をする為、自分の足で歩いていく事にした。

僕の計算では馬車でいく倍の時間が掛かって、1週間あれば王都につけるだろう。

行き交う人々は様々で、行商人や旅人、傭兵と今まで森の周辺で生活していた僕には、目新しくうつつた。

夕方に差し掛かり、町が見えてきた。

僕はあの町で、今夜の宿をとろうと思い、足を早めた。

町に入ると、宿の場所を道端にいた主婦に尋ねた。

「すみません。ちょっと尋ねたいのですが……」

警戒心を抱かさない為に笑顔で声をかけた。

「うん？なんだ……」

僕は相手の言葉が止まったことを、不思議に思いながら

「今晚の宿を探しています。この町の宿が何処にあるのか、教えて教えて貰えませんか？」

「……宿とは言わずに家に泊りに来ないかい？」

「いいえ、初対面の方に泊めて頂くなんて、ご家族の方にもご迷惑をかけます。」

「そうだね・・・私がもう10歳若ければ・・・」

主婦は残念そうに呟いた。

「宿の場所だね。町の真ん中に向かえばすぐ分かるよ。1階が飲食店で2階が宿になって泊れるよ。」

僕は主婦にお礼を言って宿のほうへ向かった。

まもなく、主婦に言われた店が見えてきた。中に入ると、夕食の間でもあり、かなりの賑わいを見せた。

僕はマスターらしき人物に話しかけた。

「すみません。今晚泊りたいのですが。」

「いらっしやい。兄さん1人かな？」

「はい、そうです。」

「なら良かった。今日は行商の一行が入ったので、部屋がほぼ満席だったんだ。1人ならまだ行けるよ。」

「良かった。1泊いくらですか？」

「料金は先払いで4Sシルバーになるよ。食事は付いていないから、1階の食堂で注文してくれ。」

「わかりました。料金をここに置きますね。」

僕はカウンターの上に銀貨4枚を置いた。

「兄さん、これが部屋の鍵だ。受け取れ。」

マスターは僕に向かって、鍵を投げ渡した。

僕は鍵を受け取って

「では、部屋に荷物を置いてきます。」

2階の部屋に荷物を置きに行った。

15話・・・王都へ(後書き)

ここまで読んで頂き、ありがとうございます。

16話

・・・荷物を置く為に部屋に入ると、新しくはないが清潔感に溢れる内装に、好感を覚えた。

部屋の家具はベットと机、椅子というシンプルな配置だったが一泊のみと考えると十分快適だと言える。

僕は荷物を机の上に置き、夕食を食べる為に一階の食堂に行った。

ちょうど、夕食の時間帯で賑わっていた。

僕は隅に空いていた席に座り、近くにいたホールスタッフのお姉さんと呼んだ。

「すみませーん。注文して良いですか？」

「はい！只今参ります。」

直ぐにスタッフのお姉さんは来てくれて、メニューを渡してくれた。

「こちらがメニューになります。」

そう言うと注文を待っている。

周りを見ると、かなり忙しそうに、動き回っている。

僕はスタッフのお姉さんに

「注文が決まれば、呼ぶのでお仕事に戻って下さい。」

と言うと、お姉さんは間髪入れずに

「いえ！大丈夫です。お待ちしますよ。」

素晴らしい笑顔で応えてくれたが、周りの忙しさを見ると、不安になる。

「周りの方が忙しそうにしていますし、僕もゆっくりと注文を考えるので」

「そうですか、御注文の時は私を呼んで下さい。」

お姉さんは残念そうな顔して、仕事に戻っていった。

僕はどれにするか迷いながら、周りの様子を見ていた。

周りには子供から、お年寄りまで色々な年齢層の人達が、楽しそうに食事をしていた。

中には食べ終わった子供が席から離れて、好奇心を押さえ切れずに歩き回っている。

料理を決めて、近くにいるホールスタッフのお兄さんに声をかけようと、手を上げて呼ぼうとした。

「すみま……」

僕の言葉は、中断させられた。

先ほどのお姉さんに・・・

「はい！ご注文ですね。」

良い笑顔を向けて、僕の言葉を待っている。

「え！向こう側に居ましたよね？少し距離があるのに・・・」

「はい！プロですから、お客様をお待たせしません！」

「・・・そうですか。」

僕はそんな問題なのか？と疑問に思いながら、注文をした。

「では、お奨めディナーセットにします。」

「はい！お奨めディナーセットを1つですね。」

お姉さんは注文の確認取ってきた。そして僕に近づいてきて、耳元で小声で囁いた。

「食後に、私は如何ですか？サービスしますよ。」

・

・

・

・

・・・は？

僕の思考回路は、束の間の停止状態になってしまった。

「……え！ええ~~~~~！ お姉さん、冗談が過ぎるよ。」

ビックリしたが、僕はからかわれたと思った。

「結構本気なのにな」

お姉さんは、小声で何か呟いたが、周りの騒音で聞き取れなかった（いや、聞き取れなかった事とする）。

お姉さんは、厨房へ行き

「ご注文頂きました」

僕の注文を厨房へと通す。

料理が来るまで、暫らく待っていると、

ガッシャーン！！

食器などを引っくり返した様な音が響き渡った。

音の聞こえた方を見ると、小さな女の子が倒れており、その子の姉らしき女の子が起こそうとしている。

周りには、女の子がこけた拍子に引っくり返った食器が散乱している。

そして、近くに居た傭兵らしき男が引っくり返った料理で、ベトベ

トに汚れてしまっている。

男は額に血管を浮べて、怒りの表情になっている。

「こらガキ！何しやがる。ベトベトに汚れたやんけ！責任取れや！」

子供に向かって、怒鳴り散らす。

「すみませんでした。小さな子がやった事なので、この子は許して下さい。アイシヤも謝りなさい。」

「うっっごめんなさい……。」

姉は妹を必死に庇い、妹は泣きながらでも一生懸命謝っていた。

しかし、男は許す気も無い様で

「謝ってすむ問題か〜！」

僕はそんなやり取りを見ていると、腹が立ってきた。

「もう、許してあげて下さい。子供達も一生懸命謝っているじゃないですか。」

僕は立ち上がり、男に向かって声を掛けた。

周りは静かになり、僕に視線が集中した。

「あ〜ん、お前こいつらの何？ 関係ねーならすっこんでいろ！」

「確かにこの子達とは関係は無いです・・・が、貴方の態度に我慢が出来なかつたんです。」

男は気に障ったのか、僕を睨み付けてきた。

「お前、オレ様に喧嘩売ってんのか？」

「僕としては穏便に事を済ませたいのですが？」

「上等だ！」

男は僕に向かって、殴り掛かって来た。

バシイイツ

男の体格は、大柄で筋肉隆々のいかにも力自慢という感じの体格で、周りの人々は僕との体格の差で、勝負にもならないと思ったようで、今の光景は信じられないものを見てって顔になった。

僕は男の拳を、片手で意図も簡単に受け止めた。

男の拳をつかみ、関節を極めつつ捻った。

男は関節の痛みに耐え切れずに、その場で引っくり返った。

僕はそのまま関節を締め上げ、男に告げる。

「そろそろ、許して下さい。クリーニング代は僕が払いますから。」

そう言って、男に金貨1Gを渡す。

「わかったから、手を放してくれ！」

手を放すと男は逃げ去るように、店を出て行った。

僕は、姉妹の方に向かった。

16話（後書き）

ここまで読んで頂き、ありがとうございます。

王都には、真っ直ぐ行く予定がなにやらトラブルに巻き込まれました。

こんな文ですが、宜しくお願いします。

キャラ紹介2（前書き）

移動させました。

キャラ紹介2

バータック（リリア達の父親の商人）

歳	40歳
身長	178
体重	65

武器 父親譲りの商才

髪型 胸の辺りまである長髪で邪魔にならない様に何時もは編んでいる。

髪の色 青色

瞳の色 藍色

外見 40歳に見えないくらい若々しく見た目は20代後半。何時もは商人の鉄則「ニコニコ笑顔」を実践している。

特技 水魔法はD
商才はB

リリア（バータックの娘、アイシャの姉）

歳 15歳

身長 160

体重 ??? (本人の要望により秘密)

スリーサイズ 胸：平均以上 腰：細い お尻：平均

武器 なし

髪型 腰までの長さで何時も三つ編みにしている

髪の色 青色

瞳の色 藍色

外見 少し儂げな感じはするが、妹を守るために頑張る一面を見せる。今は可愛らしさが目立つが、数年もすれば10人中9人は振り返る美しさまで育つだろう。

特技 水魔法はD
料理はC

アイシャ (バータックの娘、リアアの妹)

歳 11歳

身長 140

体重 34

スリーサイズ・・・いらないよね？

武器 なし

髪型 ショートカット

髪の色 青色
瞳の色 藍色

外見 ショートヘアの似合う元気いっぱいの子。動く姿は微笑ましいが、大人しくしている時は将来が楽しみになるくらいの美少女。

特技 水魔法はD（習い始めたばかりで大したことは出来ない）
運動（姉より運動神経は良い）

17話

・・・僕は姉妹の方へ向かった。

「君達、大丈夫だったかい？」

「はい！大丈夫です。助けてもらって、ありがとうございます。ほら、アイシャもお礼を言いなさい。」

姉は、お礼を言ってきた。妹のアイシャは、姉の後ろに隠れるようにして、僕を見ている。

「どう致しまして。怪我が無かって、良かった。」

僕は安堵し、自然と笑顔がこぼれた。

アイシャは僕の笑顔を見た瞬間、姉の後に完全に隠れた。

僕はその様子に内心ショックを受け、

「僕の顔は、小さな子がビクリして、隠れてしまうのか・・・」

小さな声を呟いた。

・・・少し落ち込んだ。

「妹がすみません。私はリアアって言います。何か御礼をさせて下さい。」

リリアは名前を名乗ってきた。

「気にしなくてもいいよ。困った時はお互い様だし、僕が勝手にやっただけだから。」

「でも、そんな訳には……」

僕はリリアの前に手を出して、リリアの言葉を途中で止め、

「どうしても言うなら、困っている人がいれば、君が出来る範囲で助けてあげて。それが君から僕への御礼でいいよ。」

リリアは少し困った顔をし、

「それだと貴方に、何も返せません。」

「僕は前にある人と約束をされていて、その人は誰もが笑って過ごせる国になる様がんばる。僕はそれを手伝う。そんな訳だから、困った人が減ると約束を守るようになるんだ。」

「そうですか……分かりました。困っている人がいれば、お手伝いできる様がんばります。」

リリアは少し残念そうにしたが、僕にはっきりと答えた。

「お客様、ご注文の品です。お待たせしました。」

頼んでいた、調理がきたので

「僕はこれから食事するから、何かあったら言ってね。もしあの男

が戻ってくるようなら、今日はこの二階で泊まっているから。」

リリア達に手を振って、自分の席に戻ろうとしたら、小さな声で

「あ・ありがとう。」

アイシャがリリアに隠れながら、お礼を言ってくれた。

僕は自分の席の戻り、運ばれた料理を見た。

お姉さんは、配膳をしながら、話しかけてきた。

「貴方、なかなか強いよね。それに優しいし、家の宿で用心棒として一緒に働かない？お父さんに紹介するから。」

「僕は王都に行く途中なので、そのお誘いによる訳にはいかないんです。すみません。」

お姉さんは、残念そうにしたが

「なら、王都の用事が終わってからもいいから、どう？」

聞きなおしてきた。しかし、僕の目的は簡単に終わらないから、お姉さんに

「王都に行ったら、長くなるので駄目です。」

「そっか・・・なら、また今度来てね。」

そう言っと、いつもの接客の口調に戻り

「お待たせしました。ご注文の品はお揃いでしょうか？何か追加がございましたら、おっしゃって下さい。」

お奨めだけあり、見た目・香り・量ともにいい感じで、食べるのが
楽しみな料理だ。

僕は食事を終え、すごく満足していた。

席を立ち、二階の自分の部屋に戻ろうとした。

途中でお姉さんに呼び止められ

「夜の件は、何時でも言ってね。」

ウインクをしながら、言ってきた。

「あ……うん……また今度……」

僕は返事に困りながら、逃げるように部屋に戻った。

……数時間後

コンコン

ベットに横になって休憩していると、ドアをノックされた。

「はい。今行きます。」

僕はベットから起き上がると、入り口に向かいドアを開けた。

そこには、見たことの無い男が立っており、僕に頭を下げ、話しかけてきた。

「私の名前はバータックと申します。この度は、娘達を助けて頂き、誠に有難う御座います。失礼ですが、御名前を伺っていていいでしょうか？」

「僕の名はサークつていいいます。わざわざお礼に来られなくても良かったのに。」

「いえいえ、そんな訳にもいきません。それにお金を立て替えて頂いていると聞いています。」

バータックは僕の手に、小さな袋を渡してきた。

中を開けて見てみると、金貨10Gが入っていた。

「こんなに貰えません。僕は1Gだけ騒ぎを起こした男に、渡しただけです。」

「そんなことを言わずに、謝礼金を含んでいると思って受け取ってください。」

「いいえ！貰えません。お金を貰うために、あの子達を助けた訳ではないです。」

僕は完全に拒否をした。

バータックは少し考えて、名案を閃いたばかりに

「では、サークさんが王都までの護衛をして頂いて、その報酬で事でどうでしょう？私は行商の一行を纏めています。その護衛役が少し心許無いので、お願いできないでしょうか？」

何とかして、僕に受け取って貰おうと狙っている。

諦め無さそうなので、僕は護衛役の話を受けるようにした。

「そう言う事なら、護衛役を受けます。」

「おお！有難う御座います。では、明日の朝に合流して王都に向かいますよう。」

バータックに帰って貰い、僕は休んだ。

次の日の朝、一階の食堂でお姉さんと色々なやりとりはあったが、省かせてもらおう。

食事を済まし、バータックさんを探した。

バータックさんは一行を取り纏め、出発の準備をしていた。

「バータックさん、おはよう御座います。もう直ぐ出発ですか？」

「サークさん、おはよう御座います。そうですね、後一時間後ぐらいで出発できます。」

「おはようございます。昨日はありがとうございました。父が無理を言って、護衛役を引き受けてもらい、すみません。」

「お・・・おはよう」

リリアとアイシャもそれぞれ挨拶をしてくれた。アイシャは相変わらず、リリアの後ろに隠れながらだったが・・・

「二人ともおはよう」。バータックさん、僕も直ぐに出発できるように、準備をします。」

僕は自分の部屋に行き、荷物を取ってくる。

宿のチェックアウトを済ませると、宿のお姉さんが

「ありがとうございます。また、泊まりに来て下さいね。・・・
今度は、誘ってね。」

最後の言葉は、耳元で僕だけに聞こえる様に囁いた。

僕は、バータックさん達と合流し、王都を目指して出発した。

17話（後書き）

ここまで読んで頂き、ありがとうございます。

お気に入り登録が11件になり、嬉しいかぎりです。

登録してくれた方の為にも、もっと面白い文になるようがんばります。

これからも、宜しくお願いします。

18話

・・・王都を目指して出発した。

一行の人数は30人、6台の馬車に分かれている。

護衛役の傭兵は、僕を含めて6人で警戒をしている。

出発前に、皆にバータックさんから僕の事を紹介してくれた。

「皆も昨日の騒ぎは知っていると思うが、こちらのサークさんが私の娘達を助けてくれた。なかなかの腕前だと聞いたので、王都までの護衛に参加してもらった。短い間だが宜しく頼む。」

バータックさんは僕に目配せをし、一言話すように促した。

「僕はサークと言います。成り行きで引き受けましたが、引き受けただけ以上全力で頑張ります。」

続いて、バータックさんから護衛役のリーダーのオリオンに紹介された。

「オリオン殿、新たな護衛役を勝手に雇ったが、宜しく願います。」

「サークです。邪魔はしない様に気をつけます。宜しく願います。」

「バータックさんが雇い主ですから、構いません。これで報酬が減

ってしまったら、問題ですが。」

「それはもちろん。契約通り、お支払いをする。」

「なら、問題はありません。むしろ護衛役が増えて楽が出来ます。」

そう言って、オリオンは笑い声を上げた。そうして、オリオンは僕の前に手を出し、握手を求めてきた。

「宜しく。」

僕はオリオンの手を握り返した。その時、オリオンは僕を試すように関節を極めようとしたが、僕は平然と受け流した。

「いきなりの挨拶ですね。」

「すまん、すまん。少し試させてもらった。うん、足手纏いにはならない様だな。君も戦力として考えるから、得意な武器、魔法を教えてくださいかな？」

「剣術と体術の心得は有ります。魔法は使えません。」

「なら、前衛が基本だな。王都までだが、俺達のパーティーの指示に従ってもらう。」

「ええ、わかりました。」

「よし！パーティーメンバーを紹介しておく。こつちへ。」

僕はオリオンに連れられて、メンバーの紹介を受けた。

出発後、各馬車に一人ずつ護衛に付いた。

格備兵はそれぞれ馬に乗っているが、僕はバータックさん達の馬車に乗せて貰っている。

僕は徒歩で王都を目指していたが、護衛の名目で馬車に乗れたので、バータックさんにお礼を言った。

「バータックさん、有難う御座います。王都まで徒歩での旅を考えていたので助かります。」

「いえいえ、娘達の受けて恩に比べれば大した事無いです。こちらが御礼をする立場なのに、逆に護衛をして頂くことになって、すみません。」

僕は荷台の中に居るリア達にも話しかけた。

「王都まで一緒に馬車に乗るけど、我慢してね。」

「そんな事は無いです。逆に一緒に居れて、すごく嬉しいです……！」

リアは直ぐ返事をしたが、最後の台詞を言って、頬を染めて下向きに俯いた。

「嫌じゃないから……」

アイシャはやはりリアに隠れながら、返事をくれた。

「昨日、あの男に怖い目に合わされたから、男が嫌いになったのかな？」

アイシャは僕をまともに見てくれないから、少し落ち込んだ。

「いや、そうじゃないよ。アイシャはもともと顔見知りな性格だが、あれは嫌っているというより、むしろ恥ずかしがっているんだよ。」

バータックさんが慰めてくれた。

そんな会話をしながら、馬車は森の中へと進んでいく。

森のかなり深いところまで進むと、バータックさんは馬車を止めるように指示を出し、

「皆、この辺りで昼食の為の休憩をとろう！」

バータックさんは昼食の準備を始め、料理が出来るまで待つ様になってきた。

「サークさん、私が昼食を作るので出来るまで、子供達を見ていてくれませんか？」

「ええ、分かりました。リリア、アイシャ、他の子たちのところに行こう！」

僕はリリア達と一緒に、他の馬車に乗っていた子供達と合流し、面倒を見ている。

子供達の人数は全員で11人で、リリアが最年長で面倒を見ている。

僕はそれを離れたところから、見ている。

子供達は、追いかけてっころしき遊びをしていて、楽しんでいる。

少しして、子供達の人数が少なくなった事に気が付いた。

「リリア、ちょっといい？」

リリアに声をかけて、子供達の行方を聞いた。

「12歳ぐらいと10歳ぐらいの男の子達がいらないけど、何処に行っただか知っている？」

「え！ロロア達は皆と、追いかけてっころしていた筈ですが？」

リリアは追いかけてっころしているメンバーを見て慌てだした。

「い・いなくなっている。私、探してきます。」

僕はそんなリリアを止めて、

「僕が探してくるから、子供達をつれてバータックさんに伝えてきて。」

「はい！皆集まって！」

リリアは子供達と一緒に、バータックさんの元へといった。

僕は森の中へと分け入って、ロロア達を探し始めた。

「おーい！ロロアー！何処に行ったー！出ておいでー！」

森の中で大声で呼びかけているが、何の返事も無い。

暫くして、馬車の方角から

ガツオオオオオオオオオ

雷のような天を裂く、咆哮が響き渡った。

僕はその畏怖さえ抱く咆哮を聞き、すぐさま馬車へと駆け出した。

ピツカツ！！！！

馬車の方角が光に包まれた。

ドツゴオオオオオオン！

直後に響く爆音！

僕が、馬車に着いた時には、地獄絵図となった光景が広がっていた。

18話（後書き）

ここまで読んで頂き、ありがとうございます。

今回は戦闘になりますが、満足に書けるか自信がありません。

どうなるか自分でも分かりません。

がんばって書きます。

これからも宜しく願います。

19話(前書き)

戦闘シーンがこの話で終わりませんでした。

19話

・・・地獄絵図となった光景が広がっていた。

馬車が留めていた広場には、爆発で出来た大小様々なクレーターが無数にあり、馬車は殆どが原型を留めていないほど大破していた。

周りには赤く血の付いた、肉片らしき物が散乱していた。

その中心に2体の、大型の獣がいた。その獣は体長が3メートルをゆうに超える大虎で、白く輝く体毛に怒りの雷を纏っている。

その姿は神々しく、感動とそれ以上の畏怖を与える。

「・・・ライオウ！」

僕は、その名を呟いた。

雷神の落とし子・大陸の覇者・獣の王などの別名を持つ高ランクの幻獣であり、間違っても個人で対峙するレベルではない。1体でも国の軍が必要であり、それでも返り討ちにあう可能性がある。

「何故こんなところに・・・」

「サークさん！」

僕を呼ぶ声がし、振り返った。リア達はオリオン達に守られ、無事だったみたいだ。

「リリア、無事だったかい？」

僕は皆がいる方へ、向かい合流した。

生き残ったのは大人が3人、子供が4人、それとオリオンのパーティーが3人だった。

皆は大小様々な傷を負っているが、命の危険性は無いようだ。

アイシャは気を失って、バータックに抱かれている。

僕はオリオンに状況を尋ねた。

「何故ライオウと戦いになっているのですか？」

オリオン達も、負った傷を癒しの魔法で治療している。

「わからん！突然の咆哮と同時に雷が降り注いできた。咄嗟に防御魔法を張ったが、雷の衝撃を防ぐだけで精一杯だった。直撃を食らった奴は、防御をしてもしなくっても、黒焦げのバラバラだ。」

オリオンは悔しそうに言ってきた。

「その後に、奴ら飛び込んできて俺らを、紙切れ同然に薙ぎ払っていった。」

「・・・原因がわからないと戦うしかないか。」

僕は覚悟を決めた。ライオウの放電現象は怒りの象徴であり、辺りの動く者全てを破壊尽くすまで収まらない。

「無理だ。逃げるぞ！」

オリオンの判断は間違っていない。ライオウを相手するぐらいなら、一騎当千を体現する方が現実的である。

しかし、僕はこの状況で皆が逃げ切るのは無理だと判断した。

「そうです。逃げましょう！しかし皆が逃げる為に、時間を稼ぐ必要があります。」

「・・・僕が稼いできます。」

「しかし・・・」

オリオンの言葉を遮って、僕は喋った。

「このままじゃ、全滅します。1人でも多く助ける為です。」

オリオンは少し考えて、覚悟を決めた顔になった。

「わかった。しかし、相手は2体だ。俺がもう1体は受け持つ。セイ、ルイーズは皆を守って逃げる！」

セイとルイーズは顔を見合わせて、頷き合った。

そしてセイはオリオンに言い放った。

「俺達はパーティーだろ、一緒に戦うぞ。」

「そうよ。ここで逃げてても貴方達がやられたら最後、追いつかれて全滅よ。サークが言った様に、1人でも多くの人を逃がすには、少しでも時間を稼いで遠くに逃げる事だけよ。」

ルリーズも戦う覚悟を決めていた。

僕はオリオンに

「いいメンバーですね。」

「ああ、最高のメンバーだ。たまにリーダーの命令を聞かないがな。セイはサークと組んで右をやれ。ルリーズは俺と組んで左をやる。」

「なるほど。じゃ、僕もリーダーの命令を無視させて貰います。」

「なに？」

「セイさんはオリオンさん達と3人で左をお願いします。右は僕1人で相手します。」

「無茶だ！」

「慣れない人と組んでも、連携どころか邪魔し合って、動きが鈍くなります。それなら1人の方が動きやすいです。」

「ライオウが1体なら、時間を稼ぐ自信があります。」

僕はこんな時だからこそ、自信ありげに笑顔で返した。

オリオンは僕の自信ありげな笑顔を見て、信頼してくれた。

「サーク、そんな大口を叩いたんだから、途中で泣き言を言つなよ！」

僕はバータックさんの方を向き、

「という事で、僕達は時間を稼いできます。その間に出来るだけ遠くに逃げて下さい。」

「すまない。サークさん私が護衛に誘つたばかりに、こんな目に合わせてしまって。」

「気にしないで下さい。最初に言った様に全力やります。」

僕は泣き顔になっているリリアにも声をかけた。

「リリア今は辛いけど、全力で走って逃げるように。悲しむのは後から出来るからね。」

頭を撫でながら、諭すような口調で。

それを見ていたオリオンは、準備完了とばかりに

「いくぞ！」

気合を入れてライオウの方へ向いた。

「じゃ、行ってくるよ。」

僕も残されたりリア達に、言葉を告げた。

ライオウ達も僕達の事を捕捉していたみたいで、こちらを威嚇している。

「僕が最初に突っ込んで、右のライオウを引き離します。その後で左のライオウをお願いします。」

「待て、サーク！そんな事をしたら雷の餌食だぞ。お前、魔法が使えない言っていたのに丸裸で突っ込む気か？」

「オリオンさん、それについては考えがあります。見ていて下さい。」

そう言うと、僕はライオウ達に向かって駆け出した。

シュンッ

~~~~~

オリオンは自分の目で見たのが、いや見れなかったのが信じられなかった。今まで色々な戦士、モンスターと戦ってきたが、目の前で消える奴なんていなかった。

しかし、サークは目の前で消えた様なスピードでライオウに向かっていった。

「なんて奴だ。実力を見誤っていた。」

セイも驚きを隠せないようだ。

「あいつ、凄いな！1人でやるって言つたのも、口だけじゃないな。」

ルイズは魔法を感知できなかった事に驚いていた。

「あの子、一切魔法を使ってない？身体能力だけであの動き！」

~~~~~

ガツキンーーーー！

僕は頭部を狙った横薙ぎの斬撃は、爪によって防がれた。しかし、そのまま力を込め

「とりゃーーーーー！」

ライオウの巨体を吹き飛ばした。

「今です。もう1体をお願いします。」

「ああ！まかせろ。」

オリオン達はもう1対のライオウと対峙していた。

19話（後書き）

ここまで読んで頂き、ありがとうございます。

次の話で戦闘が本格的におこないます。たぶん・・・

文才が欲しいです・・・

これからも宜しくお願いします。

20話(前書き)

すみません。今回も戦闘がお終わりませんでした。

10/24に内容の変更をします。

バータックを生かしておきます。

20話

・・・僕とオリオン達は、それぞれのライオウと対峙していた。

僕はバータックさんに、逃げる様に指示を出した。

「バータックさん、今のうちに遠くへ！」

「はい。すみません、後はお願いします。」

バータックさん達は、急いで離れようと駆け出した。

ガオオオオオオオオ

それに気が付いたライオウ達は、同時に雄叫びを上げ、雷が周囲を包む様に降り注いできた。

ドツゴオオオオオオオオオオ

先に駆け出した1人が、雷に巻き込まれ声を上げる間もなく、黒焦げになり息絶えた。

ライオウは僕達を逃がさない様に、雷による結界を周囲に張り巡らした。

この結界はライオウ自ら解くか、ライオウが意識を失わない限り解けることが無い。

僕はオリオン達に向かって

「オリオンさん、僕達の計画は潰されました。無理でも無茶でもして、この2体を倒さないと全滅します。そっちは攻撃より防御を中心に戦闘をし、生き残ることを考えてください。」

「お前はどつするんだ？」

「今言ったように、こいつを何とかして、そっちに合流します。」

僕は剣を構えて、気合を入れた。

「ハアーーーーー！行くぞ！」

シュン

先ほどと同じように、目にも映らない速度でライオウの側面に回り込み、斬撃を打ち込んだ。

ガキンッ

やはり、先程とは違い油断なく、攻撃を止められてしまう。

「無理か。なら、連撃でどつだ！」

シュッシュッシュッシュッシュッ

ブオーーーン

僕の連撃はライオウの一薙ぎで弾き返された。

「くっ！」

僕は体ごと、後ろに飛ばされて体勢が崩れた。

ガゴオオオオ

ライオウは体勢の崩れたところを狙い、雷球を吐いてきた。

僕はそれを避けられず……いや、避けようとしなかった。

ドツゴオオオオン

~~~~~

ライオウは、もう仲間の方に向おうと、体を返した。

「まだ終わっていませんよ。」

ライオウは、本来は聞こえてこない声に警戒し、砂煙の中を見据えた。

今までの経験上、雷球をまともに当たって、姿が残っていた人間なんていなかった。

まして、他の生物でも生き残ることすら、稀であった。

では、今対峙しているのは何者か？

ライオウは生まれて始めて、未知なる者への恐怖に似た感情が生まれた。

~~~~~

僕は砂煙が晴れて、ライオウを見ると今までとは違い、体勢を低くし警戒していることがわかる。

冷静に状況を整理すると、雷球を受けて無傷でいることに警戒していると思う。今ここで攻め立てなければ、勝機が無くなる。

そこからは、人としての限界を超えた攻防を一進一退で繰り広げていた。

~~~~~

オリオン達はサークの言った様に、無理に攻めずに防御を中心に立ち回る。

オリオンは自分達の実力より、サークの実力の方が格段に上だと認め、サークが来るまでこの1体を惹きつけ様とした。

セイがいきなり大声で叫んだ。

「サークがやばい！」

横目で見てみると、体勢の崩れたところに、雷球を受けていた。

「サーク！」

そして、サークの相手していたライオウが、こちらに向って来ようとした。

「くそ！」

このままじゃ2対に瞬殺されるかも、しれないと思ったとき、

「まだ終わっていませんよ。」

声が聞こえて、ライオウはサークがいた方に向き直した。

「生きていたか。しかし、どうやって？」

オリオンはあの雷球からどうやって生き延びたのか、疑問に思ったが答えはこの場面を生き残って、後で聞けばいいと思うようにした。

その後は、サークの動きは人としての限界を超え、ライオウと攻防を一進一退で繰り返していた。

オリオン達はその動きに驚きを超え、呆れるしかなかった。

しかし、同時にサークに希望を持ち始めた。

「お前達、サークが1人であれだけの活躍をしているんだ。俺達も時間稼ぎぐらい満足にするぞ！」

「まかせろ！」

「わかっているわ！」

セイ、ルイズはオリオンの掛け声に、返事を返してきた。

だが、相手はライオウ。国の1軍を相手出来る様な高ランクの幻獣であり、現実是非情である。

セイがライオウの爪に裂かれて絶命した。

「セーーーーーイ！」

オリオンが駆け寄ったが、セイは即死だった。

「ライオウ！セイの仇だー！」

オリオンはライオウに突っ込んでいった。

~~~~~

セイがライオウの爪で遣られて、オリオンが叫びながらライオウに突っ込んでいく。

「オリオン！止まれーーーー！」

僕の声は届かず、辺りに響いただけであった。

オリオンはライオウの雷球を正面から受け、手足の先を残して消失した。

ライオウは残ったルイズに飛び掛り頭を食い千切って、バータックさん達の方へ向った。

「・・・やめろ・・・やめるんだ！」

僕は必死に叫んだ。

直ぐにバータックさん達のところに向いたが、こっちのライオウもその隙を狙って攻撃を仕掛けてくる。

向ってきたライオウに1人は、完全に恐怖に飲まれ、我先にと逃げ出した。

「見逃してくれ！」

無駄だと知りつつも、ライオウに声を掛けた。

ライオウは、動いている人間に落雷を浴びせた。

ゴロゴロ、ドッカーーーーン！

「ギアッ！」

一瞬の断末魔。雷で出来た、クレーターだけを残し灰すら残らなかった。

バータックさんは子供達の前に立ち、庇うように手を広げた。

「子供達は助けてくれ！」

子供達には、父親として最後まで誇れる姿を残すかの様に、ライオウを見据えていた。

ライオウは一瞬止まり、バータックさんを睨み付けた。

そして、ライオウはバータックさんに飛び掛ろうとした。

「ウオオオオオ！」

バータックさんは無謀にも、ライオウに向って突進していった。

ライオウは予想外の突進に目測を誤り、バータックさんを跳ね飛ばした形になった。

結果、バータックさんは即死を逃れ、全身打撲（一部骨折あり）の気を失う結果となった。

しかし少しの時間稼ぎにしかならず、次に子供達が狙われた。

1人、2人と次々とライオウの犠牲となり、残りはリアとアイシヤのみとなった。

ライオウは何の躊躇いも無く、2人に対して振り上げた爪を下ろそうとした。

「キャーーーーー！サーーークさーーん！！！」

「やめる————!!!!」

その時、僕の視界が暗転し、意識が……

20話（後書き）

ここまで読んで頂き、ありがとうございます。

もう少し、戦闘にお付き合ってください。

これからも宜しくお願いします。

21話(前書き)

今回は視点が変わるのでわかり難いかもしれません。

最初に謝っておきます。

すみません。

21話

・・・僕の視界が暗転し、意識が・・・

~~~~~

私はアイシャを庇いながら、叫び声を上げた。

「キヤーーーーー！サーークさーん！！！」

私はここで終わりなんだと思い、今までの記憶が走馬灯の様に思い出される。

生まれて14年だったが、悔いが無いように生きてきたつもりだったが、好きな男の子がいないのが残念だった。

しかし、今回知り合ったサークさんの事をもっと知りたいと思っていたのは、恋心だったと思う。

なんだ、私ちゃんと好きな人が居たんだ。

実際にもしもの話はないが、もっと早くに知り合えていたら、恋人になれたかな？

そんな事を考えていた。そして、気絶からまだ目を覚まさない、アイシャに小さな声で

「ごめんね。貴女を守って上げれなくて。お姉ちゃんを許してね・・・」

私はなかなか来ない衝撃に、不信に思い上を見上げた。

すると、ライオウの攻撃が途中で止まっている。

よく見ると、私達の周りにドーム状の光の壁が出来ており、ライオウの攻撃を防いでいる。

私はどうなっているのか分からず、サークさんの方を見ると、左手を私達の方へ向けている。

「サークさん、後ろ！」

サークさんが戦っていたライオウが、後ろから飛び掛ってきた。

ガオーー！

サークさんは体を少し捻り、左手でライオウを受け止めた。

ガシッ！

サークさんは自分の何倍もあるライオウを捻り倒した。

ドツシイイン

その光景は、物理の法則を無視した信じられない光景だった。

サークさんは私達の前を歩いて近くに来て、もう1体のライオウと

戦い始めた。

殆どの攻防は見ることも出来ない速度でおこなわれている。

時々立ち止まった時に見せる姿は、サークさんが戦闘を有利に進めていることが分かる。

途中から、先程倒されたライオウも起き上がり、一緒に攻めてくる。

それでも、サークさんは傷一つ負う事も無く、ライオウより格上の存在であることを見せ付ける。

2体のライオウ達は段々と傷を負い、動きが鈍くなってきた。

~~~~~

ライオウは確実に敵を殲滅する為に、弱い者から倒そうとした。

最後の子供達をこの攻撃で終らそうとしたが、子供達の周りに結界が張られた。

ライオウは自分の攻撃を防がれる事は無いと思っていた。

しかし、自分の攻撃が防がれてしまい、そして向こうで戦っていた相手が、こちらに歩み寄り、接近戦を挑んでくる。

仲間が攻撃を仕掛けたが、止められて、逆に倒されてしまった。

ライオウは今までの人間を思い返したが、戦いにならず、一方的な虐殺・・・いや、単にゴミを除ける様に掃ってきただけだった。

ライオウは、サークを人外の者と認識し、同時に敵と認めた。

全力で殲滅する為、持てる全ての力、能力をぶつけた。

途中からは2体で攻撃をしたが、避けられ、無効化され通じなかった。

ライオウ達は、傷が増え動きが鈍くなっていった。

何を相手にしているのわからなかった。

人の形をしているが、攻撃が全く効かない。

効かない処か、雷撃を無効化される。

今までにない、未知なる者への恐怖に支配される。

少しずつ傷付けられ、削られていく体力。

大陸の生命の中で高ランクに位置し、今まで立ち塞がる者と出会った事が無かった。

しかし、目の前にいる者は違った。ライオウ達は死を覚悟し、大人しくなった。



「……うん。」

わたしは目が覚めた。

目の前には、お姉ちゃんが涙目になって何かを見ている。

わたしは何時の間に寝ていたんだろう？不思議に思いながら、何があつたか思い出そうとした。

確か、居なくなったロロア君達をサークお兄ちゃんが探しに行き、わたし達はお姉ちゃんと一緒にお父さんに言いに行つたんだ。

お父さん達がいる所の手前で、ロロア君達は小さな白い猫さんを虐めていた。

小さな猫さんは脅えて、震えていた。

わたしはそれを見て、怒りを覚えて

「ロロア君！猫さんが可哀想よ。止めてあげて。」

言うのと同時に小さな猫さんを抱きかかえた。

ロロア君達はわたしから小さな猫さんを取り戻そうと手を伸ばしてきた。

「アイシャには関係な……」

ガッオオオオオオオオ

言葉の途中で、咆哮で掻き消された。

ピツカツ！！！！

ドツゴオオオオオオン

そして、ロロア君達は光と爆発で消え去った。

その後大きな白い猫さんが出てきて、小さな猫さんは駆け寄っていった。

大きな猫さんは愛しそうに小さな猫さんを嘗め回す。

その先、わたしは地獄を見た。

怒りに狂った様に大きな猫さんは、みんなを引き裂いていった。

わたしの記憶はここまでだった。

そして、記憶を思い出して整理してところで、わたしは凄く気分が悪くなり、戻しそうになったがお昼前でお腹が空いていたので、嘔吐はしなかった。

「お姉ちゃん、わたし起きたから。」

お姉ちゃんに、起きたことを伝えて離してもらった。

サークお兄ちゃんの方を見ると、あの大きな猫さんに剣を向けて、

斬ろうとしている。

「お兄ちゃん、ダメ〜！」

大声で叫んだ。

サークお兄ちゃんの剣は途中で止まり、こちらに顔を向けた。

ビクッ！

わたしは、驚いた。サークお兄ちゃんの顔には感情が無かった。そして、瞳は金色に輝いていた。

しかし、直ぐに瞳の色は黒っぽい藍色になり、いつもの表情になった。

わたしは安心し、サークお兄ちゃんに話した。

「その大きな猫さんはお父さんとお母さんなんだよ。ロロア君達の子猫さんを虐めたから、怒ってきたんだよ。」

~~~~~

「お兄ちゃん、ダメ〜！」

・・・僕の意識は覚醒し始めた。

## 21話(後書き)

ここまで読んで頂き、ありがとうございました。

## 22話（前書き）

今回は文が短いです。

すみませんが、お願いします。

10/24に変更します。

20話の変更から読んで頂けるように、重ねてお願いします。

## 22話

・・・僕の意識は覚醒し始めた・・・

僕の目の前には、ボロボロに傷ついたライオウ達が、諦めた目でこっちを見ている。

そして、リリア達の方を見ると、アイシャは一瞬、何か脅えた様だったが、僕に一生懸命に喋りかけてきた。

「その大きな猫さんはお父さんとお母さんなんだよ。ロロア君達の子猫さんを虐めたから、怒ってきたんだよ。」

今までアイシャは、僕に殆ど喋ってくれなかったが、この時ははっきりと、言葉を告げた。

「サークお兄ちゃんも、虐めたらダメー！」

僕は今の状況を整理してみる。

取り敢えず、ライオウ達は傷付き、戦えるほど動けないみたいだ。

そして、どうやったか分からないが、僕がやったみたいだ。

そして、リリアとアイシャは無事だった。

バータックさんは先程跳ね飛ばされた所から動いていない。

バータックさんの元に駆け寄り、息を確認した。

幸い息はあつたが、かなり危険だ。

バータックさんを抱えて、リリア達の元に移動させた。

「お父さん！」

リリア達はバータックさんの元に寄り、声を掛ける。

「う・う・う・う・う」

バータックさんは意識が無く、辛うじて呻き声を発するだけであった。

僕は今一つの判断をしなければいけない。

傷付いたバータックさん達をどうするか？

傷付いたライオウ達をどうするか？

皆の仇として討つべきか、それとも見逃すべきか。

確かに皆はライオウ達に無残にも引裂かれ、殺された。

しかし、此方が先にライオウの子を虐待して、親を怒らせた。

ライオウの生態は、家族愛に満ちていて自らが訳も無く、他の生物に攻撃を仕掛けてこない。

そのことを考えると、攻撃される理由はあつたと思う。だが、たと

え出会って間もなかったとしても、自分の仲間達が殺されて、しょうがないとは割り切れない。

僕は何が正しく、何が間違っているか、迷いに迷った。

最初に虐待した側、虐待の報復で惨殺した側、殺された敵討ちする側……

この様な負の連鎖は何処かで断ち切らなければ、何処までも続き不幸な結果しか生まない。

僕は自分の考えだけでなく、リリア達にもどう考えるか確認を取ってみる。

## 22話（後書き）

ここまで読んで頂き、ありがとうございます。

時間が無く、書きたい事がろくにかけていません。

## 23話(前書き)

更新が遅くなつてすみません。

20話から少し話を変えました。

お手数掛けますが、もう一度読んで頂けるようお願いします。

## 23話

・・・僕は自分の考えだけでなく、リリア達にもどう考えるか確認を取ってみる。

「アイシャ、話してくれてありがとう。ライオウ達が何故襲ってきたか、之で分かったよ。」

僕はこのままライオウ達を見逃す、いや和解するべきだと思う。

「リリア、アイシャ、君達はライオウ達をどうしたい？」

リリアは事情を聞いて複雑な顔になって答えた。

「わたしは・・・皆の仇を討ちたいと思う気持ちと、わたし達が先に手を・・・わたしは・・・どうすれば・・・」

リリアは最後に涙を浮かべ、言葉を詰まらせた。

アイシャはリリアに抱きつき、声を掛けた。

「お姉ちゃん、泣かないで。わたしも・・・」

アイシャも涙声になり声を詰まらせた。

僕は後悔をした。2人の姉妹を泣かせてしまった事に。そして、安易に2人に聞いたことに。

僕は気付いた。僕の中で無意識に罪から逃れようとしてしまった。

2人の思いを聞いて判断するのは2人の意見を尊重するのではなく、単に責任を押し付けているに過ぎない。

「ごめん・・・」

僕は2人に謝った。そして、僕が全てを背負う覚悟をした。

僕は2人に告げた。

「ライオウ達とはこれ以上争わない。もちろん、皆の仇も取らない。」

リリアは少し落ち着きを取り戻し、聞いてきた。

「でも・・・」

僕はその言葉を遮り

「皆の死は残念で悔しい。しかし、こちらにも非がある。薄情に聞こえるかもしれないが、不の連鎖を何処かで止めないと、争いが絶えない。残された家族や友人の方に憎まれ、非難されると思うが、これが僕の決めた事だよ。」

僕は2人の目を見て

「僕はこの事から逃げない！後からいくらでも、非難を、憎しみを受ける。だから、ライオウとは戦わない。」

僕はこれ以降の覚悟を決め言い切った。

リリアは力なく小さな声で答えてくれた。

「・・・はい」

僕はリリア対して、一つ質問した。

「リリア、君は回復魔法が使えるかい？使えるならバータックさんに掛けて。」

リリアはハツとし、慌ててバータックさんに魔法を掛けようとした。

「ああ！お父さん、ごめんなさい！・・・癒しの水よ、彼の者の傷を癒し給え。」

バータックさんの顔が穏やかになっていく。

それを確認し、僕はライオウ達の元に行く。

ライオウは人語を理解するほどの知力があるので、言葉を掛ける。

「ライオウよ、今回の件は此方の子供達が原因となり、申し訳ない。今回はこの辺で引き上げてくれないか？僕もこれ以上争う気は無い。」

ライオウ達は、先程まで纏っていた怒りを表す雷を解除している。

「ガウツ」

小さく吼え、返事する。

「しかし、これだけは覚えておいてくれ。貴方達が家族を思っ  
て怒りに狂うように、今回殺された人にも悲しみ、憎しみを思う人が  
いることを。」

ライオウは自分の前脚に牙を立て、傷付けた。そして其処から流れ  
出た血が結晶となり、差し出してきた。

それは、【ライオウの結晶】と呼ばれ、高価な宝玉であり、又ライ  
オウの忠誠を表す物であった。

「これは、お詫びの気持ちなのか？」

ライオウは首を横に振り、否定してきた。

「なら何故にこれを僕に渡す？」

手に持った結晶をライオウに返そうと伸ばすと、ライオウは僕が受  
け取るように、手を押し返した。

「僕に持っておけと言っのか。」

ライオウは肯定の意味で首を縦に振る。

「分かった。ではこれは預かっておくよ。」

そう言うと、ライオウ達はゆっくりと森の奥に去って行った。

## 追記

### 【ライオウの結晶】

・・・世界でも数の少ない宝玉であり、魔力増強媒体となる。

真紅の球体の中に雷が絶えず舞っている。

結晶を作ったライオウが死ぬまで壊れることが無い。死ぬと中の雷が消え、硝子玉程度の強度なる。

ライオウ達の世界で上下関係をはっきりさせて、無駄に争わないようにする為の物であると考えられる。

又、言い伝えによると、はるか昔に傷付いたライオウの子を、助けた小さな女の子が結晶を貰い、大切に持っていた。大人になり平和に暮らしていたが、ある日突然自分の町が戦火に巻き込まれた。町の外に数万の敵兵に囲まれ、これまでと思われたときに数体のライオウが敵兵を退けた。その内の1体が女の子の元に行き、安否を確認し去っていった。その後その町が危険に曝された際にはライオウが度々救ってくれたという。

## 23話(後書き)

ここまで読んで頂き、ありがとうございます。

更新が遅くなってすみません。

まだまだ続きますので、宜しくお願いします。

## 24話

・・・ライオウ達はゆっくりと森の奥に去って行った。

僕はリリア達の元に戻って声を掛けた。

「バータックさんの顔色も良くなったけど、近くの町に行ってお医者さんに診てもらおう。」

リリアは疲労で辛そうな顔色だったが、はっきりと返事をした。

「はい。」

アイシャは心配そうな顔で聞いてきた。

「お父さん、だいじょうぶ？」

「ああ。だいじょうぶだよ。リリアが一生懸命魔法を掛けてくれたからね。念の為に医者さんに観てもらうんだよ。」

「うん」

アイシャは納得し、大きく頷いた。

僕はバータックさんを背負い、リリア達に声を掛けて歩き始めた。

次の町まではこのペースで数時間歩けば着くだろう。

しかし、空気が重い。あんな事があった後だから仕方が無いとはい

え、気が滅入る。

少しでも会話をして、雰囲気を変えようとした。

「・・・えくと、アイシヤが普通に喋ってくれて良かった。僕を避けているのかなって思ったし。」

「え！そんなこと無いです・・・」

アイシヤはやっぱりリアの後ろに回り込み、小さな声で答えてきた。

「う！避けられている。」

少しトーンの落ちた声を出した。

「この子、恥ずかしがっているだけです。さっきもサークさんのこと、お兄ちゃんって呼んでいたでしょう。」

「あう、お姉ちゃん余計なこと言わないで！お姉ちゃんも昨日の夜に助けてもらってから、何回もサークさん、サークさんって言うてるくせに。」

「アイシヤそれは内緒でって今日の朝に約束したでしょう！」

そんな姉妹の会話で先程までの重い雰囲気が無くなった。

「う・・・うん・・・」

背中からバータッククさんの声が聞こえてきた。

「気づかれましたか、体はどうです？」

僕はバータックさんに声を掛けた。

「あ！サークさん、すみません、自分で立てますから、降ろしてください。」

バータックさんは僕の背中から降りようとしたが

「無理をしないで下さい。リアの回復魔法で少しは回復しているかもしれませんが、医者に見てもらうまでは大人しくして下さい。」

そう言って止めた。

「お父さん、無理しないで！」

娘達に言われ大人しくおぶさった。

「・・・サークさん、他の子はやはり・・・」

バータックさんは言い辛そうに聞いてきた。

「はい・・・僕の力が足りませんでした。すみません。」

「いや、サークさんの責任では無いですよ。私があそこで休憩を取らなければ・・・」

「バータックさん、今はやめましょう。今は町に行くことを優先し

ましよう。」

「そうですね。けれど、どうやって助かったのでしょうか？サークさんはもう1体と対峙していたはずですし。」

「いや、僕も記憶が飛んでいて、気がついたら傷付いてボロボロになっていたライオウ達の前に立っていたので。詳しくは、町に着いてからにしましょう。」

「ええ。」

・・・なんとか日が落ち暗くなり始める時に町に着くことが出来た。町の人に医者居場所を聞き、すぐにバータックさんを連れて行った。

そこには小さな病院があったが、光は消え暗くなっていた。

玄関でノックをしながら呼びかけた。

ドンドンドンドンドンドン

「遅くにすみません。怪我人がいるので診てもらえませんか？」

すると、中から返事があった。

「誰じゃ、こんな時間に、今開けるわい。」

ドアが開き、中から初老の男性が出てきた。

「見慣れん顔じゃの」

不審者を見る様に、僕達をみる。

「旅の途中でモンスターに襲われました。その時に1人が怪我を負ってしまって、診て貰いたいです。」

「まあ良い。中に入れ。」

僕達は中に入り、診察室に通された。

「その男をベットに寝かせる。」

バータックさんをベットに降ろし、診察してもらおう。

医者はバータックさんの体を一通り診察し

「ふむ、大きな怪我は魔法で回復されとるな。2日ほど安静にすれば、傷も癒えるじゃろ。しかし、今日はこのまま一晩入院じゃ。」

医者はあとは大したことは無いと言って、診察を終えた。

「お前さん達は、宿でも行って休んで来い！揃いも揃って顔色が悪い。飯食って、風呂は行って、さっさと寝ろ。」

医者は僕達に言い方は乱暴だが、気遣いをしてくれる。

「はい。ありがとうございました。」

僕は素直にお礼をいい、リリア達を連れて宿に向った。

宿についてから、僕と姉妹の2部屋を取る事にした。

それぞれの部屋に行つて、手荷物を置いてから食堂に集まつた。

テーブルについて、それぞれ好きな物を注文した。

クウー

誰かのお腹がなった。無理も無い。朝食食べたあとは何も食べていないのだから。

リリアが顔を赤くし、下を向いた。

「……………」

「お姉ちゃんのお腹の虫さんが鳴いた」

「アイシャ！」

クス

僕は小さく笑つてしまった。

「サークさんも！2人して、もお」

僕は笑顔のまま

「ごめんごめん。悪気は無いんだ。今日はしょうがないよね。」  
リリアは顔を横に背けて

「サークさんの笑顔はずるい・・・怒れないです・・・」

別の意味で顔を赤くし、最後は消えるような声で言ってきた。

そんな会話をしていると料理がきて、食事を始めた。

やはり、2人ともかなりお腹が空いていたみたいで、お喋りをせざるに一心に料理を食べている。

食事が終わり、それぞれの部屋に戻る。

少し休憩をした後に、お風呂に入りに行く。

お風呂は中々の広さのある大浴場で、リラックスして入ることが出来た。  
来た。

部屋に戻り、今日の事を考えていた。

短い間だったが、一緒に過ごした人が大勢死んだ。

僕は敵を討つ事が出来たがしなかった。

これが正しかったのかは、まだ分からない。

あの時どうすれば正しかったのか、これから先も考えていくことになるだろう。

そんな事を考えていると、自然と意識が眠りへと落ちていく……

## 24話（後書き）

ここまで読んで頂き、ありがとうございます。

もう少しで、王都へは終る予定です。

PV10000を超えました。ユニークも2000を超えて嬉しい  
限りです。

一度でも読んで頂いた方に感謝です。

これからも宜しく願います。

## 25話

・・・自然と意識が眠りへと落ちていく・・・

「いやーーーーー!!」

夜中、隣の部屋から響いた叫び声。

僕は隣の部屋のいるリア達の元へ向った。

部屋の前でノックし、呼びかけた。

「リア何かあったのか？」

中から返事が無く、何か啜り泣きするような声が聞こえた。

「中に入るよ。」

僕は返事を聞かず、中に入っていく。

中では姉妹がお互いに抱き合い、慰め合う様に泣いていた。

僕はどうしたのか分からず、近づいていった。

「2人とも大丈夫？」

「み・・・みんなが・・・いなく・・・」

「・・・目の前で・・・赤く染まって・・・」

2人が僕に抱きついてきた。

2人が昼間の出来事を思い出し、恐怖心に駆られていると分かった。

僕はなるべく落ち着くように、優しく諭すように声を掛けた。

「大丈夫だから、心を落ちつけて。全て終わっているから。」

ゆっくりと安心する様に時間を掛けて、2人の頭を撫でた。

2人が落ち着いてきた時に、いきなり声を掛けられた。

「お客さん、何かありましたか？入りますよ。」

宿の主人らしいが、今の僕の状況は少し、いやかなり不味いのでは？

「や、ちょっと、ま・待って！」

「お客さん！こんな小さな娘さん達になんて事を！！」

「いや、違います。訳を聞いて・・・」

主人は問答無用と睨み付けてきた。そして拳を握り僕の顔に見事なストレートをぶち込んできた。

「この変質者がー！ー！」

僕は咄嗟に回避しようとしたが、リリア達に抱きつかれているので・・・無理・・・覚悟した。

ゴン！ ドサツ・・・

あんた、いい右を持っているぜ！

「え！ええ〜！サークさん」

「サークお兄ちゃん！」

2人が吹っ飛ばされた僕を起こしてくれる。

「お嬢ちゃん達、危ないからその男から離れなさい。」

主人はリリア達の事を心配して声を掛けてくれている。

リリアは僕起こしながら、訳を説明してくれた。

「違うんです。わたし達が怖い夢を見て、大声を出したのでサークさんが心配して、見に来てくれたんです。」

「そうだよ。サークお兄ちゃんが慰めに来てくれたんだよ。」

アイシャも僕のことを説明してくれた。

主人は慌てて頭を下げ、僕に謝罪をしてくれた。

「お客さん、すみませんでした。状況が状況だけに勘違いをしてしまつて。」

僕は主人の謝罪を受け入れた。

「いや、もう良いです。悪意でなった訳でなく、リリア達の事を心配してくれた結果ですから。」

「はあ、ありがとうございます。でも、お客さんも人が悪い。一言言っただけで、誤解だと分かりましたのに。」

「おいおい、最初から変質者と決め付けて、説明も聞かずにストレートをぶち込んだのは誰だ。」

「不条理を感じたがこんな時間から、言ってもしょうがないので、主人にはささっと退室願おう。」

「こんな時間にお騒がせして、こちらこそすみませんでした。もう休むのでお休みなさい。」

「そうですね。では、ごゆっくりと。」

「そう言うと、主人は部屋の外へと出て行き、自分の部屋へと戻っていった。」

「さてと、僕も自分の部屋に戻って、寝るよ。」

「サークお兄ちゃん、まって、一緒に寝ちゃダメ？」

「えー！」

アイシャは少し涙目で訴えてきた。

「だって、また思い出すと怖いから……ダメ？」

「うん」

僕は少し悩んだがリリアも居るから不味いなと思いつ断ろうとした。

「それはまず・・・」

「わたしからもお願いします。」

僕の言葉を遮って、リリアが言ってきた。

「え〜！まずいよ。」

「サークさんなら大丈夫です！わたしも思い出してもサークさんが居れば安心できます。」

2人に頼まれて断るに断れない。それに、2人が安心して休めるならと思いつ一緒に寝ることにした。

「わかったよ。今日だけは一緒に寝るよ。」

2人は手を取り合って喜んでくれた。

僕はこの判断は良かったんだと思いつ顔が綻んだ。

2人はベットをつなげて、僕を真ん中に寝るように勧めてきた。

少し緊張するが、ベットの真ん中に入った。

すぐにアイシャは僕の腕に抱きつき、寝息を立て始めた。

「サークさん、不安なんで、手を握っていて良いですか？」

反対側ではリリアが僕の手を握ってきた。

「いいよ、安心してお休み。」

「はい」

暗くてよく見えないが、リリアは笑顔で答えたように思う。

暫くして、リリアからも寝息が聞こえてきた。

さて、ここからが問題だ。

僕はアイシャはまだ子供だからいい。しかし、リリアは女の子の成長が始まっており、意識すると緊張してしまう。

僕はこの子達の保護者だ、保護者、保護者……頭の中で何度も呟く。ここで間違いを起こせば、主人が言ったように変質者だ。保護者、保護者……

そんな事を考えているうちに、いつの間にか僕も寝てしまった。

そして、朝を迎えた。

## 25話(後書き)

ここまで読んで頂き、ありがとうございます。

これからも宜しくお願いします。

26話(前書き)

最初にお詫びします。

遅くなつてすみません。

## 26話

・・・朝を迎えた。

目が覚めると、なにやら柔らかく暖かな物に包まれている感じがした。

僕はちょっとした幸せを感じていたが、朝日を浴びてそのまま寝ているわけにもいかず、起き上がるうとし、柔らかい物を退けようとした。

むにゅ

(うん、柔らかい。手触りが気持ちいい。)

それが、率直な感想だった。次の声が聞こえるまでは。

「やぁん・・・」

僕は一瞬で覚醒し、起き上がって回りを確認した。

僕の寝ていた回りでリアとアイシヤも寝ていた。

(僕は無実だ！)

大声で叫びそうになったが、なんとか心の中に押し止めた。

まずは落ち着け、自分。冷静になって思い出すんだ。

………そうだった！夜中の叫び声でリリア達の部屋にきて、そのまま一緒に寝ることになったんだ。自分自身に言い聞かせ、昨日の夜の事を思い出していった。

そして、僕は無実？だった事を思い出し安心した。

2人は可愛い寝顔でスヤスヤと静かに寝息を立てていた。

僕は急いでベットから抜け出して、リリア達の体を揺さぶって起こした。

「そろそろ起きなよ」

「う……うん」

リリアが目をこすりながら、ゆっくりと起きた。

「ん……まだ」

アイシャはまだ夢の中のようだ。

「……サークさん……え！なんで！」

僕を見たリリアは慌てて、毛布で顔を隠した。

「リリアさん、思い出してください。昨日の夜、君達がお願いしてきましたよ」

リリアから返事が返ってこない。少し考えているようだ。

「・・・そうでした。すみません。」

そしてリリアは何かに気がつき、僕に詰め寄ってきた。

「サークさん！私の寝顔見ました？見ましたよね？変じゃなかったですか？」

(リリアさん、顔が近いですよ)

「あ〜ごめん。見たよ。でも、変じゃなかったよ。むしろ可愛かったよ。」

バサッ

リリアは毛布の中に隠れた。隠れる一瞬に見えた顔は、赤く染まっていた様な気がした。

「ちょっと、ごめんなさい。少しこのままでお願いします。」

「リリア、大丈夫？熱でもあるの？顔が赤かったみたいだよ。」

「はい！大丈夫です。少し待って下さい。」

僕は待つ間にアイシヤを再度、起こそうとした。

「お〜い、アイシヤも起きて。」

「・・・あと、すこ〜し〜」

中々起きてくれない。

僕が苦戦していると、リリアが復活してきた。

「この子は朝が弱いから、思いつきりいかなければダメですよ。」

そう言っつて、リリアは毛布を思いつきり剥ぎ取った。

剥ぎ取られたアイシャは、目を開けて僕を見た。

「サークお兄ちゃん・・・おはよう」

まだ、眠たそうに目をこすりながら、挨拶をしてきた。

「うん、おはよう。」

やっと皆が起きて、顔を洗ってから食堂に向った。

それぞれ、モーニングセットを注文し、料理が来るまで、喋りながら待った。

「今日は先ず、バータックさんのところに行こう。」

「そうですね。昨日お医者様に大した事は無いと言われましたが、心配です。」

「うん、それにお父さん、一人で寂しがつていると思う。」

料理が運ばれてきたので

「「「いただきます。」「」」

皆で食べはじめた。

食事が終わり、病院に行く準備をして、宿の主人に声を掛けてから出かけた。

「この子達の父親を迎えに行ってきます。それと今日と明日も泊まるのでお願いします。」

「ありがとうございます。それと昨日の夜はすみませんでした。では、お気を付けて行ってらっしゃいませ。」

宿の主人は、僕達を見送ってくれた。

昨日は時間も遅く、町並みを見れてなかったが、朝市で活気付いた通りを見て歩く余裕があった。

そんなに大きくない町だが全体として、いい感じのする町だと思った。

僕達は病院について、バークタックさんの病室を訪ねた。

部屋の扉をノックすると、すぐに返事が返ってきた。

コンコンコン

「どうぞ。」

「失礼します。」

バータックさんの顔色は昨日より良く、元気そうに見えた。

「バータックさん、おはようございます。」

「お父さん、おはよう。」

「おはよう。」

「顔色も良い様で良かったです。」

「ええ、お蔭様で……」

バータックさんは、不意に表情を曇らせた。

「どうかしましたか？」

「いや、娘達が助かったことが夢でなく良かったという思いの反面、私達だけが助かり皆に申し訳ないという思いなりまして……」

「それは……」

僕は返答を詰まらせた。一日に満たない付き合いをした僕が、何を言っても気休め程度にしか、下手したら逆に傷付けてしまう事にならなないと考えてしまった。

「困らせるような事を言い、すみません。」

「いいえ、しかし皆さんの事は残念ですが、貴方達親子が無事だった事は喜んでいいと思いますよ。」

僕らが話をしているとノックが聞こえ

コンコンコン

「入るぞ。」

昨日の医者が入ってきた。

「」「」「おはようございます。」「」「」

僕達は、声を揃える様に挨拶をした。

「うむ、顔色は良い様じゃな。どれ診察するか。」

そう言っつて、バータックさんの体を一通り診た。

「異常は無さそうじゃ、退院して2日程は安静にしとけば良いじゃ  
る。」

「そうですか、ありがとうございます。」

バータックさんは深々と頭を下げてお礼を言った。

「先生、昨日は急に押しかけて、すみませんでした。」

「気にするな。怪我や病気はなりたくて、なるもんじゃ無いしの。」

医者は手を振りながら答えた。

「先生、父がお世話になりました。ありがとうございました。」

「おじいちゃん、ありがとう」

リリア達も口々にお礼を言った。

その後、僕達はバータックさんを連れて宿屋に戻った。

## 26話（後書き）

ここまで読んで頂き、ありがとうございます。

最近は忙しくこまめに更新が出来ないです。

毎回読んでいただいている方には申し訳ございません。

これからも続きますので宜しくお願いします。

## 27話

・・・僕達はバータックさんを連れて宿屋に戻った。

宿に戻ると主人が声を掛けてきた。

「おかえりなさい。」

「ただいま。今日の泊まる部屋は僕個人と親子3人の2部屋を用意してもらえますか？」

「はい、ありがとうございます。少しお待ちいただけますか？」

宿の主人はそう言っつて、部屋の準備をしに奥へ行った。

僕達は食堂の席に座って、待っている事にした。

「サークさん、改めてですが昨日は本当にありがとうございます。貴方がいなければ、全滅していました。どれだけ感謝しても足りません。」

「いいえ、僕なんか力不足で皆さんを助けられませんでした。それに僕自身途中から記憶がなくなっつて、どうして助かったか分からないんです。」

「と言いますと」

「ええ、バータックさんがライオウに跳ね飛ばされて、リア達が危ないところまでは覚えていますが、次に気が付いたのは傷付

いたライオウ達に止めを指そうとした時なんです。その間に何があったかが記憶にないのです。」

僕はリリアにあの時の事を訪ねた。

「リリア、あの時の事を何でもいいから教えてくれるかい？」

「はい。わたしが見た光景は……。」

リリアの話は聞いていて、到底信じられない事だった。しかもそれを僕がやったとは……。

リリア達がライオウの爪で引裂かれそうになった時に、僕が叫んだと思ったら光の壁がリリア達の周りをドーム状に覆い、ライオウの爪や雷を全て防いでいた。

そして、僕はライオウの爪撃を左手一本で受け止め、そのままライオウの巨体を捻り倒した。

その後、僕は2体のライオウを相手に互角以上の戦いをしていた。

リリアの目にははつきりと捉えることの出来ない速度で戦い、偶に止まった時に見せる姿は少しずつ傷付くライオウ達の弱っていく姿のみだった。

「……詳しいことは分かりませんが、サークさんか戦って助けてくれたことは間違いないです！」

「僕がそんな戦いを……？」

アイシャも自分の見たことを話してくれた。

「わたしが止めた時のサークお兄ちゃん、顔が怖かった。それに目が金色に光っていたようだったよ。」

目の色が変わるなんて、今までに聞いたことがない。

金色に目の色が変わる事が何か関係しているのか、疑問に思ったが確かめる術がない。

「リリアもその時の僕の顔を見た？」

「確かに顔の印象は怖かったです。目の色は良く覚えていません。」

「そっか、2人ともありがとう。」

今まで話を聞いていたバータックさんが喋り始めた。

「凄いですね。ライオウ2体を相手に勝てるなんて。この国でいや、この大陸で何人いるか。」

「そんな事ないですよ。その時の記憶がありませんし、僕の実力なら精々ライオウから逃げ切れるくらいですよ。」

「・・・それでも十分凄いですよ。」

話が一段落したとことに宿の主人がやってきた。

「お客様、お待たせしました。お部屋の準備が整いましたのでご案内

内します。」

宿の主人に案内されて、それぞれの部屋にいった。

・・・それから3日後、僕達は王都に向けて出発した。

## 27話（後書き）

ここまで読んで頂き、ありがとうございます。

これで王都へは終了します。

まだ続きます。

次回は間幕を入れます。

これからも宜しく願います。

## 間幕1（前書き）

セシリアの話です。

読まなくってもいいです。

どこに入れようか少し迷いました。

## 間幕 1

私の名前はセシリア。

この国の王家の直系で時期王位継者になります。

しかし、王家を支える貴族の方々の中には、私が王位継者に相応しくないとお思いの方がいらっしやる様で、近年行われていない王家の森で「王の証」を手に入れる試練を受けに行くことになりました。

そこで私はあの方と出会いました。

私はこの方と初めて会ったと思うのですが、何か懐かしさや、愛しささえ感じました。

例えるなら、自分の半身を取り戻したかのような感じがしました。

うっかり身分をばらしてしまいました。お願いすると先程までと変わらず接して下さい、新鮮な感じがしました。

普段の何気ない表情もカッコいいのですが、あの笑顔の魅力は凄い破壊力があります。あのレイラさんでさえ、見とれてしまうのですから……脱線しました。

あの方は、不思議な方で魔法が使えない、魔法が一切効かない。この世界に魔法の効かない方がいるとは今までに聞いたことが無いです。唯一私の光の魔法が効きました。

あの方やご家族の方が驚かれています。普通は効かないことに

驚くのではないでしょうか？

格闘ではカルロに勝ったと聞きました。我が国が誇る近衛隊の中でもトップクラスの強さを誇るのに、訓練の中とはいえ勝つとは凄いです。

不思議なことはまだあります。

王族しか入れないはずの塔の中に一緒に入ってきたり、一般の方は知らないはずの光の神アルテシア様の御名を知っていたり、アルテシア様からお言葉を頂いたりとか色々と思議な方でした。

塔の中で私はあの方に自分の思う、皆が笑って暮らせる国にしたいと告げました。

無事に証を手に入れて、王都に帰るときにあの方は王都に来て、私の理想を手伝ってくださると言って頂きました。

私はあの方に何をしてあげれるのでしょうか？

私はあの方が王都に来て、私を訪ねてきてくれる事を心待ちにしています。

その時には何かしてあげる事ができれば……

## 間幕1（後書き）

ここまで読んで頂き、ありがとうございます。

これからも宜しくお願いします。

28話・・・王都到着（前書き）

今回の話はあまり盛り上がりません。

## 28話・・・王都到着

・・・僕は遠くに見えるお城を見つけた。

「お！あれが王都か。」

「うん。そつだよ。お姉ちゃん、お城が見えてきたよ。」

アイシャが馬車の中にいるリアに話し掛けた。

「ええ、わかつたわ。お父さん、起きて。もうすぐ王都よ。」

「・・・ああ。」

そんな会話の中から聞こえてきた。

1時間程経って、王都に入る門の前までやってきた。門の前では兵士が、入門の検査をおこなっていた。

見ている限りややこしい手続きは無く、不信物等の持ち込みが無いかの荷物検査をしているようだ。

「へ、王都に入るのには荷物検査なんてあるんだ。」

僕は率直な感想を漏らした。

「いや、おかしいですね。私がこの度の行商に出るまでにはこんなに細かく見ることは無かったです。」

僕達の順番が来て、兵士達に手荷物や馬車の中を調べられた。

「おお！何故こんな物が。」

兵士Aが大声を出し、兵士長が見に来た。

「どうした、何かあったのか？」

「こっ・これを見てください。」

兵士Aは詰まりながら、兵士長にある物を見せた。

「な・・・」

兵士長も驚き、絶句した。

「これは、【ライオウの結晶】！！」

兵士長はバータックさんに詰め寄り

「おい！これはどうやって手に入れた？こんな国宝級の宝を平民が持っている訳がない！」

今にも拘束しそうな勢いで問いただしてきた。

「ちょっと待って下さい。それは私の持ち物ではないです。」

「ならば、これは誰のだ！やはり盗品か？」

兵士長は完全に疑いの目を向けてこちらを見ている。

「滅相もない。私は商人ですが、盗品なんて扱っていません。」

「これは、世界にいくつもない宝玉たぞ。この国でも唯一王家に伝わっているだけで他には無い物だ。そんな貴重な宝玉をどうやって手に入れた。まさかライオウを倒して手に入れたか？」

「ええ、そうです。倒してはいませんが、ライオウを打ち負かし、認められてライオウ自ら渡された物です。」

「ハツ・・冗談はよせ。どうやってあの高ランクの幻獣を打ち負かすのだ。冒険者を何人雇ったところで返り討ちに遭うのが関の山だ。正直に言え！」

バータックさんが説明しようとしたが、兵士長は鼻で笑い再度問い詰めてきた。

「ライオウを打ち負かし、宝玉を貰ったのは本当のことです。私が率いていた一行が旅の途中でライオウに襲われ、そちらにいるサークさんに助けてもらいました。サークさんが居なければ、私達も他の仲間達と同じく死んでいたでしょう。」

「そうだよ。サークお兄ちゃんにわたし達、助けてもらったんだよ。お兄ちゃん、すごく強かったんだから。」

バータックさんに続いて、アイシャも説明してくれた。

「そんな若造にあのライオウを、打ち負かすなんて事が出来る訳がない。もっとまじな嘘をつくんだな。怪しい奴らだな。ちょっと詰め所まで来てもらおうか。そこで詳しく調べさせてもらおう。おい

「こいつ等を詰め所まで案内しろ。」

兵士長はやはり信じてくれなく、他の兵士に僕達を連れて行くように指示を出した。

僕はバータックさんに近寄り、小声で話しかけた。

「バータックさん、このような時はどうなるのですか？もし危険なら、逃げますか？」

「いえ、下手に逃げると後々話が拗れてしまい、余計にややこしくなるので大人しく案内されてそこで身の潔白を証明したほうが良いです。それに私はこう見えても商人仲間で作っているギルドの中でもまあまああの地位にいるので、すぐに開放されますよ。」

「そうですね。僕は平和的に解決できるのなら別にかまいません。」

僕達の周りに兵士達が囲み、拘束はしなかったが詰め所まで案内をして行く。

僕達は詰め所の中に案内されて、最初に最年長であるバータックさんが取調室に連れて行かれた。

バン！ タッタッタッタ……

しかし、少し経つといきなり扉が開き慌てた兵士が何処かに急いで走り出した。

それから暫くして、ここのお偉いさんらしき人物が血相を変えて現れ、バータックさんが居る取調室に入っていた。

すぐにバータックさんと先程の人が出てきてバータックさんに頭を何回も下げている。

「うちの兵士長がとんだ早とちりを致しまして、申し訳ありません。」

「いいえ、お仕事を一生懸命されただけですから、気にしないで下さい。怪しければ調べて危険を未然に防ぐ。素晴らしい事じゃないですか。私達も税金を納めている価値がありますよ。隊長さん、兵士長さんを罰することがないようお願いします。」

バータックさんは隊長さんに頭を上げるように言った。

僕は何が起きているのか、把握出来ずに疑問に思っただけでバータックさんに聞いてみた。

「バータックさん、これはどうしたことです？」

「大した事はないんです。親の七光りってことです。ギルドの代表が私の父で、その関係で私はギルドの中でもそれなりの地位があるのです。」

「それじゃ、バータックさんはかなり凄い方では。」

「そんな大げさ事ではないですよ。小さな店の経営者ですよ。」

バータックさんは謙遜して大した事はない様に言うが、横で聞いていた隊長さんが

「何を仰いますが、この国で最大のギルドで王家御用達の地位があり、その辺の貴族方より発言力と財力をお持ちになられる、トップのご子息であらせられるのに。」

すぐに訂正し説明してくれた。

「ギルドのトップと言っても単に仲間内で一番の老舗であっただけですし、それに父がやっていることで私自身、今は商売の修行中です。この話はここまでで良いでしょう。それより、隊長さん私達はこれでもう用はないでしょうか？開放してもらっても良いですか？」

「ええ、お時間を取らせまして、大変申し訳ございませんでした。」

「では、サークさん行きましようか。」

「ええ、そうですね。」

僕達はバータックさんのお陰で、詰め所を無事に出て王都の中に入った。

## 28話・・・王都到着（後書き）

ここまで読んで頂き、ありがとうございます。

今回は王都の中に入ったのみで大して話が進んでいません。

内容もいまいちだったと思います。

## 29話

・・・王都の中に入った。

初めて見る王都の様子は、何処も人があふれている。今まで行ったことのある町とは、比較にならないくらい活気に満ちている。

「サークさん、そんなに珍しいですか？」

リリアに声を掛けられて、僕は無意識に回りを見ていたことに気が付いた。

「そうだね。僕の家は町から離れていたし、その町も田舎の小さな町だから、こんなに人が行き交うことは無かったからね。」

僕はお上りさんみたいで、少し恥ずかしながら答えた。

「確かに王都は他の町とは比べものにならないくらい賑わっていますね。」

人が多い中、ゆっくりと馬車を進めて行くと、大通りでした。

通りの両端には店や屋台が軒を並べて、お客さん呼び込み合っている。

「へー、凄い人ばかりだね。何か特別な事でもあるのかな。」

「いいえ、ここはいつもこんな感じですよ。ここは王都の中でも最大の市場で、王都の台所と呼ばれています。」

後ろから、アイシャがリリアに話しかけてきた。

「ね、お姉ちゃん、夕ご飯の材料を買っていいよ。お家に帰ってすぐにご飯作るよ。」

「そうね。もうすぐ夕方になるわね。サークさん、すみません。お買い物してきても良いですか？」

リリアは申し訳無さそうに、僕に尋ねてきた。

「いいよ。何処かに馬車を止めてから、僕も買い物に付き合おうよ。」

僕は町の様子を直に感じたかったのでリリアの買い物に付き合おうに提案した。

「いえ、そんなの悪いので待つて頂けたら良いです。」

リリアはすぐに遠慮をしてきた。

「気にしないで良いよ。リリアだけ行かせて待つているなんて出来ないよ。それに一緒に行きたいから。」

リリアは何故か顔を避けた。うん、何か変なことを言ったかな？

「お姉ちゃんとお買い物でデートか……いいな。」

アイシャの眩きで、僕は慌てて否定した。

「えーいや、そんなんじゃないよ。女の子だけ行かせて、男が待つ

ているわけにはいかないし、それについてに街中の案内してもらおうかと。」

「じゃ、わたしもお兄ちゃんを案内する。」

「ありがとう。」

「ハア、ちょっとは期待したのにな・・・」

リリアは何か小声で呟いた。

「リリア何か言った？」

僕はリリアに尋ねたが、リリアは曖昧な笑顔で誤魔化し返事した。

「いいえ、何でもないです。では、みなで行きましようか。あ！お父さんは馬車でお留守番お願いします。」

バータックさんは快く引き受けてくれた。

「ああ、行っておいで。私はこのままのんびりと待っておくよ。サークさんこの子達をよろしくお願いします。」

「すみません。馬車の方はお願いします。」

僕はバータックさんに馬車を任せて、リリア達と買い物に向った。

大通りのお店には色んな品物が置かれて、売り子さんはお客さんを

呼び込み、忙しそうに売りさばいていた。夕暮れになりつつある時間の為、品物自体は多くは残っていないが、見たことがない様な食材もあった。

「サークさん、夕ご飯で何か食べたいものありますか？」

リリアは僕の顔を覗き込み聞いてきた。

「僕はいいよ。君達を家まで送ったら、護衛の仕事も完了になるし、その後は宿にでも行くから。」

「そんなのダメです。」

リリアは頬を膨らませて、少し怒り顔で言ってきた。

「サークさんは私達の命の恩人ですから、最後までいい良いじゃないですか。」

僕はリリアの怒り顔を見ながら、少し可愛いなと思いつつ聞いていた。

「サークさん、聞いていますか？急ぎの用事がなければ、今日はそのまま家に泊まって下さい。」

「いや、そこまでお世話になるような事もしてないから悪いような・・・」

僕が遠慮して話しているとアイシヤが

「え〜！サークお兄ちゃん、一緒にいようよ〜」

と手を引つ張りながら言ってきた。

「わかたよ。バークックさんが許可したらね。」

リリアは僕の言葉を聞いて、ニコニコしながら再度同じ質問をしてきた。最後の言葉は少し自信なさ気だったが。

「お父さんのことは大丈夫だから、話を元に戻しますね。サークさんは何が食べたいですか？私が作るので大したもの出来ませんが・・・」

僕はリリアが何が作れるか分からないので、無難に答えた。

「そうだな・・・リリアの得意な料理が食べたいな。特に好き嫌いが無いので何でも良いよ。リリアの作る料理なら、何でも美味しそうだし。」

「わかりました！私、サークさんの期待に添える様にながります！」

リリアは何やら瞳の奥で炎が舞うように見えるぐらい、真剣な表情で両手の握り拳を胸の前に持っていき、小さなガッツポーズをしていた。

「わー！お姉ちゃん気合入ってる。じゃ、わたしもお手伝いするよ！」

アイシャは私もって感じに、右手を上げて名乗りを上げた。

2人して凄く気合を入れて頑張ってくれるみたいで嬉しい反面、少し悪いかなど思った。

「2人ともそんなに気合を入れなくってもいいから、普通に作ってくれたら良い……」

「ダメ（です）。」「」

2人は僕の言葉を最後まで言わせてくれなかった。

「サークさんには美味しいと言って貰える様にします！」

「言ってもらおうの〜」

気合の入った2人に気圧されて、この時の僕は少し腰が引けていたと思う……

「そう……じゃ期待しているよ……」

それから、市場の中を色々と回りながら色んな食材を買い、僕は荷物持ちとしての役目を果たした。時々珍しい物があればリア達に色々と説明して貰い、有意義に過ごすことが出来た。

……少し暴走気味な2人は、僕の手に残るほどの荷物を買っていたが……

ええ、頑張つて持ちましたよ。楽しく買い物する2人を見てみると水を差す様な事は出来ません。男の意地でした。

買い物も終わり、馬車に戻ってくるとバータックさんは荷物の量を

みて驚き駆け寄ってきた。

「サークさん、大丈夫ですか？こんなに持ってもらって、すみません。」

「いや、大した事ありませんよ。」

この時の僕は上手く笑えていただろうか。引きつった笑顔になっていなかっただろうか？

僕が別の事を考えていると、リリアがバータックさんに聞いてきた。

「お父さん、今日の夕ご飯はサークさんも一緒に良いでしょうか？」

「ああ、サークさんが急がれていなければ、今日そのまま泊まってもらおうと思っているのだが。」

「いや、そこまでお世話になるわけには……。」

「そんなこと言わずに、サークさんは私達の命の恩人なんですから。それとも急ぎの用事でもあるのですか？」

「そんなことはないですが、折角自宅に戻られたので家族の憩いの時間を邪魔するのも悪いかなと……。」

「気にしないで下さい。この数日家族同然に過ごして来たじゃないですか。もし良ければリリアはどうです？そうなれば、完全に家族ですよ。」

不意にバータックさんから出た言葉が僕の思考を止めた。

「……」

「お父さん！そんな話は道端でしないで！ちゃんと家で……」

リリアは真つ赤な顔をしながらバータックさんに詰め寄り、講義したが最後は言葉が止まった。

「……あ！冗談か。冗談ですよ。バータックさん、冗談でも良い悪いがありますよ。リリアが真つ赤になって怒っているじゃないですか。」

バータックさんは僕達の反応を見て何か呟いた。

「サークさんはこの手の話は鈍いか、しかしリリアの方は満更じゃないみたいだな。よし……」

何時ものニコニコ顔でなく、真剣に考えているみたいだった。

「ね〜暗くなりはじめたから帰ろうよ〜」

アイシャの言葉で僕達はこの場を出発した。

## 29話（後書き）

ここまで読んで頂き、ありがとうございます。

最近は更新が遅くなり、すみません。

ここから宣伝です。

友人（桔梗さん）も投稿しているので読んでみて下さい。

「エデンに呼ばれし者」

です。こちらもよろしくです。

ゆっくりでも投稿していくのでよろしくお願いします。

### 30話

・・・僕達はその場を出発した。

少し行くと、目的地であるバータックさんに家に着いた。思っていた大きな家ではなく、普通より少し大きいくらいの家だった。

「期待はずれでしたかな？」

バータックさんが僕に話しかけてきた。

「いえ、そんな事は・・・」

「いや、いいですよ。思ったより小さな家でしょう。実家から独立して自分の稼ぎで建てた初めての家ですから。色んな思い出の詰まった私の城ですよ。」

バータックさんは誇らしげに語ってくれた。

僕は納得し、家を眺めているとリリアが僕達を呼んだ。

「サークさん、お父さん早く中に入りましょう。あ！お父さん荷物忘れないでね。」

「私の方が後か・・・それに荷物持ちか。」

バータックさんから哀愁が漂ってきた。

「年頃の娘にとってやはり父親より恋心の方が優先か。」

バータックさんの眩きに寂しそうに聞こえたので

「バータックさん、僕が荷物を運びますよ。」

そう言つて、馬車から荷物を家の中に運び込んだ。

それから、暫くして夕ご飯の準備が出来て各料理がテーブルに並べられた。

各料理は家庭料理で派手さはないが、食欲を誘ういい匂いがしている。

「へへ、凄く美味しそうだね。食べるのが楽しみだね。」

バータックさんも料理をみて感想を漏らした。

「いつもより美味しそうだね。サークさんの為に頑張ったのかな？」

リリアは照れながら、バータックさんの背中を叩いた。

「やだ、お父さん。いつもこれくらい作っているでしょう。さあ、席について食べましょう。」

皆が席について、食事を始めた。

「……いただきます。」

僕は近くの皿に盛り付けている料理を、自分の皿に小分けに取り、味わいながら食べた。

食材の味を上手いこと引き出し、何時も食べたい正に家庭料理の極みと思える味付けがしてあった。他の料理についても同じく毎日食べられたら、幸せだと思える味だった。

リリアは自分は食べずに僕の食べる姿をジッと観察していた。

「・・・サークさん、お味はどうです？」

真剣な表情で僕に聞いてきた。

「ああ、とても美味しいよ。感想が遅くなってごめん。どれも美味しかったから夢中になってしまつて。」

僕の感想を聞いたリリアは笑顔になった。

「いいえ、食べる邪魔してすみません。お世辞でも美味しいって貰えて、よかったです。」

僕はすぐさま否定した。

「お世辞じゃないよ。こんな美味しい料理は毎日食べたいくらいだよ。」

「それじゃ、私いつでも作りますよ。それこそ毎日でも作ります。」

僕の言葉にリリアはテーブル上に手を付いて乗り掛かる様な勢いで答えた。

アイシャも負けじと自分の作った料理を勧めてきた。

「このサラダ、わたしが作ったの。サークお兄ちゃん食べてみて。」

サラダを受け取り、一口食べてみた。

「うん、これも美味しいね。アイシャは立派なお嫁さんになれるね。」

「わーい、褒められた。」

その後も楽しく会話をしながら食事をした。

「「「ごちそうさまでした。」」」

「おそまつさまでした。」

食事が終わり、後片付けをするリリアの手伝いをしようと食器を台所に運んだ。

「サークさんは休んでください。後片付けは私がしますから。」

「いや、手伝うよ。美味しい料理を食べさせてもらって何もしないのは気が引けるからね。」

「そうですか。ならお願いします。」

僕とリリアと一緒に後片付けをしていると、バータックさんが僕達に声を掛けてきた。

「なかなかお似合いだね。新婚さん。」

ガッシャーン！

リリアは持っていたお皿を滑らして、床に落とし割ってしまった。

「お・お父さん！いきなり何言ってるの！」

「バータックさん！からかうにしても、もう少し考えてください。」

僕は落として割れたお皿の破片を拾いながら言った。

「ごめん、ごめん。あまりにも自然に似合っていたから、つい言うてしまったんだ。」

バータックさんの態度はあまり申し訳無さそうにしていなかった。

「リリアも年頃の女の子ですし、この手のからかいは可哀想ですよ。」

「リリアはむしろ喜んでいと思うけどね。」

「お父さん！余計なことは言わないで。」

リリアの一喝でバータックさんは肩をすくめ、台所から回れ右をし去ろうとした。

「あゝそうそう、サークさん後で話があるので時間もらえますか？」

「はい、わかりました。この後で行きます。」

「では後で。」

片付けは程なく終わり、僕はバータックさんの部屋を訪ねた。

コンコン

「バータックさんいますか？サークです。」

「どうぞ、鍵は開いています。」

中に入ると、いつのニコニコ顔で過ごしているバータックさんではなく、真剣な表情で僕を見つめているバータックさん待っていた。

「お話というのは？」

「今回のライオウの件で改めて御礼を言います。ありがとうございました。」

「お礼なら、何度も聞いていますよ。どうしたんですか？」

「他の仲間たちには申し訳ないが、娘達だけでも助かってほんとに良かったと思っっているのです。私の妻は早くに死に別れたんですが、その妻の最後に何があっても娘達は守るって約束をしました。今回は貴方がいなければ、私達は全滅してました。それを貴方は救ってくれたのです。何度御礼を言っても、何を差し上げても、私の中では報いることが出来ません。けれどせめて何かしなければ、私の気持ちに納まりません。私に出来ることで何かありませんか？」

バータックさんの思いを理解したが、僕自身はそんなに大げさな事

をしたつもりはない。

「そんなに気にしないで下さい。小さな子が転んだら、手を伸ばす。物を落とした人がいれば、拾ってあげる。困っている人がいれば、助けてあげる。そんな当たり前の事をしただけですよ。内容に大小はあったかもしれませんが。」

僕も真剣に自分の思いを答えた。

「わかりました。でも、せめて何か御礼の品を贈らせてください。護衛代の10Gだけというのは心苦しいですから。」

「ええ、楽しみにしておきます。」

ここで受け取りを拒否するのも気が引けるので、素直に受け取るようにした。

・・・時間も遅くなってきたのでこの日は案内された客室で休んだ。

### 30話（後書き）

ここまで読んで頂き、ありがとうございます。

話の展開が遅くって、すみません。

もっと上手いこと展開を持っていけたら良いのですが、文才の無さ  
です。

まだまだ、続きますのでよろしく願います。

### 31話

・・・案内された部屋で眠りについた。

翌日の朝、僕は下宿先になるグレンバツ八さんの家を訪ねる為に出掛けようとしたが、バータックさんに呼び止められた。

僕がさえ良ければ、この家に住まないか聞いてきたが、下宿先が決まっていることを伝えた。

バータックさんは残念そうにしたが、すぐにいつもの表情にもどり、僕の予定を聞いてきた。

「サークさん、今日の予定はどうなっていますか？」

「予定というほどでも無いですが、お世話になる方に挨拶しに行くのと、あと冒険者ギルドの登録をしに行こうと思っています。王都は初めて来たので町の地理が分からないから時間が掛かるかもしれませんが・・・」

バータックさんはちょうど良いと言いながら

「私も冒険者ギルドに用事があるので、一緒に行きましょう。ギルドへの登録ならお昼までに終わると思うので、皆で昼食を食べましょう。その後でリリア達に王都の道案内をさせますから。」

「ありがとうございます。けれど、そこまでして貰わなくても・・・」

僕の話も聞かずに、バータックさんはリリア達に出掛ける用意をする様に言いに行った。

王都は住んでいた近くの村や立ち寄ってきた町とは、比べものにならないぐらい発展した町並みになっていた。メインとなる大通りはもちろん、主だった通りは平らに舗装され、レンガが引き詰められており、馬車などの車輪が滑らかに進む。通りに面した建物は全てレンガ造りで統一感のある美しい町並みである。そして、街の中心には湖と言えるほど大きな堀に囲まれたお城が優雅に佇んでいる。その姿は見るものに感動を与える。

「サークさん！お城が見えましたよ。」

リリアが色々と説明してくれていたが、お城は別格のようで少し興奮気味である。

「うん、見えているよ。真っ白なお城は綺麗だね。」

「はい。私たちの誇りです。それにお城のお姫様はとくっても綺麗な方なんですよ。」

「リリアはお姫様を見たことがあるの？」

「お祭りなどの行事の時に遠くからでしたが拝見させてもらいました。」

「わたしも見たよ。すごくかわかったよ。わたしもあんな風になりたいの。」

お姫様の話で馬車の中は一気に騒がしくなった。

僕はセシリアの近くまで来たが、あくまでも物理的な距離であって、立場や地位はまだまだ離れたところにいる。

出発前に父さんにどうすればセシリアの手助けが出来るか相談したら、あっさりと言わされた。

そもそも、お城に勤める方法自体が少ない。文官か武官になるか、兵士となるかしかない。前者は貴族やコネクションがなければ先ず無理である。後者では地位が低くて一生掛かっても王家の方に謁見できないだろう。戦などでよほど大きな功績などを挙げなければ、平民である僕にとってセシリアは手に届かない存在であった。

父さんから聞いた例外は、高位の冒険者になることだ。高位の冒険者にはお城からに依頼があり、功績が認められれば、士官の採用もあるそうだ。

僕はその話を聞いて、冒険者ギルドに登録をしようと思った。冒険者になれば、困っている人の依頼をこなし、笑顔を取り戻してもらおう。小さな事かもしれないが個人の笑顔が集まれば、皆が笑顔になる国になる。

「・・・クさん、サークさん、着きましたよ。」

僕は呼ばれる声に気が付き、辺りを見回した。正面にはかなり大きな建物があり、看板には冒険者ギルドの文字。周りは様々な防具や武器の持った人々が行き交っている。

「ここが冒険者ギルドですか。思っていたより大きな建物で驚きました。」

「ここは王都の冒険者ギルドであり、この国の冒険者ギルドの総本部でもありますから、大きな建物が必要となるのです。私は2階にあるクエストセンターにこの前の依頼の報告に行ってきます。その間、リリア達をお願いします。確かギルド登録は3階で受付をしていたと思うので一緒に連れて行ってもらえませんか？」

僕はバータックさんが前のライオウの件を報告に行くと言き、リリア達が一緒について行くと、あの時の恐怖を思い出すかも知れないので、付いて来ないように僕に任せたいことはわかったので

「わかりました。でも、登録はリリア達が付いてきても大丈夫ですか？」

「ええ、大丈夫ですよ。あ！そうだ、これを持って行って下さい。」  
そう言うと、バータックさんは紙とエンブレムを渡してくれた。僕は不思議そうに見ていると、説明してくれた。

「これは、紹介状と私達のギルドのエンブレムです。登録の際に身元確認があるので、これを出してもらえば問題ないはずです。」

僕は納得し、懐にエンブレムをしまった。

「ありがとうございます。少しの間お借りします。リリア、アイシヤ建物の中を案内してくれるかな？」

リリア達に向かって、声を掛けてギルドの中に入っていった。

冒険者ギルドの建物は4階建てで、1階が食堂兼酒場、2階が仕事

を幹旋するクエストセンター、3階が登録などの事務処理を行うオフィス、4階は総本部として分かれている。

僕達は3階を目指して階段を上がっていく。

### 31話(後書き)

ここまで読んで頂き、ありがとうございます。

### 32話(前書き)

この頃、投稿するペースが落ちてすみません。

### 32話

・・・階段を上がっていく。

3階に着いたら奥から大きい声が聞こえてきた。見てみるとカウンターがあり、その前で冒険者の男が何かを訴えているようだ。どうやら共同で依頼を請けたみたいだが、自分の報酬だけが少なかったみたいだ。その様子を見てみると、ここでは登録の他に苦情などの事務処理も全てやっているみたいだ。

僕は空いている職員の受付で登録をしようと思いつ

「僕は受付に行つて、登録をしてるのでここで待っていて。」

リリア達にロビーの椅子で待っているように伝え、カウンターの受付のお姉さんの方へ向かおうとした。するとリリアは僕の服の裾を掴み

「すぐに戻ってきてくださいね。」

不安そうな表情を浮かべて、僕に話し掛けてきた。

「大丈夫だよ。すぐそこにいるから、何かあっても声を掛けてくれたら良いよ。」

「いえ、私たちがなくサークさんのことが・・・」

ああ、僕が受付に行つてあの男に絡まれないか心配してるんだなと思いつ

「大丈夫だよ。あんな男は相手にしないから、もし絡まれても大丈夫、僕の方が強いよ。」

「いえ、そんなことではないんです。受付の方がお姉さんですから・・・」

僕はリアが何を言いたいのかわからず、首を傾げた。このまま受付もせずに時間だけが過ぎてしまうので、リアに気をつけて行ってくるかと告げ、受付に向かった。

「おはようございます。ギルドへの登録をお願いします。」

僕は受付のお姉さんに笑顔で挨拶をして、登録に来たことを伝えた。するとお姉さんは頬が薄紅色に染まり、僕を見たまま返事が無い。お姉さんの目の前で手を振り正気に戻ってもらおうとした。

「もしもし、聞こえていますか？」

「・・・」

「おゝい・・・何故？」

このままでは進まないの、僕はお姉さんの肩に手を伸ばし、揺さぶってみた。

「キヤツ・・・」

ビクッ！

お姉さんは気が付いてくれたが、小さな悲鳴を上げたので、僕もビツクリした。

「……すみません。え〜と、ご用件は？」

申し訳なさそうに謝り、用件を聞いてきた。僕は登録をしたいと伝えて、必要な書類を貰って一度リリア達のところに戻った。そこには疑いの眼差しを向けるリリアが、何か言いたそうにして待っていた。

「リリア、どうしたんだい？」

「肩……」

リリアはポツリと呟いた。

「え！肩が何かあった？」

僕は何が言いたいのかわからず、聞き直した。

「……受付に行っただけなのにお姉さんの肩を抱いていました。」

「えっ、え〜！」

リリアは僕が、お姉さんに気が付いてもらおうとした行動が、肩を抱いたように見えたらしい。僕は慌てて説明をした。

「後ろからどうな風に見えたかわからないけど、あれはお姉さんが僕に気が付いてくれなかったから、肩を揺すっただけだよ。」

けれど、リリアは納得いかないという顔で

「やっぱり触っていたんですね。サークさん、初対面の女性の方に気安く触れるのは良くないと思います。」

「うーん、それはそうなんだけど、全く気が付いてくれなかったから、あの時はしかたが無かったんだ。」

「それでもダメです。もしあのお姉さんが、勘違いしたらどうします?」

リリアは僕が痴漢と勘違いされるかもしれないと思って、注意してくれているんだろうが、そんなに痴漢と勘違いされる様な顔だろうか?自分では平均か、悪くても少し下ぐらいの顔だと思っていたのに、少し傷付いた。

「そうだね・・・、次から気をつけるよ。」

「気をつけて下さいね。登録は終わりましたか?」

「いや、今登録用紙をもらってきたので、書いてから受付に出しに行くよ。」

リリアは少し考えて、登録用紙を出しに行く言い出した。

「じゃあ、私たちも付いて行きますね。勘違いが思い込みにならない様に。」

「そんなに怪しそうに見えるのかな?」

流石に少し落ち込んでしまった。すると、リリアは慌てて否定してくれた。

「いえ、そういう訳ではないんです。全く逆の意味です。」

僕は意味が分からず、首を傾げていると、リリアは溜め息混じりで言ってきた。

「サークさん、自分の容姿はどう思っていますか？」

「どうって、人並みだと思っているけど、もしかして女の子に嫌われるような顔してる？」

僕はある意味この世の終わりのようなショックを受けた。それを見たりリリアは呆れたような顔になり

「無自覚ですか・・・とにかくサークさんの笑顔は注意してください。」

僕は要領を得なかったが、リリアに良い意味も悪い意味もあるのですと会話を打ち切れた。僕は近くの机で必要な項目を書き込み、リリア達と一緒に受付に書類を持って行った。

受付のお姉さんは、少しは慣れてくれたのか、それともプロ意識なのかは分からないが、笑顔で迎えてくれた。

「必要な項目は書いたと思うので、確認をお願いします。」

僕は手に持っていた書類をお姉さんに渡した。

「はい、わかり……」

お姉さんの言葉が急に詰まり、見る見るうちに顔が赤くなっていく。

ペシッ

いきなり、リリアが僕の手を叩いた。

「サークさん、手が触れていますよ!」

リリアは僕に言い放った。

「ああ、すみません。」

僕はお姉さんに頭を下げ、お詫びをした。

「いいえ、こちらこそすみませんでした。書類をお預かりします。それと、身分証明書か紹介状がありますか?」

逆に謝られてしまった。紹介状のことを言われたので、バータックさんから預かった紹介状を渡した。紹介状の署名を見たお姉さんは少し慌てて何か証明になる物が無いか聞いてきた。僕はエンブレムを預かっていることを思い出し、お姉さんに渡した。お姉さんは書類一式を持って奥の部屋に駆け込んでいった。

……暫く待つことになった。

### 32話（後書き）

ここまで読んで頂き、ありがとうございます。

話のペースが落ちてきて、すみません。

まだまだ続きますので宜しくお願いします。

ユニークが4000を超えました。

読んで頂いている皆様に感謝致します。

### 33話

・・・暫く待つことになった。

先程のお姉さんが、奥から年配の男性を連れてきた。男性は僕を上から下まで見回し、疑いの目を向けている。

「・・・あの〜僕が何かしましたか？」

僕はそんな疑いの眼差しを向けられるのか分からず、とりあえず聞いてみた。男性はハツとし、咳払いをして自己紹介をしてきた。

「ゴホン、わしはこの階の室長をしておるムラクじゃ。不愉快にさせて、すまぬ。」

僕も相手に合わせて自己紹介をした。

「僕はサークって言います。ギルドへの登録をしに来ました。何かまずい事があつたのですか？」

いきなり疑いの目を向けられて、僕は不安な思いに駆られる。するとムラクさんは大した事はないと言いながら、説明してくれた。

「いやなに、珍しい人物からの紹介であつたのと、信じれないような事が紹介状に書いてあつたからじゃ。」

「バータックさんからの紹介は珍しいのですか？」

「そうじゃなく普通は身分証が確認出来たらギルドへの登録は問題

無いんじゃない。それなのにわざわざ紹介状書くとは、かなり力が入っておるじゃろ。」

「そうなんですか。それと信じられない事ってなんですか？」

「うむ、護衛の際の事じゃ。書いてあったことが本当ならば、特例としてBランクからのスタートでも良いくらいじゃ。」

「Bランクって何ですか？」

「ギルドの中で定めているランクでのお、高位のランクになれば、色んな特典が受けれるんじゃない。通常はDから始めるじゃが、紹介状に書かれとるのが本当なら、既に一流の冒険者と代わらんじゃろ。何か証拠になる物が無いかのぉ。」

そう言われて、懐から【ライオウの結晶】を取り出し、ムラクさんに見せた。ムラクさんは目を見開き、宝玉を凝視している。本物だと分かれると、感心し僕にBランクからの登録をすと告げて、奥の部屋に戻って行った。先程のから静かに横に控えていたお姉さんはムラクさんが奥に戻ったのと同時に僕に話しかけてきた。

「貴方、凄いですね。Bランクからのスタートなんて数年に1人居れば凄いですよ。紹介状はムラク室長しか目を通していませんが、護衛の仕事でBランクからのスタートってありえませんかよ。どんなことをされたのですか？その宝玉が関係しているのですか？」

次々と質問をしてきたが、僕はあまり目立ちたくないので曖昧に答えていた。お姉さんはそんな僕の言葉を熱心に聞いてくれた。

ドンツ・・・ガッシャン

大きな音が部屋中に響いた。音がした方を見てみると、クレームを付けていた男が顔を真っ赤にして机に拳を叩きつけていた。その振動で机の上に置いていた花瓶が床に落ちて、破片が飛び散っていた。僕は見るに見かねて男の方へ近づいて行った。僕が声を掛けるより先に、男が僕に気が付いて睨みながら言ってきた。

「なんだ、てめえは。なんか文句あんのか？」

「もう少し冷静に話が出来ませんか？そんなに頭に血が上った状態ですと話が纏まりませんよ。」

「事情も分からずに口を出してくんな！」

男は唾を飛ばす勢いで怒鳴りつけてきた。唾が付かないように身を引いた。そして聞こえていた内容からギルドの職員の対応には間違いないと思ったので

「対応されているお姉さんには調べてから、対応をするって言っているのです、ここは一旦帰られてはどうですか？」

僕はあくまでも冷静に話を進める。しかし、男は冷静に話す僕が逆に気に障ったようで、殴りに掛かったきた。

「てめえ、俺が誰か分かって言ってるのか?!」

男の動きは、冷静さを失って単調になっているのか、それとも元々の実力が低いのか余裕をもって回避できる。それを何度か繰り返し返すうちに男は顔を怒りで真っ赤にし、猪のように一直線の動きになってきた。僕は限がないので、回避した瞬間に足を引く掛けた。

ドンッザザッ

男は突っ込んできた勢いそのままに派手にこけた。それを見ていた人達は必死に笑いを堪えていた。僕は男が少し哀れに思えてきた。

「もうそろそろ気が済みましたか？」

「ちょこまかちょこまかと逃げやがって！なめんのか！」

「すみません。転んだ状態で凄まれても・・・」

なかなか男は冷静に話し合いの応じてくれない。僕がいくら話し掛けても、火に油みたいで余計に怒らせてしまう。男はすぐさま立ち上がり、又懲りずに襲いかかるうとした時

「そこまでじゃ！」

大きな声が響き渡った。ムラクさんが奥から再び出てきて一喝した。男はその声で動きを止めた。

「なんじゃ、お主は。何があつたんじゃ？」

ムラクさんは対応をしていたお姉さんに事情を聞き男に対して、こちらで調査し、後日知らせることを伝え、この場は素直に帰るように伝えた。そこには有無を言わせぬ迫力が込められていた。そして、僕達の方を向き、話し掛けてきた。

「すまなかつたのお。この子達に暴力を振るわれんで良かったわい。」

「

「いいえ、大した事ないんで気にしないで下さい。それにしても凄い迫力でしたね。あの男何も言えず、帰って行きましたよ。」

「室長は若い頃は名の知れた冒険者で、数々の伝説を残しているんです。若手の冒険者とは年期が違いますよ。」

お姉さんは、自慢げに説明してくれた。ムラクさんは満更でもない様な表情のまま謙遜していた。

「こんな年寄りを煽っても何も出んぞ。それに伝説言っても大した事じゃないぞ。」

そこから、話が脱線しムラクさんの若い頃の伝説？話を聞かされた。飲み屋で飲み比べでをして、三日三晩飲み明かし酒蔵の酒が無くなり決着が付かなかったとか。ゴ布林退治に1人で出かけたなら、サイクロプスを退治してきたとか。負け戦で敗走する際に、戦争孤児を数人連れて逃走劇を繰り広げたとか。凄いのもあれば、少し疑問に思う話もあった。

「ゴホン、話がずれたな。サークよ、これがお主のギルドカードじや、受け取れ。詳しい説明はこの子達に聞いてくれ。」

ムラクさんはそう言うのと僕にカードを渡してくれた。そして、受付のお姉さん達に囲まれて説明を聞いていた。

「……ジッ」

その間、リリアから無言のプレッシャーが僕に向って放たれていた。

僕の背中には、嫌な汗が流れ落ちていた。一通り説明を聞いたので、  
バータックさんと合流する為、階段を下りていった。

### 33話（後書き）

ここまで読んで頂き、ありがとうございます。

まだ続きます。

これからもよろしくお願いします。

追伸

お気に入り登録、評価をくれた方、これからの励みになります。

重ねて、お礼致します。

ありがとうございます。

### 34話

・・・階段を下りて行った。

ちょうどバータックさんも用事が終わったようで、待つことも待たせることも無く合流できた。

お昼に近かったこともあり、そのまま街中の食堂に移動し、お昼ご飯を食べることになった。注文した料理を待っている間に、バータックさんはリリアの様子がムスツとして怒っているようだったので僕に小声で何かあったか聞いてきた。

「サークさん、ギルドで何かありましたか？なにやらリリアの機嫌が悪いような気がします・・・」

「特になかったと思いますが、確かに機嫌が悪かったですね。」

僕も思いつく事がなかったなので、そのままバータックさん返事をした。するとリリアから話し掛けられた。

「お父さん、サークさん、何を小声で話し合っているのですか！？男同士で気持ち悪いです。」

「いやあ、大した事じゃないよ。な、サークさん。」

「ええ、そうです。大した事じゃないです。」

僕は大きく頷き返した。リリアはジィッと僕達を見詰めて

「なんか怪しいです。」

バータックさんは話題を変えようとしたが、慌てていたのかリリアにそのまま聞いていた。

「それより、えっと、リリア、ギルドで何かあったのかい？」

リリアは少し考えるようにしてから、いきなり僕の方を一瞥してから答えた。

「サークさんが不潔です。初めて会った女の人を触ったり、色んな女の人に囲まれて鼻の下伸ばしたりしてました。」

バータックさんは少し驚いたようだったが、すぐに僕へと確認してきた。

「サークさん、本当ですか？」

「それは誤解です。リリアもあの時言ったよね。受付のお姉さんがポーっとしていて、僕に気が付いてくれなかったから、肩を揺すっただけだよ。」

僕は完全に否定をし、リリアに再度説明をした。

「それは・・・けれど、その後の説明の時は色んなお姉さんに囲まれた時はだらしのない顔をしてました。」

リリアは少し詰まったが、追いつちをしてきた。

「あれも、説明を受けていただけで何もやましい事はないよ。」

それも否定したが、リリアの追撃は終わらない。

「説明を受けるのなら、1人のお姉さんで十分のはずです！」

「ツツツ！」

確かに、僕は返答に詰まってしまった。説明の内容を思い出しても1人からの説明だけで十分だった。何故にあんなにお姉さん達が出てきて、入れ替わり説明してくれたか分からなかった。

「サークさんは無自覚に女の人に接し過ぎです。もう少し自覚を持たないと皆さんが不幸になります。」

僕は何故に皆が不幸になるのか分からなかった。バータックさんも静かに事の成り行きを見守っていたが、僕に小声でアドバイスをしてくれた。

「サークさん、とりあえず謝る方が良いですよ。」

「わかりました・・・」

僕もバータックさんに小声で返事をしたが、少し納得がいかなかった。

「リリア、ごめん。次からは気をつけるよ。」

「ええ、次からは気をつけて下さい。」

リリアはそう言った後に小声で何か呟いたが僕の耳まで届かなかった。

た。

「・・・バカ、サークさんの鈍感、女心が分からない、無自覚の三拍子が揃ってしまうのですね・・・」

会話の流れを読んだかのように、注文した料理が運ばれてきた。リアも何時も通りに戻って、食事は楽しい時間となった。

食事が終わり、僕はバータックさん達と別れようとして

「バータックさん、お世話になりました。これから下宿先を訪ねようと思うのでこれで失礼します。それと、冒険者ギルドの登録では紹介状ありがとうございます。リアもご飯とかありがとうございます。美味しかったよ。アイシャ、数日の間の旅だったけど楽しかったよ。」

それぞれに感謝をし、頭を下げようとしたらバータックさんがストップの声を掛けてきた。

「サークさん、ちょっと待って下さい。何処を訪ねるかは分かりませんが、道案内で娘達を連れて行ってください。初めての王都では地理が分からないと思うので役に立つかと思えます。私が案内できれば良いのですが、昼からは店に出なければいけないものですから。」

僕はバータックさんの申し入れを遠慮しようとしたが、バータックさんは自分達が受けた恩はこれくらいじゃまだまだ返しきれないと言って、リア達を僕の道案内に付いていくように言った。この時、僕はバータックさんがリア達に1つの指示を出していたことは知らなかった。僕の住む所を調べておく事を・・・

「リリア、アイシャ、2人とも頼んだよ。しつかりサークさんの道案内をするんだよ。私は今から店に行つて来るよ。夕ご飯までには戻るから。」

「はい！」

2人はバータックさんの言葉に返事をし、僕の道案内を引き受けてくれた。リリアは僕が何処に行きたいか住所を聞いてきた。住所を伝えると少し遠いので王都内を巡回する馬車に乗ろうと提案してきた。僕は反対する理由もないので馬車に乗ることにした。目的地に着くまでの間はリリア達2人の観光案内を聞いて楽しんでいた。観光気分も終わり、目的地周辺までやってきたので、僕は馬車を降りて、歩いて下宿先を探すことになった。暫く探したが分からなかった。近所の人に案内してもらった。

### 34話（後書き）

ここで読んで頂き、ありがとうございます。

・・・近所の人に案内してもらった。

着いた先には思ったより・・・いや、それ以上に立派なお屋敷があった。父さんからは昔お世話になった上司の方しか聞いていなかったから、人並み以上に裕福な家かなとは思っていたが、これは家ではなくお屋敷だった。案内してくれた人にここで間違いないかと尋ねたら、やはり間違いは無いですと返ってきた。リリア達もお屋敷を見て感想を漏らしていた。口々にお爺様のお屋敷ぐらいかしらとか、お爺様のお屋敷の方が派手ですとか、あそこに見える噴水はお爺様のお屋敷に在るのと同じような形をしているとか・・・平民である僕には、凄いお屋敷に来た。それだけで頭がいつぱいになった。

僕がボーっとお屋敷を眺めていると、リリア達は門の側にいる守衛さんに声を掛けに言った。僕が正気に戻った時には門は開かれており、ひつじ・・・じゃない、執事さんがお屋敷の中に招いてくれている。執事さんに案内されるままお屋敷の中を歩いていくが、見たことも無いような豪華な装飾品でいたるところが飾られている。僕はあれを壊したらいくらするのかなとか、萎縮しながら庶民的なことを考えていた。リリア達は逆に落ち着きながら、お爺様のお屋敷のより大きい物があるなど色んな会話しながら、案内を受けている。その様子は慣れたものであり訳を聞いてみると、お爺さんの実家はここと同じ規模のお屋敷で、そこには良く遊びに行ったり、他にもバータックさんと一緒に貴族のパーティーなどもよく参加しているのでこれくらいは珍しくないようだ。住んでいる世界の差を感じた。

執事さんに案内された部屋は、かなり大きく意味も無く落ち着かな

かった。ソファに腰を掛けて待つように勧められ、執事さんは部屋を後にした。程なく、メイドさんが飲み物を持って部屋に入ってきた。メイドさんの動きは、優雅でそれでいて無駄が無く見えて美しいとさえ思った。その様子を眺めているとメイドさんと目が合った。メイドさんは頬をほんのりと赤く染めて、何事もなかったかのように飲み物を並べるが、少し手際がぎこちなくなった。並べ終えたメイドさんは何かあれば、テーブルの上の呼び鈴でお呼び下さいと言いつつ、深くお辞儀をして部屋の外に出て行った。扉を閉めるときに再び目が合ったと思っただけ、軽くウインクをしてきた。

「いったー！」

いきなり、脇腹に痛みが走り声を上げてしまった。その後、冷や水を浴びせられる様な冷たい声色で

「メイドさんを見つめ過ぎです。不潔です。」

リリアのお叱りを受けた。

アイシャからは冗談交じりに

「お兄ちゃん、わたしがメイドさんの格好でお世話してあげようか？」

からかわれてしまった。

僕はやましい気持ちで見ていなかったの、否定の意見を述べた。

「僕は別に疚しい気持ちで見てなかったよ。ただ、執事さんにしてもメイドさんにしても動きに無駄が無く綺麗だと思ったから見てい

ただけだから。」

「え〜でも、執事さんの時よりお姉さんの方が夢中に見ていた様な気がするよ。」

僕は慌てながら答えた。

「そ・そんな事はないよ!」

「お兄ちゃん、そんなに慌てて否定しても誰も信じないよ〜。」

「信じられないです!そんなにメイドさんが良ければ、私がサークさんに……。」

リリアは言葉の途中で口を押さえて、顔を真っ赤にして言葉を止めた。

コンコン

扉をノックする音が聞こえたので、返事をする執事さんが入り、ご主人様が間も無く来られますと告げた。執事さんが少しして扉を開けるとそこには歳を感じさせない筋肉質の男が立っていた。男は部屋に入り、僕に声を掛けてきた。

「よく来たな。ワシがグレンバツハハリカルドだ。」

発せられた声には歴戦の兵としての自信と風格が宿っていた。僕は失礼の無いように片膝を付きながら、頭を下げ礼をとった。

「そんな礼を取る必要は無い。ワシは軍を辞めた唯の隠居爺だ。」

僕は礼を解き、改めて名を告げた。

「私は王家の森から来ましたサークといいます。リガルド様、今回の下宿の件につきまして、有難う御座います。」

リカルド様は何か懐かしむ様な温かな目で僕を見つめてくれている。

「気にするな。大した事ではない。見ての通りこの家は広さだけはあるから、妻と2人では寂しいくらいだ。それにお前は覚えておらぬかも知れぬが、小さい頃に何度か祖父殿と一緒に来ていたぞ。妻もお前が下宿しに来るって聞いて、一日千秋の思いで待っておったぞ。それより、先程も言ったようにワシは唯の隠居爺だから、グレンでよい。」

「でも、それでは・・・」

僕の言葉はリカルド様に遮られた。

「ワシがよいと言ったらよい！」

「では、グレン様、これからよろしくお願いします。」

「様もいらぬ！それより、こちらの小さな淑女達は何処の何方かな？うゝん何処かで見た覚えがあるような無いような・・・」

グレンさんはリア達を見て、僕は1人で来ると聞いていたのにおかしいなという風な疑問を浮べた顔になっていた。僕は自分のことだけで、2人の紹介ができてなかった事を思い出し、慌ててそれぞれの紹介をした。

「こちらの2人は、王都に来る途中で護衛の仕事を引き受けた方の娘さんです。王都に着てから色々とお世話になっていました。」

僕の紹介もそこそこにリリア達はそれぞれ自己紹介をした。

「私はリリア、ファミルと申します。サークさんには危ないところを助けて頂いたので、少しでも恩返しを出来ればと思い一緒に居させてもらいました。」

「わたしはアイシャ、ファミルっています。よろしく願いします。」

そこにはいつもの雰囲気とは違う2人が貴族の令嬢顔負けの丁寧な挨拶をしていた。

「おおお！ファミル殿のお孫さんか、なるほどならば何処かの舞踏会で見かけた事があるかも知れんな。」

グレンさんは、何度か頷きながら納得顔になっていた。僕は1人今の状況が把握できないでいた。僕の様子を見たグレンさんはファミル家のことを説明してくれた。

ファミル家はこの国最大の商人ギルドの代表であり、この国の経済を支えていると言っても過言ではなく、ファミル家の行動、言動の一つ一つがこの国の経済を左右している。その辺の貴族より発言力は強く、王家の信頼も厚い。

僕は驚くしかなかった。確かにバータックさんは、お父さんがギルドの代表していると言っていたが、この国最大のギルドとは言って

なかった。自宅も普通の家だったし、そんな素振りも無かった。後で聞いたが、お爺さんの教育方針で商いは民衆がいてこそ成り立つ。贅沢な暮らしをして金銭感覚を麻痺させては、商売が出来なくなる。民衆の中で生活し、何がいくらで必要になるかを体に染み込ます為に、今の生活をしているらしい。

一通り自己紹介が終った頃にグレンさんの妻、カーラが焼きたてのクッキーを持ってきて、メイドさんがお茶を入れ直してそのままお茶会となった。

日が傾き、夕暮れ時になってきた。グレンさんはリリア達を家の者に送らすと告げ、馬車の準備をさせた。別れの際にカーラはいつでもこの家に遊びに来て、も良いからと伝え、皆で見送った。

### 35話（後書き）

ここまで読んで頂き、ありがとうございます。

話の展開が遅いですが、皆様生暖かく見守ってください。

これからもよろしく願います。

### 36話

・・・皆で見送った。

お屋敷の中に入るとグレンさんは、僕を中庭へと誘った。中庭に着くと僕に武器を構えるように言い出した。僕は何をするのかと聞くと、夕御飯前に軽く運動をするので付き合おうように言われた。軽くと言っても実戦的な組み手になるのだが・・・

僕は剣を構えて、グレンさんの前に立った。グレンさんの構えは隙が無く、何処から攻めようか迷っていると、挑発をするかのように手招きをした。このまま向かい合ったままお見合いをしても何もならないので、誘いによって攻撃を仕掛けてみた。

ヒュッン

僕の攻撃はグレンさんに見切られ余裕で回避された。僕は自分の強さにある程度は自信を持っていた。確かにグレンさんから伝わる強さは並大抵ではないが、僕の攻撃を防御をせずに避けるとは思わなかった。しかも、僕が捉えられない動きをするのではなく、演劇の殺陣のように決められた所に打ち込んだ斬撃を、決められた所に移動して避けたように不思議な感じがした。その後の攻撃もどれだけ連撃を繋げても、目にも止まらない体捌きからの斬撃であっても、完全に見切られて回避された。

「さて、準備運動はこれくらいで良いだろう。そろそろワシも攻撃させてもらおうぞ。」

肩を解しながら、僕に告げてきた。グレンさんの攻撃は一撃一撃は

避けたり、防いだりと対応出来た。しかし、連続で攻撃を繰り返してくるとまるで詰め将棋のように少しづつ確実にどんな防御も出来ない状態に繋げていく。そこには武術の師匠であった祖父とは違う強さがあった。

何度かの攻防の入れ替わりがあったが、それはグレンさんの匙加減一つで実践なら僕があっさりと負けていただろう。組み手はカーラさんが呼びに来るまで続いた。僕は完全に息が切れていたが、グレンさんは軽く汗をかき軽めの運動をし終えた後のようだった。結果から言うと完全に僕の負けであった。祖父のように僕以上の体捌きで、避けているのではなく、又僕以上の速度で攻撃を繰り返している訳ではないのに、何故こんなに一方的な勝敗になったかグレンさんに尋ねた。グレンさんはカーラさんを待たせると後で怖いから、夕御飯を食べた後で教えると言ってくれた。

案内された部屋には20人で食事をして余裕のある大きなテーブルがあり、用意のされている料理も見たことの無いような豪華な物だった。昨日リリアに作ってもらった家庭的な料理も美味しかったが、この豪華な料理も美味しかった。しかし、毎日食べることを考えるとやはり家庭的な料理のほうが・・・と思っていたら、今日は僕が来たので歓迎の意味を込めて豪華な料理になっていると言われ、安心した。

食後、グレンさんは先程の組み手が何故一方的な流れになっていたか教えてくれた。僕とグレンさんの身体能力を比べると僕のほうが高いらしい。しかし、グレンさんから見ると身体能力だけは高いが動き自体はまだ雑で隙が多い。僕がグレンさんの1.5倍の動きが出来ても、動作に三拍子掛かっているのは、グレンさんの一拍子の動作の方が速い。だが、グレンさんの動きを習得すれば僕はまだまだ上にいけると確信した。でも、まだ分からないことがあった。

いくらグレンさんの動きに無駄が無かったとしても、僕の動きを完全に読んで、見切ることは別だ。何か別の訳があるはずだと再度聞いたら、経験の差、それと目だと言われた。経験の差はグレンさんと僕とでは埋めきれない差があるのは分かる。目についてはどうだろう？ 詳しく聞いてみるとグレンさんは自慢気に話してくれた。

「ワシは昔から目は良い方だった。視力、動体視力、観察眼、洞察眼などの能力が高く、お前の祖父との組み手でも勝率4割以上だったぞ。」

「な！・・・あの祖父に4割以上ですか・・・」

僕は純粹に驚くしかなかった祖父が生きていた時は勝率1割にならなかった。今でも1割いくかどうかだろう。しかし、グレンさんは若い頃の祖父とほぼ同等の強さを持っていたことになる。

「お前の祖父はワシより、力、速さ、技、どれを比べても上をいつており、唯一勝っていたのが目の良さだけだった。自分の無駄な動きを無くしていき、相手の動きの隙をつく様にしていき、当時最強と称されていたあやつと互角に戦えたんだ。それに比べたら、お前の動きはまだまだ隙だらけで自分自身を制しきれていない。」

グレンさんは僕にまだまだ未熟だと言い放ち、また明日の朝から組み手をするので付き合うように言ってきた。

僕もまだまだ上を目指すのにグレンさんからの教えは正直有り難かった。

「グレン師匠、これから宜しくお願いします。」

グレンさんは少し照れたようだったが、僕が修行のけじめの言  
うと納得して受け入れてくれた。但し修行の時だけで、いつもはグ  
レンと呼ぶように念を押してきた。

### 36話(後書き)

ここまで読んで頂き、ありがとうございます。

投稿が遅くなってすみませんでした。

これからも続きを書くのでよろしくお願いします。

### 37話

・・・次の日、僕はグレンさんの修行を朝から受けてバテ気味だった。朝食の時にこれからの予定を聞かれないので、先日冒険者ギルドに登録をし、当面は色んなクエストを請けようと思っていると伝えた。そこから約3時間、グレンさんの若い頃の冒険談を聞かされる嵌めになった。

・・・グレンさんの話が落ち着いたところを見計らって、ギルドに行つてくると伝え、逃げ出すようにお屋敷を出た。

昨日は巡回馬車に乗って来たが、自分の足で歩くのも良いだろうと思ひ色々見ながら向かうことにした。

この辺りは住宅街らしく回りには大通りで見たような出店は無く、落ち着いた感じであった。たまに見かけるお店は宝石や服等の看板が掛かつてある。

暫く歩くとお城の堀・・・ここまで大きいと湖だな。よし！湖と呼ぼう。実際、後から聞いた話では湖の地形を利用して城を建てたらしいが・・・

湖面に写るお城は水面の輝きと相俟って、お城自体が光り輝く様に見える。湖の回りには散歩を楽しむ家族連れやお城の絵を描く人など様々に過ごしている。

・・・大通りの方へ向かって歩いていくと、人が段々と増えていった。それに比例するように出店や屋台などのお店も増え、活気が出てきた。

昨日は通り過ぎるだけだったが、今日は急ぐ必要が無いので、色々な店を覗きながら行こうとした。何軒かお店を回ったが、僕が住んでいた近くの町とは、比べものにならない品揃えで、見ているだけでも十分に楽しめた。

次のお店に入ると、武器や防具が目に入った。どれも丁寧に手入れされており、見やすく並べられていた。今日は武器より防具を見ようと思いい防具が並ぶ一画に向かおうとすると横から名前を呼ばれた。王都には知り合いは殆ど無く、呼ばれた方を向くとそこにはバークツクさんがいた。

「バークツクさん、おはようございます。いや、今の時間なら、こんにちはかな？」

「ええ、こんにちは。サークさん、何かお探しですか？」

「探すって程ではないですが、冒険者ギルドに行く途中で色々見て回ろうと思って、立ち寄ったんです。」

「そうですね。あ！そうだ。今、少し時間ありますか？」

「別に急いでいないので大丈夫です。」

「御礼の件です。ちょっとついて来てもらえますか？」

バークツクさんは僕をお店の奥へと案内してくれた。

途中、関係者以外立入禁止の立て札があったが・・・

「バータックさん、お店の奥に勝手に入って良いのですか？」

僕は少し不安になり、バータックさんに話し掛けたが、バータックさんは一瞬何の事か分からないような顔をしたが、すぐに思い付いたように答えてきた。

「ああ、大丈夫ですよ。ここは私のお店ですから。」

案内してくれた奥の部屋は、表の賑やかな雰囲気とは違い落ち着いた雰囲気があった。その部屋に並べられている武器や防具は表の物とはランク自体が全く違う。

「サークさん、気に入ったのがあれば、御礼と言うことで差し上げます。」

バータックさんは満面の笑顔で言ってくれた。しかし、どれを見てもかなり高価そうで、気軽に貰える物ではなかった。暫く防具を見ていたが、どれも高価で迷っていると、部屋の片隅に古い感じの黒いコートがあった。近付いて見てみるとコートと中に上下の防護服が組合せてあり、鎧などと違って動き易そうな装備品だった。他の商品と違い値札もなく、使い込まれた感じはあるが、何故か気に入った。

「バータックさん、この黒い防護服一式は値段が付いていないですか？」

「最近、倉ごと仕入れた際に、中にあった装備ですね。鑑定が済んでいないので、値段はまだ決めていません。実際その装備は下手な鎧より守備力が高いとは聞いています。」

バータックさんの説明を聞いて、少し残念に思いながら答えた。

「そうですか。それならやはりいい値段が付きそうですね。」

バータックさんは首を振りながら軽く否定してくれた。

「いや、これは中古品扱いなので安くなると思います。気に入られたのなら中古品になりますが、貰って下さい。」

値段がわからないが他に並んでいる商品の値段は高すぎて気が引ける。これならバータックさんの言葉を信じて、少しでも安いと思えるので決めることにした。それでもしないと、いつまでも帰してもらえなさそうだった。

「じゃ、これを頂きます。」

「それでは早速装備してみて手直しするところが無いか見て見ましよう。」

そう言うと、バータックさんは他の店員さんを呼出し、僕の装備の手伝いをするように指示した。

僕は自分で出来るかと遠慮したが、店員さんは何故か若い女の子が2人きて、遠慮して逃げ出そうとした僕を、あっさりと捕まえて楽しそうに僕の着替えの手伝いしてくれた。バータックさんは僕のそんな様子を見ながらいつものニコニコ顔で待っていた。・・・そんなバータックさんに少し怒りを覚えた。

装備してみるとサイズが自動で調整されて、全く違和感がない。コ

ートを羽織っても、暑くもなく快適な温度になっている。これはやはりかなり高価な品かも知れないと思いバータックさんに返そうと思ったが、先に返さないように釘を刺された。

バータックさんにお礼を言い、冒険者ギルドに向かうことにした。

## 追記

ある店員がバータックさんに話し掛けてきた。

「オーナー宜しかったのですか？あの装備で小さなお城が領地付きで買えますよ。しかも、使われている素材や掛かっている魔法の事を考えるとそれ以上の価値があります。」

バータックさんは静かに答えた。

「良いんだ。私達の命の恩人であり、そして私の目に狂いが無ければ、歴史に名を残す程の活躍をするだろう。そんな人物が家の装備を使っているとすれば、これ以上の名誉はない。」

「私にはわかりかねますが、オーナーがおっしゃる間違いはないでしょう。」

ある店員は理解出来ないがオーナーの言葉には絶対の信頼を寄せている為、納得はした。

### 37話（後書き）

ここまで読んで頂き、ありがとうございます。

投稿が遅くなって、すみませんでした。

これから、書くので宜しくお願いします。

・・・冒険者ギルドに着いた頃には、お昼になっていたので昼食を食べてからクエストを請けに行った。

2階のクエストセンターの受付に行つて、初めてクエストを請ける事を受付のお姉さんに伝えた。

お姉さんからクエストには請けれるランクと種類があり、初めてならDランクのクエストから請けることを進められた。

どんなことをするのか詳しく内容を聞いてみると、あるお店の整理の手伝いをするこらしい。数時間で終わるので危険もなく報酬は少なく銀貨4枚。クエストのやり方を勉強するにはちょうどいいと思い、請けることにした。

ギルドカードの提示を求められて、お姉さんにお渡すと驚いたようにカードを確認した。

「このカードはBランクじゃないですか。初めてクエストを請けるじゃないんですか？」

僕はこの質問の意味がわからず聞き返した。

「初めてですよ。昨日登録に来て、今日初めてクエストを受けに来ました。何か問題でもありましたか？」

「通常は初めて登録された方はDランクから始めます。お城の兵士はCランクからです。Bランクからなんて・・・昨日・・・あ！・・・

・やっぱり、貴方がサークさんでしたか。」

お姉さんは説明の途中で何かを思い出し、手にしているカードを改めて確認して1人納得をした。僕はますます訳がわからず、再度お姉さんに尋ねると

「Bランクから始められる方は殆どいませんので、Bランクのカードをお持ちで初めてクエストを請けに来たなんて信じられなかつたんです。異例のBランクから始められる方がいると、昨日に聞きましたが貴方だとは思わず、すみませんでした。改めまして手続きの続きをします。」

お姉さんはそう言うと、書類を取り出して僕に渡してきた。渡された書類を確認してみると、『クエスト依頼書』と書かれていた。書かれている項目は、ランク・依頼主・クエスト内容であった。

「これをどうすれば良いですか？」

「はい、これを持って依頼主のところに行き依頼内容を完遂してください。その後、依頼者から完遂のサインを貰ってきて下さい。」

「わかりました。じゃ、早速行つてきます。」

僕は依頼書を持って依頼書に書かれた店に向かった。着いた店は魔法関係の道具などを扱う店の中に入ると、いたる所に色んな物が並べ・・・置かれ・・・いや、積まれていた。積まれている状態を見ながらこれだけの物を数時間で片付けられるのか少し不安になった。そういえば、店は開いていたが依頼主の姿が見えない。

「すみませーん、誰かいませんか？」

何の返事もない・・・

もう一度呼んでみた。

「すみませーん、誰かいませんか？」

・・・何の返事もない・・・どうしようっ???

・・・依頼主に会えずに困っていると

ガタッ

「キヤッ」

ドサッ

何が崩れるような物音と小さな声が聞こえた。気になったので声の聞こえた置くへと行ってみる。そこには多数の本に埋もれた少女が気を失って倒れていた。慌てて本を除けて少女を抱き起こし、意識を覚醒させようと声を掛けた。

「大丈夫ですか？」

少女は起きる気配がなく、軽く頬を叩いてみた。

「・・・うん」

少女の意識は覚醒し、目を開けて僕をジッと見つめた。

「気がつきましたか、どこか怪我はしていませんか？」

少女は意識がまだハッキリしていないのか、僕を見たまま何の反応も返さない。頭の打ち所が悪かったかもしれないと思い、病院に連れて行こうとそのまま抱き上げたら返事が帰ってきた。

「ええ、別に痛いところはないです。」

「そう、良かった。」

「はい、良かったです。ところで貴方はどちら様ですか？」

見た目には怪我も無く、返事も一応あったから大丈夫だろう。僕は名乗ろうとした時、少女は胸の前で手をポンツと合わせて思い出したように言ってきた。

「あ、私、名前を言って無かったです。失礼しました。私はサリナって言います。」

何か独特な雰囲気のある子だな・・・

「僕はサークって言います。ギルドの依頼でこの店に来たんですが・・・。」

「ギルドからですか。わざわざありがとうございます。それと、なぜ、私は抱っこされているのでしょうか??？」

確かに、抱き上げたまま話しかけていた・・・僕は慌ててサリナを下ろした。

「ごめんね、倒れていたなので病院に連れて行こうかと思ったんだ。」

「そうなんですか？なんで倒れていたんですかね？確か整理の途中だったんですが。」

サリナはそう言うと手を組んで右手を頬に当てて、考えながら部屋の様子を見回した。

「あらら？先ほどより部屋が……ユー君に……ユー君に……」

散乱している本を見て、ショックを受けているみたいだ。

「ただいまー」

誰かが帰っていたみたいだ。

「サリ姉、奥の部屋に……お前誰だ？」

部屋に入ってきた少年は僕と同じくらいの歳だろうか？僕を見ると警戒しながら、質問してきた。

「ユー君？こちらはサークさんって言うの？ギルドから来られたの？」

少年はサリナの方を向き

「ギルドから……って、サリ姉！」

部屋の様子を見て、サリナにお説教を始めた。

・・・約20分経過、僕は横で忘れ去られていた・・・

お説教の内容は要約すると、整理してもドジをするから止めとくように！らしい。お説教の一区切りついたところで、僕は2人に声をかけた。

「えっと、そろそろいいかな？」

「あ！すみません。サークさんでしたね。ギルドから来たという事は、整理の依頼の件ですよね。」

少年の態度が先ほどは全然違うと思いながら

「ええ、そうです。何を・・・っていうか、これらの整理です・・・よね？」

部屋の中の散乱した本や、積み重ねられた大量の道具など少し圧倒されながら言った。

「はい、早速はじめましょうか。・・・まだ名乗っていませんでしたね。ぼくはユーマと言います。作業はぼくの指示に従って下さい。よろしくお願いします。」

本当にこれらの量が数時間で終わるのか不安になったが、初めての依頼で、ここまで来て断るわけにもいかないから素直に従おう。作業の指示を聞くといろんな魔法道具をお店に並べるものと、魔法ギルドに持っていったって鑑定してもらおう物に分け、鑑定する物は馬車の荷台に積むだけらしい。

「ユー君、私は何したらいい？」

「整理には手を出さないで！終わるものも終わらなくなるから、先程言ったようサリ姉は大人しく店番しといて！」

ユーマはサリナに強く言い放った。

「ユーマ君、それは少し言い過ぎでは？」

「サークさんは口を出さないでください！整理が丸一日かかっても終わらなくなりますよ。」

「・・・ユー君酷い！昔はお姉ちゃんの言う事を素直に聞いてくれた！優しい子だったのに！」

サリナは床にしゃがみ込み指で、のの字を書いて、いじけている。

「サリ姉、昔話もいじけるのも後、店番してきて」

ユーマはそんなサリナの姿を見ても、態度を崩さずに表を指差し、店番をしてくる様に言った。サリナはトボトボと歩いていった。時折こちらを振り向きながら、寂しそうな様子で・・・

「本当に良かったのかな？」

「大丈夫です。サリ姉はあんな感じですけど、かなり完璧に近い人ですよ。・・・片付けが出来ない点を除けば・・・」

ユーマは僕のは方を向き作業の指示を簡単に出してきた。

「では、直ぐに始めましょうか。整理する道具には張り紙をしているので、張り紙を見ながら運んで下さい。わからない物は纏めて貰って最後に分けます。じゃ、サークさんは大物のギルドの張り紙の物を裏の荷台に積んで行って下さい。」

作業をしながら、これだけ大量の道具をどうしたのか疑問に思っている。聞いてみたら、両親が仕入れという旅行をしているので、各地で仕入れた道具を偶に一気に送ってくる。今回はいつもとより多かったので人を雇うことにしたそうだ。中には効果のハッキリしていない道具もあるので、魔法ギルドに持って行って鑑定して貰うらしい。

・・・4時間後

奥の部屋とお店の中に積み重ねられていた道具の整理も殆んど終わり、依頼達成となった。

「サークさん、ありがとうございます。思ったより早く終わることが出来ました。」

「ユーマ君の指示や張り紙の下準備があったから、迷わず運ぶことに集中できたよ。そうだ、依頼書にサイン貰えるかな。」

僕は依頼書をユーマに渡し、サインを貰った。

「また、この店にお客様として来て下さいね。サービスしますから。」

「ついでに初めての依頼は無事に終わった。」

### 38話（後書き）

ここまで読んで頂き、ありがとうございます。

投稿が遅くなって、すみません。

某狩りゲームをして、書いていませんでした。

重ねて、お詫び致します。

小説自体はまだまだ続きます。

これからも、よろしくお願いします。

### キャラ紹介3

グレンバツハリカルド（父の昔の上司）

歳 62歳  
身長 198  
体重 95

武器 バスターソード

髪型 短髪角刈り

髪の色 真紅

瞳の色 藍色

外見 62歳に見えないくらい若々しく見た目は40代後半。退役し、軍籍に身を置いていないが日々の訓練は欠かさず行い、筋肉に衰えが見えない。

特技 剣術、格闘術はA

火魔法はC

戦術はS

観察眼、洞察眼、動体視力などS

カーラハリカルド（グレンの妻）

歳 58歳  
身長 165  
体重 48  
スリーサイズ 書かなくて良いでしょう？

武器 なし

髪型 腰までの長さで軽くウェーブが掛かっている

髪の色 緑色

瞳の色 藍色

外見 貴婦人をそのまま現したかのように気高く、同時に優しさを讃えた笑顔が似合う女性。

特技 風魔法はC  
水魔法はD  
料理はC

サリナ（魔法道具店の娘、ユーマの姉）

歳 20歳  
身長 155  
体重 45  
スリーサイズ 胸：かなり大きい 腰：細い 尻：普通

武器 杖（150cm位で先端に魔石が埋め込まれている）

髪型 背中までの髪にふわふわウェーブが掛かっている  
髪の色 薄めの茶色  
瞳の色 藍色

外見 ふわふわ髪がよく似合っているが少しタレ目で、天然が入っている。店の看板娘として頑張っていて、熱狂的なお客がいる。

特技 土魔法はC

火魔法はD

鑑定、解析はB

ユーマ（魔法道具店の息子、サリナの弟）

歳 17歳

身長 170

体重 55

武器 腕輪（魔石が埋め込まれて魔法の効果上昇する）

髪型 少しウェーブの掛かったセンター分け

髪の色 薄めの茶色

瞳の色 藍色

外見 良くも悪くも普通の顔立ち。優しい雰囲気や常にかんづいており、一部のお客を獲得している。

特技 土魔法はC

風魔法はC

## 間幕 2

俺の名はカルロ。

簡単に自己紹介をしておく。

この国で近衛隊に所属している。自慢じゃないがこの若さで近衛隊に入隊していることはハッキリ言ってエリートになる。実力もこの国で上から数えた方が早いくらいだ。家系は上級貴族で幼い頃は姉弟でセシリアの遊び相手に選ばれていた。それに10人中9人は俺の事を男前だと思うだろう。(思わないのは肉親ぐらいか)

自己紹介のつもりが単なる自慢話になってしまった。ここで重要なのは近衛隊に所属している隊員で、セシリアの幼なじみであることだ・・・

ある日、俺達は王妃様に呼ばれた。王妃様は俺達姉弟に向かって、

「貴方達はセシリアの今の立場を理解しているでしょう。王が亡くなり、今は私が政わたたくしまつじごとをしています。残り1年足らずでセシリアの継承の儀が行われます。しかしセシリアはあの時から魔法をまともに使えなくなっています。このままではあの子が王位を継ぐのに支障をきたします。それどころか別の者が王位を継ぐかも知れません。そこで王家の塔に行って証を手に入れて貰います。貴方達にはその際の護衛を命じます。」

いきなり護衛の任務を命じられた。

レイラは一礼し、任務を受けた。

「わかりました。質問をしても宜しいでしょうか？」

王妃様は軽く頷き、質問する事を許された。

「セシリア様の今の立場が危ういので、証を取りに行くことはわかりません。道中の安全の為に護衛が必要なのもわかります。しかし何故、私達姉弟なのですか？万全を期する為なら近衛隊の1部隊を配備した方が宜しいのではないのでしょうか。」

俺はレイラが王妃様に対して質問をしているの横で静かに聞いていた。

「この件は少人数ですませます。セシリアにとってこの試練が必要になる予感がするのです。その為に貴女達に命じるのです。・・・では、下がりなさい。」

そう言われて、俺達は退室しようとした。だが、俺だけ残るように言われた。

「貴方には先に言っておきます。多分、いや確実にアサシンに襲われます。そして、出来れば雇い主が誰か調べてください。どんなに些細な手掛かりでも良いです。セシリアの王位継承についての危険を取り除いて欲しいのです。」

「ご無礼かと思いますが王妃様は何をそんなに焦っていらしゃるのですか？他の王族の方が王位についても問題がないのでは？」

俺は王妃様に先ほどから思っていたことを問いかけた。

「その上でセシリア様との方と子を成せは、王家の直系も守られるのではないのですか。」

「王家のことを考えたら、普通はそうでしょう。しかし今は王家の支配力が弱まっています。継承問題で王家に付け入る隙を与えないのです。隙を与えるとあの子の命だけでなく、この国をも危機に追い込みます。」

「それも予感ですか？」

「そうです。予感と言うより予知に近いです。私はこの能力があった為、王妃として迎えられました。・・・それとこの件が終わった後に詳細の報告を命じます。」

俺は一礼をし、退室した。

・・・2週間後

俺達は無事に王家の証を手に入れて、この王都に戻ってきた。そして、俺は王妃様に報告をした。王家の森でのサークとの出会い。アサシンから手掛かりが掴めなかった事。事細かに説明した。

「以上、王家の森で起きたことを報告します。」

俺の報告を静かに聞いておられた王妃様が口を開かれ、

「カルロ、そのサークという者は信頼にたる人物でしたか？」

その問いに対して俺は自信を持って答えた。

「出会って間もないですが、信頼出来る男だと言えます。」

その答えを聞き、王妃様はそれまでの厳しい表情が少し和らいだ様に見えた。

「そうですね、わかりました。今回の任務、ご苦労様でした。下がって、休みなさい。」

次の瞬間にはいつもの厳しい表情に戻っていた。

俺は自宅へ戻る道中、王妃様のサークに対する興味とあの時の表情が気になったが、情報が少なすぎて答えを考えるのを諦めた。

## 間幕2（後書き）

ここまで読んで頂き、ありがとうございます。

最近、投稿が遅くて、すみません。

しかし、ゆっくりでもまだまだ続けるのでよろしくお願いします。

・・・王都に来て、約1ヶ月たった頃、僕はちよつとした有名人になっていた。

王都に着てから、昼間はギルドで請けた依頼をして、夜にはグレンさんに修行をみてもらう生活を送っていた為、請ける依頼は王都内で出来る店の手伝い等のDランクの依頼だけだった。市民生活に密着した依頼は、王都での世間勉強になった。それに街の中では顔なじみが増えて、ギルドには僕を指名している依頼が徐々に増えてきた。

一方、ギルドの中では異例の新人が現れたと噂になり、パーティーの誘いが何回かあった。しかし僕は誘いを断り、Dランクの依頼ばかり請けていた為に、今では腰抜けのお飾り冒険者と陰口を言う冒険者が出てきた。僕自身はそんな陰口を気にせず、今までやったことない経験が出来るDランクの依頼で満足していた。

「こんにちは。今日はどんな依頼がありますか？」

僕は受付のシアンさんにいつもの様に尋ねた。

「こんにちは、今日もサークさん宛てに売り子の要望が多いですね。」

いつもの営業スマイルで案内してくれた。

「そうですね・・・最初の頃に比べて、僕が行った時はお客さんの入りが突然増えて、忙しさが倍増するようないや、倍増して

います。何故なんですかね？」

「それは、サークさん目当てのお客さんが、多くなってきた証拠ですね。」

シアンさんは良かったですねつと言つような笑顔で教えてくれた。

「僕目当てって、別におまけとか何もしていないですよ。何を目当てにされているのか、分からないです。」

僕の考えを聞いたシアンさんは、溜め息をつきアドバイスをしてくれた。

「そしたら、お仕事中は最高の笑顔で接客をして下さい。それ皆さんの期待を裏切りませんから。」

「そうですか。心掛けていきます。」

いつもの様にDランクの依頼でも受けようとした時、見慣れない子供達がギルドの中を泣きそうな顔で歩いていた。僕は気になったので子供達に声を掛けてみた。

事情を聞くとお母さんが病気で倒れたので、お医者さんに診てもらったが、薬となる薬草が切れているらしい。お母さんに少しでも早く元気になって欲しいので、薬草を手に入れたいが入荷の予定はまだ先になる。薬草を手に入れる為に冒険者を雇いにギルドにきたが、薬草が生えているエリアはBランクでも危険なエリアになる為、子供達のお金では請けてもらえなかったなので、落ち込んでいたところだった。

「よし！その依頼、僕が請けよう。シアンさん、この子達の依頼をギルドを通しての依頼にでもらって良いですか？」

「駄目よ。このエリアだとBランク相当になるので、残念だけどこの子達の依頼金じゃ無理よ。」

当然といえば当然の返事だった。そこで僕は思い付いた事をシアンさんの耳元で囁いた。

「ちょっとお耳を貸してもらって良いですか？こつすればどうですか？」

コソコソ・・・

聞いているシアンさんは顔を赤くして、たまに耳にかかる息に体を震わせている。

「そ・それなら、何とかいけますが・・・」

まだ、心配で行かせられませんって、顔に書いている。

「じゃ、それをお願いします。」

僕は心配させないように、笑顔でお願いした。

シアンさんは僕の笑顔を見て、澁々ながら了解を出してくれた。

「わかりました。本来あそこは、Bランク相当で新人が、単独で行くようなエリアで無いんですよ。」

「僕のランク忘れていませんか？」

シアンさんは言われればと、いっような顔になった。

「あ！そうでした。でも、危険には違いません。気をつけてくださいね。」

「はい。心配してくれて、ありがとうございます。」

「ここでもし断っていても、後で勝手に依頼を請けるのでしょうか？」

僕はわざとらしい引き攣った笑顔で答えた。

「ばれましたか。多分、そうしてました。」

「はい。これが依頼内容です。Dランクで依頼主の代わりに、指定の薬草を手に入れること。入手方法は問いません。これなら、市場で買ってくるだけの、お使いと代わりません。」

「無理を利いてくれて、ありがとうございます。今度何か埋め合わせしますから。」

僕は依頼書を受け取り、早速目的地を目指した。シアンさんが何か言っていた気がするが、帰ってからまた聞けば良いだろう。

「今度のお休みにお買物でも付き合ってもらおかしら……っていないですし！」

### 39話（後書き）

ここまで読んで頂き、ありがとうございます。

ちょっと、宣伝になりますが別の作品を投稿してみました。

『帝都の夜に』って題名です。読んで頂けたらうれしいです。

まだ続きを書くので、2つともよろしく願います。

## 40話(前書き)

変更

3/7 ジャンヌ ユーリー 名前を変えます。

文章も一部変更します。

僕は急いで家に戻り、準備をしてグレンさんから馬を借りた。目的の湿地に着くまでに3時間が過ぎていた。

シアンさんから依頼書を受けとった時に一緒に湿地の地図をくれたので、薬草の棲息場所までは迷わずにたどり着くことが出来るだろう。

湿地に入るといくつかの魔物の気配を感じる。強さはそこそこみただが数が多い。これなら確かにBランクでもパーティーを組んで来ないと危ないかもしれない。魔物達は野性の本能か、慎重なのか分からないが、すぐに襲ってくることはなさそうだ。

目的の薬草を採るために奥に進んでいくと、悲鳴が聞こえてきた。僕は悲鳴の聞こえた方へ、駆け出した。

近づくと襲われている声が、ハッキリと聞こえてきた。

「ミネア、防御をお願い！その間に少しでも倒すから。」

「ユーリー、私あまり魔力が残っていないから、どこまでもつか分かんないよ。」

襲われていたのは、2人の女の子だった。ユーリーと呼ばれた子は弓を構えて矢には炎を纏わせて回りの魔物に狙いを付け確実に仕留めている。ミネアと呼ばれた子は杖を構えて回りに風の障壁を張り、魔物が近づいて来ないようにしている。

しかし、数が違いすぎる。回りの魔物は30体以上おり、弓矢の数はそこまでない。風の障壁も揺らいでおりそんなに長くはもたないだろう。

僕は剣を鞘から抜き出し、彼女達を助ける為に魔物達の中に飛び込み、切り捨てていった。

「貴方は？」

障壁を張っている女の子が訪ねてきた。

「質問は後で！今は回りの魔物を片付ける。君は障壁を張るのに集中して！」

魔物達は、障壁の外にいる僕の方が仕留め易いと思ったのか、一気に襲い掛かってきた。しかし、何の連携もない攻撃の為、攻撃と攻撃の僅かな隙を見つけ、回避しながら魔物達を攻撃していった。

無駄のない回避と攻撃は、見る者に洗練された舞を連想させる。サークの回りの魔物達は劇の中の殺陣みたいに、まるで打ち合わせをしたかの様に次々と倒されていく。彼女達は次々と倒されていく魔物達の間を舞う様に動くサークに目を奪われた。

「これで最後だ！」

僕は周りの気配を探り、魔物が居ないことを確認してから、彼女達

の方を向き話し掛けた。

「君達、怪我とかはなかった？」

・・・彼女達から反応が返ってこない？近づいてから、もう一度声をかけた。

「君達、大丈夫？もう敵はいないよ。」

僕は、ユーリーの肩に触れて揺すってみた。するとようやく反応が返ってきた。

「・・・あ！あ・・・あ。ありがとうございます。助かりました。」

緊張しているのか少し顔が赤く、言葉を囁んだ。

「どういたしまして、そっちの君も怪我とかない？」

「は・はい！・・・怪我とかないです。助けて頂き、ありがとうございます。」「

2人共やはりあれだけの魔物に襲われて神経が張ってているのかどことなく、ぎこちなさがある。

「気にしないで。困ったときはお互い様っという事で、それより無事でよかった。」

僕は2人に怪我がなく無事だったので、安心して笑顔で答えた。すると、2人の顔が先ほどより赤くなり、ユーリーは俯き、ミネアは目を輝かせて見つめてきた。

「ここには君達だけできたの？」

失礼かもしれないが彼女達だけでこの湿地に来るには力不足だと思  
い、他に仲間がいらないか尋ねてみた。すると真剣な表情になり慌て  
て言ってきた。

「!!! 仲間の3人が殿しんがりとなって私達を逃がしてくれたんです。早  
く助けに行かないと！」

「どっちの方？」

彼女達は揃って指をさした。

「向こうです。」

方向を確認した僕は、すぐさま駆け出そうとした。彼女達も一緒に  
付いて来ようとしたので、ここで待っているように言った。

「しかし、君だけでは危ないよ。」

「そうです。私達も付いていきます。」

それでも付いて来ようとしたので少し厳しいが、僕はハッキリと言  
った。

「すまないが、君達がいると足枷になって、助けられる人も助けら  
れなくなる。幸いこの回りには悪意のある気配は無いから大人しく  
待っていてくれると助かる。」

彼女達はシュウンと落ち込み、渋々ながら納得してくれた。

・・・彼女達の示した方向へ暫く走って行くと、遠くに魔物達と戦っている男性を発見した。男性は左腕を失い、遠目にもわかるぐらい至るところ怪我をしており、体が出血で真っ赤に染まっていた。

男性の回りには倒された魔物達の屍が無数に転がっている。しかし、まだ10体以上の魔物達が回りを囲んでいる。

「加勢する！」

僕は一言言い放ち、戦いに加わった。

先程とは違い魔物達は僕を避けて、男性の方を攻撃しようとする。必然的に男性を守りながら戦うようになる。

彼女達を連れて来なくて正解だった。もし連れて来ていたら、全員守りきれなかったかもしれない。

全ての魔物達を倒し、男性を見ると僕が来た方へ、ふらつきながら歩いている。僕は男性に駆け寄り肩を貸した。

「無理をしないで下さい。しっかりと止血しなければ、危険ですよ。」

「助けて・・・もらっ・・・感謝・・・いる。あの娘・・・助け・・・行か・・・」

男性は満足に声を発する事も出来ない。しかし、言いたいこと、思いは伝わってくる。僕は安心させる為に彼女達が無事なことを伝え

た。男性は安心して緊張が解けたのか気を失った。

・・・男性を担いで彼女達の所に戻った。

「兄さん！」

「ロベルトさん！」

彼女達は僕達を見つけると駆け寄ってきた。男性の状態を見て、彼女達の顔が真っ青になった。しかし、男性が息をしているのに気が付くと、すぐに回復魔法を掛けた。すると傷はみるみる塞がり、これ以上の出血の心配は無くなった。

男性の容態も安定し少し落ち着いたので、僕は彼女達に駆け付けた時のことを伝えた。3人が残っていると聞いていたが僕が着いた時には、1人しかいなく他の2人は見当たらなかった。

「・・・すまなかった。」

僕は居た堪れなく、最後に一言詫びた。

「謝らないで。僕達3人が助かったのは、君のお陰だよ。ありがとう。」

「そうです。貴方が助けられなければ、私達は死んでいました。あ！すみません。助けて頂いたのに名前も伝えていませんでした。私はミネア。この子はユーリー、そして兄のロベルトです。貴方は？」

話の途中で思い出したようにミネアは紹介をしてきた。



ミネアに続いてユーリーもおかしいと声を上げている。

「サークくん、それ絶対におかしいよ。ギルドもそんな無茶な依頼受理するはずないもん。」

僕は2人に落ち着いてと言い、依頼内容を明かす。

「依頼は単純に薬草を依頼者に渡すだけ、入手方法は指定されていないんだ。」

2人はどういう事なのか分からず、詳しい説明を求めてきた。僕は子供に出会ったところから説明し、彼女達は納得してくれた。するとユーリーが求めている薬草をたまたま採取していたので、分けてもらうことになった。

僕も目的の薬草を手に入れたので、皆で王都に帰ることとなった。

## 40話（後書き）

ここまで読んで頂き、ありがとうございます。

最近は更新速度が遅くって、すみません。

しかし、まだ続きを書くのでよろしくお願いします。

## 41話(前書き)

今回の話はいつもより文字数が多いです。

最後まで読んでもらえると嬉しいです。

## 41話

・・・僕はまだ意識が戻らないロベルトさんを抱えて、彼女達とこの湿地を出ようと歩いていた。その間、僕は彼女達にいろいと話しをしていった。

彼女達のパーティーはロベルトさんがリーダーで、行方不明の2人と彼女達の5人で組んでいる。彼女達はCランクの冒険者だが、もう少しでBランクになれるらしい。今回はこの湿地の調査依頼で危険はあるが、彼女達にBランクの依頼に慣れる為に請けてきた。本来ならBランクの3人とBランク目の前の2人で行くなら大丈夫だっただろう。別に指定されている目的もなく、何かあれば直ぐに撤退することも可能だから・・・しかし、今回は多くの魔物達が襲いかかってきた。原因は全く分からないらしい。

「うーん。・・・君は？」

抱えていたロベルトさんが気がついたみたいだ。

「僕はサーク、冒険者です。」

「確か先ほど助けてくれたね。ありがとう。1人で歩けるよ。」

そう言うと、ロベルトさんは自分で歩こうとしたが足元が少しふらついている。

「兄さん、あまり無理をしないでよ。魔法で傷口は塞いでいますが、かなりの出血で血が足りていないんだから。」

「これ以上、サーク君に迷惑を掛けられないし、冒険者として出来ることは自分です。」

ロベルトさんは無くなった体力を気力で補うようにして1人で歩くようにした。ユーリーがロベルトさんに近づいて悲痛な面持ちで声を掛けた。

「ロベルトさん、ごめんなさい。役に立つどころか足を引っ張ちゃって……」

「気にするな……って言っても無理だな。しかし、俺達は冒険者だ。どんな時でも命の危険はある。それを覚悟していた。違つか？」

「それはそうだけど……」

ロベルトは残った右手でユーリーの頭を撫でて慰めている。

「あいつらの事は悔やんでも悔やみきれないが、今は俺達が生き残った事が重要だ。」

「兄さんもあまり無理をしないでね。2人共幼い時からの親友だったんだから……」

重い雰囲気には僕は黙って居るしかなかった。

「サーク君、身内の話ですまなかった。おっと！まだ名前を言っていなかった。俺の名前はロベルトだ。よろしく。」

それから歩くのを再開して少ししたら

ザワツ！

嫌な気配を感じた。

「ミネア！ユーリー！ロベルトさんを連れて先に行つて！！」

「急にどうした！」

「何かあつたの？」

説明する時間もなく、魔物達に囲まれていくのを感じた。魔物達の中に一際大きな気配を感じ、全員を無事に帰せるか不安を覚えた。希望としてはミネアの魔法だが、いつたいどれだけの時間が稼げるだろう？

「間に合わないか・・・ミネア、防御魔法をどれくらいの時間使える？」

「兄さんに回復魔法を使ったから、魔力がほとんど残っていないです。魔力を回復させたり、増強するような魔法道具マジックアイテムも持っていないませんし・・・」

僕はその言葉を聞き、自分が持っている宝玉を思い出した。

「ミネア、この宝玉を使ってすぐに魔法を使つて！」

僕は持っていた【ライオウの結晶】を渡した。ミネアは宝玉を受け取ると感じる魔力に驚いた。

「サークさん、この宝玉は？」

「今は説明している時間が惜しい。早く障壁を張って！」

ミネアは僕に急かされ、障壁を張ろうと呪文を唱え始めた。

「サークさん、あまり離れられると障壁の外に出てしまいますよ。」

ミネアは言われた通り魔法を使おうとしたのに、僕が離れていくので呼び止めた。

「魔物達に囲まれている。ここで障壁を張って、待っておいでほしい。僕はその間に親玉を倒してくる。」

気配からして多くの魔物達はミネアの障壁を破ることは出来ないだろう。僕は一際大きな気配を放つ魔物を倒すべく、向かおうとしていた。

「なら俺も行く。あいつ等の仇を討つ。それにサーク君だけを戦わすことなんて出来ない。」

「ぼくも一緒に戦うよ！今度は足手まといにならないようにがんばるから。」

ロベルトさんやユーリーは戦うと言っているが、気配の数は先ほど襲われた時より多いだろう。それなら僕だけで戦ったほうがやり易い。

「気持ちは分からないでもないですが、今回は我慢して下さい。その怪我では満足に戦うことが出来なんでしょう？一緒に来てもらっても庇いながら戦うことになるので、ハッキリ言って足手纏いにな

ります。」

今は時間がない。話し合っている間に魔物達が近づいてくる。ここはハッキリと言ってすぐに親玉の方に向かわなければ！

「しかし、1人では無茶だ！俺はついて行く。もし足手纏いと思ったら見捨ててくれてもいい。」

ロベルトさんはせめて自分だけでも戦闘に参加すると言ってきた。

・・・間に合わなかった。魔物達に囲まれ、奥から親玉らしき魔物が現れた。現れたのは体中に蔦つたを巻き付けような女性の姿・・・ユングだった。

ユングは単体の戦闘力は、Bランク数人分に匹敵し、何より厄介なのは魅了攻撃をしてくるところにある。今回、これだけの魔物達が襲ってきたのもユングの魅了で操られていた為だろう。

「ミネア、誰かが魅了されると厄介だ。僕を外して障壁を張って！早く！」

一瞬、躊躇ちゅうちゆし掛けたミネアを急かし、障壁を張ってもらった。僕は剣を静かに構え、戦闘態勢をとった。不意にユングが声を掛けてきた。

「貴様達が我の下僕を倒したのか？」

本で読んだ中には、人語を話すとは書いていなかったのだから純粋に驚いた。

「へー驚いた。人語を話せるんだ。」

「私の質問に答えるのじゃ。」

「そうだ。この人達が襲われていたので助ける為に僕が倒した。」

ユングは少し考える様な素振りをし

「その答えだと、貴様は後ろの者達と関係は無いようじゃな。どうじゃ、貴様は見逃してやる。その代わり後ろの者達は置いていくのじゃ。」

僕に提案してきた。話の流れでは下僕を倒した僕より、ロベルトさんのパーティーに恨みがあるように思える。そんなことより、その提案に乗るわけにはいかない。

「僕だけ助かる話なら断る。逆にこのまま見逃してくれないか？お互いにこれ以上被害を出さないですむと思うが・・・」

「無駄じゃ！私の意思は変わらぬ。」

「交渉決裂か・・・実力行使で行く。」

話の終わりが戦闘の開始となった。

控えていた魔物達は一斉に僕に向かって、襲い掛かってきた。先ほど戦った時と違って、攻撃と攻撃の隙が少ない。多分、ユングが戦闘を見ながら魔物達を直接操っているので、無駄が少ないのだろう。敵の動きを観察し、予測していく。グレンさんとの修行のお陰で攻撃を避けることに集中すれば問題が無い。

~~~~~

俺達は信じられない状況を見ている。サーク君は魔物達の攻撃を避け続けている。

多くはBランクの冒険者でなんとか倒せるような魔物だが、中にはBランクの俺でさえ相手するのが厳しい魔物もいる。それを避けることに集中しているとはいえ、普通これだけの攻撃を完全に見切るのとは不可能だ。しかし、目の前で現実に起きています。

「彼はいつたい何者なんだ？」

俺は誰に尋ねるも無しに呟いていた。当然答えなど返ってくるはずもなく、ミネア達の方を見てみた。ミネアは俺達が教われないように障壁を維持するのに集中していた。一方、ユーリーはサーク君の戦う姿に見とれていた。

その時、状況が動いた。サーク君が攻撃を避けてすれ違いさまに

シュンッ

一閃だった。魔物は動きを止め、首が胴から離れ静かに倒れていく。

それから、サーク君の攻撃が始まった。

~~~~~

サークくんはぼく達を庇って1人、魔物達の前に出てくれた。先ほど戦っている姿を見ているのでこの中の誰より強いことは知っている

るが心配してしまう。でも、これだけの魔物相手にぼくが出てつても邪魔にしかならないと思う。せめて、応援だけでも頑張っしてよ。そう思って戦いを見ていると攻撃を避ける姿、反撃に移った姿先ほども思っただが動きが洗練されており、人はここまで美しく舞うことが出来るのかと見惚れてしまう。ぼくにはサークくんが幼い時に読んでもらった物語から抜け出してきた勇者様に思える。

~~~~~

僕は避け続けて魔物の攻撃に慣れてきたので、そろそろ反撃を開始した。

攻撃をする時は僅かながらでも隙が出来る為、無駄に攻撃をする訳にもいかない。確実に倒せるように攻撃していかなければ、皆を守りきれない。僕1人だけなら多少無理してもこの魔物達から逃げ切る自信があるが、そんな訳にはいけない。

避けることに集中し、僅かな隙を狙って魔物を倒す。これを繰り返して魔物の数が半数以下になった。

「そろそろ終わりにしないか？今いる魔物達では僕を倒すことは出来ないと思うよ。」

僕は今一度、提案をユングに言った。ユングからの返ってきた言葉は全く違った言葉だった。

「何故じゃ！何故、私の魅了が効かんのじゃ！」

「僕は魔法とかは生れつき効きにくいから、魅了も魔力を使っているのであれば、たぶん効かないよ。」

ユングはショックを受けた様で、半歩後退った。

「魅了も効かない、魔物を操っても倒せない。大人しく引いてくれ
たら僕も大人しくこの湿地を出ていくよ。」

「駄目じゃ！貴様はそれでも良いが、後ろの者達はこのままでは許
せぬ！」

やはり話し合いでは平行線を辿るしかない。しかし、許せない事と
は何だろう？僕は疑問に思っユングに聞いてみる。

「許せない事とはいったい何の事を言っているんだ？」

「この者達は我が子達を踏みにじった。何の抵抗も出来ぬ幼子をじ
や！我は許すことは出来ぬ。例えこの身が果てようと、我の愛し子
の為仇を討つのじゃ。」

どういうことだ？ユングの言った事が本当なら恨む理由としては十
分だ。しかし、つい先程出会った人達だがそんな残酷なことをする
様には思えない。念の為にロベルトさん達に確認を試みよう。

「ロベルトさん、ユングの言っていることに覚えがありますか？」

ロベルトさんは寝耳に水といった様に驚いた顔をしていた。

「いや、急に言われても・・・いくら魔物であつても無抵抗な、そ
れも子供を手に掛けた事は無い！それだけは断言できる。」

「兄さん達とパーティーを組んでいましたが、無闇に魔物を狩るこ

とは無かったです。」

ミネアも庇うように言ってきた。

僕はどつちも嘘をついている様には思えない。ならば、僕の知らない事があるはずだ。ユングにもっと詳しい事情を聞くことにした。

「すまないが、もう少し詳しい状況を教えてくれないか？」

ユングは少し考えてからその時の状況を話し始めてくれた。話をまとめるとユングは生まれて数年は普通の植物と変わらない状態で成長するらしい。その頃は今の様に移動することも、喋ることも出来ない。当然、他者に被害を与えることもない。

しかし、ロベルトさんのパーティーは赤ん坊とも言えるユングの子を踏みにじって行った。ロベルトさん達は知らずに歩いただけかもしれないが、ユングからしてみたら愛しい我が子を踏み殺されていたに違いない。

僕は迷った。ロベルトさん達のパーティーがわざとやった事ではないけど、ユングにすればそんなことは関係ない。

このユングは親であり、子を思う気持ちは人と変わらない。魔物だから殺されて当然みたいな考え方は僕は間違ってると思う。

当然、自分の子を殺されて、わざとじゃなかったとしても、怨みも怒りも無く許せる親なんているはずもない。

僕は自分の答えが出せずにいた。ユングの気持ちはわからないでもないが、だからといってロベルトさん達を見殺しにするようなこと

は出来ない。

自分勝手かもしれないが、ユングと和解出来ないか尋ねた。ユングからは単純で残酷な回答しかなかった。

「貴様がいくら言葉でこの場を収めようとしても、我が子は生き返らぬ。生き返れば貴様が言うように後ろの者達を赦す事もできよう。貴様が大人しく後ろの者達を渡さないと言うなら、我も我が子の仇の為、戦うのみじゃ。貴様も守りたければ、我を倒すのじゃな。」

ユングの表情には目に見えての変化は無いが、逆に怒りと憎しみ、そしてそれらを上回る深い悲しみの感情を感じる。

僕は自分の考えが間違ってる事に気が付いた。

ここで相手を倒したくない、話し合いで解決する方法が無いか考えたところで、それは僕自身の身勝手な考えでしかない。

人とユングの思考、思想自体が違うのに僕の考えを押し付けても解決にはならない。

それこそ、ユングが言ったように子供を生き返らせて、ユングの元に戻らせない限り無理だろう。

・・・僕は覚悟を決めた。ロベルトさん達を守りきる。その為にユングを倒す。

昔からある自然の理。「ことわり」

・・・弱肉強食。

単純だが確かに一つの真理である。強者が生き残る為に弱者を糧とする。勝者のみが生き残る自然の掟。

僕は自分の力の無さを痛感していた。しかし今は嘆くことより、守る為に出来ることに集中しよう。

「わかった。僕は今から全力を持って倒す。」

僕は改めて剣を構え直した。それが再開の合図のように、再び戦いが始まった。

ユングは魔物を操ると同時に体中に巻き付いている鳶を鞭の様に振ってきた。

先程までの戦い方の様に後の先みたいに避けてから攻撃をしていたら、いずれ詰んでしまい攻撃を受けていただろう。しかし、今の僕は敵を倒すことを優先している。近づいた魔物に攻撃される前に切り裂いていく。

魔物の攻撃の死角をつくように振るわれる鳶による攻撃。正直こちらの攻撃の方が厄介だった。それに鳶を切り落としても直ぐに再生され数が減らない。

逆に倒せる魔物達は確実に切り裂き、数を減らしていった。最後の1体を倒し、僕はユングと無言のまま向き合った。

僕達の間にはもう無駄な会話はない。お互いに倒すか、倒されるかしかない。

多くの魔物を相手にしたので、僕は息が上っている。一気に決める為、大きく息を吸い込み間合いを詰めた。

地面に違和感を感じた瞬間、地面の中から何かが僕に向かってきた。

ザッ！ザッ！ザッ！

ユングも僕の攻撃を予測したのか、地面の下から鳶が槍の様に突き出してきた。左右正面から突き出してきた鳶はそれぞれ頭や心臓、腹部を正確に狙っていた。

全てを避けたり、防ぐことは出来ない。ならば！

・・・一閃

シュン！

正面と右の鳶を一刀に切り裂いた。しかし、左から心臓を狙っていた鳶は体を捻って、かわすのが精一杯だった。

ザシュッ！

だが、かわし切れずに左肩に鳶が突き刺さり浅くない、いや深い傷を負ってしまった。血が溢れる様に流れ、このままでは残りの体力も尽きてしまう。ここで焦って攻撃に出ると先程と同じ結果になります。冷静に間合いを詰めて接近戦に持ち込まなければ！

ジリッジリッ・・・

僕が間合いを少しづつ詰めようと近づくと、ユングは鳶による攻撃

を津波の様に仕掛けてくる。幾重にも幾重にも折り重なるように仕掛け、意識がその攻撃に集中した時は不意に別方向や地面の下から襲ってくる。多様な攻撃は回避が困難で、致命傷を負わずに潜り抜けるのがやっとであった。体力と出血による思考の低下で少しづつ、傷が増えていった。

やっと自分の間合いになった。ここから反撃を開始できる。僕の斬撃で、今まで攻撃に集中していたユングは防戦一方になっていった。ユングは鳶で防御をしても切り裂かれるので、鎬しのに鳶を当てて軌道を変えて斬撃を防いでいたが、徐々に斬撃の速度に追いつけずになつていった。

・・・数度の攻撃後、大きな隙ができた。

ザシユッ！

僕はその隙を逃がさずに袈裟斬りを放ち、ユングに致命傷を与えた。

ユングはゆっくりとその場に崩れ落ちた。

41話（後書き）

ここまで読んで頂き、ありがとうございます。

いつもより文字数が多かったですが、大丈夫でしたでしょうか？

まだまだ続きますので、よろしくお願いします。

42話

・・・僕は最後にユングに言葉をかけた。

「その傷ならもう助からないだろう。何か最後にあるか？」

「願わくは我を愛しい子達の上に運んでくれぬか？」

「ああ。どっちに運べはいいんだ？」

ユングは震える手である方向を指し示す。

「ロベルトさん達はここで待っていて下さい。すぐに戻りますから。」

「それなら、俺も手伝うよ。」

「ありがとうございます。しかし、ユングにとって仇であるロベルトさんに手伝って貰うのはやめときます。」

「・・・それもそうだな。」

僕は応急で止血し、ユングを抱きかかえて運んでいった。

・・・ユングの言う場所は20分ほど歩いたところにあつた。湿地の中で土壌がすっかりしている所だつた。その中央に踏み潰れていた植物がユングの子供なんだろう。その横にユングを寝かした。

「手間をかけた。我はここで残された時間、愛しき我が子と語りあう。」

「すまなかった。僕達人間が踏み荒らしたりしなければ・・・」

「貴様らを赦すことは出来ぬが、これも自然の流れじゃ。我より貴様が強く、貴様が生き残る。それだけじゃ。残りわずかな時間、我らのことはそつと・・・して・・・おい・・・」

ユングは最後まで言葉を紡ぐことは出来なかった・・・

最後にユング達に黙禱を捧げ、この場を去った。

・・・ロベルトさん達の所に戻ってきた僕はミネアに捕まり回復魔法を掛けられた。

「サークさん、左肩を見せて下さい。これはかなり酷いです。今、魔法を掛けます。」

「いや・・・」

僕は魔法が効かないので遠慮しようとしたが、言葉の途中で魔法を掛けられた。

パーン！

「ええ！！！！」

僕にとっては当たり前のことだが、3人は揃って驚いた。

「ああ、気にしないで。僕は魔法が効かない体質だから、ミネアの魔法が失敗したわけじゃないよ。」

ミネアは自分の魔法で僕の怪我を癒せないことに気がつき青ざめた表情になった。

「そうすると、サークさんの怪我の治療がここで出来ないです。どうすれば・・・」

「ぼく、薬草を持ってるよ！これで王都までの応急処置をしよう。」

ユーリーは腰のポーチから薬草を取り出した。薬草を磨り潰して布に塗って、傷口を覆うように貼り付けた。

僕はユーリーにお礼を言い、王都に先に戻らせてもらおうと告げた。

ユーリーと一緒に戻ろうと誘ってきたが、僕は依頼の件があると言うと、思い出してくれて納得してくれた。

ロベルトさんは王都で改めて礼に向かうので、住所を聞いてきたが僕としては当たり前の事をしただけなので、何も教えずに別れた。

目的の薬草も手に入り、一刻も早く王都に帰って、あの子達に薬草を渡そうと直ぐに出発した。帰りは傷の影響で来るときより、時間が掛かってしまい夜になっていた。

夜の王都は昼間と違い大通りの賑わいはなくなり、人通りが疎らに

なって閑散としている。逆に繁華街にある一部の盛り場などは、今の時間帯が書き入れ時になり賑わいを見せている。

依頼主の住所はそんな繁華街の裏路地を入れていった、奥にある集合住宅の一室だった。

コンコンコン

「こんばんわ。冒険者のサークです。依頼の薬草を持ってきました。

」

すると、中から鍵を開ける音がし、今朝の男の子が顔を出してきた。

ガチャ！ キーイ

「あ！お兄ちゃん。薬草持って来てくれたの？」

僕は男の子に目線の高さを合わせる為に膝を付き、安心させる様に笑顔で話し掛けた。

「ああ、これがそうだよ。」

腰の鞆から薬草を取り出して、男の子に渡すと今にも飛び跳ねかねない勢いで喜んだ。

「お兄ちゃん、ありがとう！」

男の子の素直な満面の笑顔でのお礼。この笑顔で今日の出来事で、複雑な心境になっていた僕の心の中は少し晴れた。

男の子は早速母親に薬草を届けようと走り始めたが、ピツタッと止まり僕の方を向いて薬草をどうすればいいのか、分からないと言ってきた。

医師から何も聞いてなく、紙をもらったが字は読めなかったらしい。その紙を見せてもらったら、薬草の煎じ方が書いていたので、それを見ながら僕が煎じる事になった。煎じた薬を今度こそ母親のところに持って行った。

・・・暫くして、奥の部屋から男の子と母親が出てきた。母親の足元はふらつき危なっかしいので、無理せずに寝てる様に勧めた。

母親はせめてお礼だけでもといって、その場に留まって言ってきた。

「この度は息子達の無理な依頼を聞いてもらい、ありがとうございます。お蔭様で私も薬が効き、起き上がることも出来ました。」

母親は僕に向かって、深々と頭を下げてお礼を言ってきた。

「僕は冒険者として依頼を果たしただけです。後でギルドからもちやんと報酬を貰うので気にしないで下さい。夜も遅いのでこれで失礼します。お体をお大事に。」

僕はそう言って、この家から出て行った。もう夜になっているので、冒険者ギルドへの報告は明日にしようと思い、今日のところは家に戻って休息をとることにした。

・・・次の日、朝起きると肩の傷は完全に塞がっており、肩を回してみたが多少違和感が残るぐらいだった。朝の修行の際にグレンさんには一目で肩の不調を見抜かれた。それでもグレンさんは攻める

手を緩めず、むしろ弱点を攻める様に厳しい攻撃が続いた。

後で聞いたら実践で体調が万全の時の方が少ない。どんな状況であつても対処できるだけの応用力を身に付ける為だと言っていた。

いつもの様に冒険者ギルドに行き、昨日の依頼を無事に終えたことを報告する。

「シアンさん、おはようございます。昨日の依頼は無事に完了しました。」

僕は依頼書をシアンさんに渡した。

「おはようございます。つて！もう終わったんですか？」

「ええ、無事に昨日の夜に薬草を届けましたよ。」

「あの湿地には多くの魔物がいるのに、襲われなかつたんですか？」

「多少は襲われましたが、湿地で出会ったパーティーの方に薬草を分けて貰ったので、薬草を捜す時間は省けました。」

「そうですね。じゃ、今回の報酬の2Sシルバーになります。今日は他の依頼を請けますか？」

「いや、今日は知人を訪ねようと思っているので、また明日にでも請けに来ます。」

シアンさんは一瞬、凍てつく様な雰囲気纏った。

「サークさん、知人の方はもしかして女性ですか？」

表情は直ぐにいつも以上の笑顔になったが、僕は今までに感じたことのないプレッシャーに身構えてしまった。僕は肯定の言葉を口にするのがやっとだった。

「ええ・・・」

「酷いです。他の女性に会いに行くなんて！」

シアンさんは次は泣くふりをしながら、僕を非難してきた。

「え〜！ちょっと待ってくださいよ。なんで僕が責められるんですか？」

「今、私と喋っているのに他の女性に会いに行くなって言うなんて酷いです！」

・・・約30分はシアンさんに無実の僕は責められ続け、今度の休みに買い物に付き合うことで許された。朝から精神的に疲れた・・・冒険者ギルドを後にして、メモ紙の住所に向かって歩き出した。約1ヶ月半ぶりの再会を楽しみにして。

42話（後書き）

ここまで読んで頂き、ありがとうございます。

まだまだ続くので、よろしく願いします。

また、どんなコメントでも貰えるとうれしいです。

感想、苦情、駄目だし、ご意見など……

（宣伝）

別に書いている『帝都の夜に』の2話を3/19に更新しました。

お暇な方は読んでみてください。

43話

王都に来てこの一ヶ月で新しい生活に慣れたのでカル口達に会いに行こうと思った。

メモ紙に書かれている住所はお城に近い区画になり、お城の関係者の位の高い者が多いところだった。この辺りはお店などはなく、閑静な中に豪華なお屋敷が多い。目的の住所のところには、周りに比べると簡素だが、それでも十分大きなお屋敷があった。

呼び鈴があつたので押してみると、屋敷の中から初老の男性がやってきた。

「どのようなご用件で？」

「僕はサークと言います。突然尋ねて来て、すみません。このメモ紙の住所はこちらですか？」

僕は持っていたメモ紙を男性に渡して確認を取った。男性は住所を見てこちらで間違いないですと答えた。

「こちらにレイラさんとカル口さんがいらっしゃると思うのですが、面会する事はできますか？」

「サーク殿ですな。私はこのお屋敷で執事をさせて頂いています、ロイドと申します。レイラ様はただ今外出しておりますが、カル口様はいらっしゃいますので中にお入り下さい。」

男性にお屋敷の中に案内された。応接室まで案内される途中で、メ

モ紙をなぜ持つているのかを尋ねられたので、レイラ本人から渡された事を伝えた。

「サーク殿、こちらの部屋で少々お待ち下さい。」

そう言つて、執事は部屋を後にした。それから暫くして、部屋の扉が勢いよく開かれた。

バンツ！

「ヨツ！久しぶりだな。」

現れたカルロは片手を上げて、簡単に挨拶をしてきた。僕も簡単に挨拶をし直ぐに来なかつた事を詫びた。

「やあ！久しぶりだね。すぐに挨拶に来なくて、ごめん。」

「王都にはいつから来ていたんだ？」

カルロの質問に僕は家を出てから今までの事を掻い摘んで話した。時間を忘れて話していると執事のロイドさんが昼食の用意が出来たと呼びにきた。

「お！もうそんな時間が、サークも一緒に食べようぜ。」

「ありがとう。ご馳走になるよ。」

カルロと一緒に食堂にいつて食事をした。

「レイラは帰つてこないのかい？」

「ああ、今日は朝からお城に行っている。気になるか？」

「いや、挨拶だけでもと思って。忙しのなら仕方がない。」

「・・・サーク、レイラの前では今の台詞は言わないでくれ。」

カルロは哀れんだ表情で僕に言ってきた。

僕は何のことか分からなかったが取り合えず頷いた。そんな僕を見たカルロは、相変わらずかっと言って呆れた顔になった。

「そういえば、サークはなぜ冒険者になったんだ？俺は城にくると思っただんだが？」

「何の伝手もない一般人の僕が、セシリアの近くで手伝うことはまず無理だろう。それなら高ランクの冒険者になって、お城からの依頼をこなし、信頼と実績を得て士官に採用される方が現実的に叶うかなと思っただ。それにこの一ヶ月の間、いろんな経験をしたけどが個人でどこまで出来るか、もう少し試したくなっただ。」

「そうか、サークがきたら絶対に俺の隊に入れようと思っていたのに。それに俺の隊ならセシリアの近くで行動出来たのに惜しいな。」

「俺の隊？カルロはどの隊に入っているの？」

カルロはセシリアの護衛で王家の森に来たぐらいだから、実力も信頼も高いだろう。それにセシリアの近くで行動できたと言うことは、城の中でも身分も高いのだろう。

「俺の所属か？聞いて驚け。」

カルロは自慢げに答えた。

「俺は近衛隊、三番隊の副隊長様だ！」

「へえ、そうなんだ。」

僕は想像した通り、いやそれ以上か。

「なんだ。反応が薄いな。少しは驚いてくれるかと思ったのに。」

カルロはつまらなそうな顔をしていたが何かを思いついたようで僕に時間があるか聞いてきた。

「サーク、まだ時間は大丈夫か？」

「ああ、特に予定はないから大丈夫。」

「よし！これから俺について来てくれ。爺、馬車を用意してくれ！」

カルロは突然立ち上がり、馬車の手配をした。

「いきなり、どこに行くんだ？」

僕はカルロに尋ねたが答えは黙ってついて来れば分かると言っただけだった。用意された馬車に乗り込んでから、20分程揺られると目的の場所に着いたみたいだ。

馬車を降りた先にはお城の門があった。

「カルロ、お城に連れて来て何をするつもりなんだ。」

「いいから、俺について来い。」

カルロは門の前に立っている守衛に手を挙げて挨拶をすると中に入ってしまった。僕もカルロに続いて中に入ろうとすると守衛に止められてしまった。

「城の中には関係者以外は立入禁止です。お引き取り下さい。」

止められた僕を見たカルロは、守衛の所に戻ってきて僕が入れるように言ってくれた。

「ああ、すまん。俺の連れだ。身元は俺が保証するから入れてくれ。」

「カルロ氏がそう言われるなら分かりました。今度からは必ず手続きをおこなってからにして下さい。」

守衛は仕方がなしに僕をお城の中へ通してくれた。このやり取りでもカルロの身分と信頼の高さがわかる。

お城の中は広々としており、白を基調とした内装で一見派手さはないが細部に職人の技が冴え渡る。

僕はカルロに連れられて一緒に歩いていくと、カルロはすれ違つメイド達に声を掛けられる。

「カルロ様、今日はお休みではなかったですか？」

「カルロ様、そちらの方はどなたですか？」

メイドの2人がカルロに質問をしてきた。

「ああ、そうだ。友人に城を案内しようと思ってきたんだ。」

「そうですか、それなら私達がご案内をしましょうか？その代わりに今度お食事に連れて行って下さい。」

カルロは少し考える素振りをしながら答えた。

「折角の提案だが今日は俺が案内するよ。ありがとう。」

カルロの答えにメイド達がシュンっと落ち込んだ顔になると、すぐにカルロはメイド達を今度の休日に食事に誘っていた。

メイド達はカルロの誘いを聞いて落ち込んだ顔が一瞬で笑顔に変わり、2人は声を揃えて

「はい！お願いします。」

メイド達は頬をほんのり赤く染めて、頭を下げて答えてきた。

カルロはメイドに手を振りながら別れた。

「どうだ、俺も女の子に人気があるだろう。」

僕に向かって話し掛けてきたが、そうだねと言って頷くしかなかった。

・・・暫く歩くと、カルロは急に立ち止まり、クルッと回れ右をして来た道を引き返そうとしたが、前から来た貴婦人に呼び止められた。

「カルロ殿、止まりなさい！」

呼び止められたカルロは暑さとは無縁な汗が額から滲み出ており、貴婦人の方へぎこちなく振り向いて挨拶をした。

「・・・これはこれは、ランスイート様。御挨拶が遅れまして申し訳ございません。」

「そんな事はいいです。それより私のことはいつても名前が、それともお義母様と呼ぶように言っているでしょう?」

ランスイート様はカルロに近づいて来て、指を指しながらカルロに注意してきた。

「いや、しかしランスイート様に対してお名前でお呼びするのは余りにも御無礼だと思えますし、あのお話はまだ正式にお受け致していませんから・・・」

「私が良いと言っているのです。何か不都合がありますか?」

歯切れの悪い答えをするカルロにランスイート様は両腕を組んで不満を顕にした。

「あゝあ、昔の素直で可愛かったカルロちゃんはどこに行ったのでしょうか?昔は私の言った事に素直にに応じてくれて、凄く可愛かった

ですのに・・・」

カルロは話を慌てて遮った。

「あー！わかりました。エルリース様、これで良いでしょう！友人の前で恥ずかしいですから、昔の話は止めて下さい。」

「そうそう、素直なカルロちゃんは可愛くって好きよ。で、そちらの友人さんを紹介してもらえないかしら？」

僕の事に話が進ったので、ここは先に自己紹介しておこう。

「僕は王家の森から来ました、サークと言います。ランススイート様、紹介が遅れましてすみません。」

深々と頭を下げて一礼をした。

43話（後書き）

ここまで読んで頂き、ありがとうございます。

ユニークポイントがもうすぐ1万に届きそうので皆様に感謝です。

何かご意見や感想があれば、貰えると嬉しいです。

これからも、よろしくお願いします

44話

・・・深々と頭を下げて一礼をした。

「そんなに畏まらなくてもいいです。面を上げなさい。」

僕は言われた通り顔を上げてランスウィート様に向かい合った。

ランスウィート様は僕を上から下までじっくりとまるで値踏みをするように見ている。そして、何か納得したように頷き、僕に話しかけてきた。

「ふくん、黒髪に黒い瞳・・・貴方のことね？」

「すみません。何のことでしょうか？」

いきなりの質問に僕は失礼ながら、質問で返してしまった。

「私の父は、グレンバツハリカルドわたくしです。お父様から知り合いの子を預かると前に聞いていました。貴方のことですね？」

僕はランスウィート様の説明を聞いて納得をしたが同時にグレンさんから娘さんがいるとは聞いていなかったので少し驚いた。

「そうです。今、グレンさんの家にお世話になっています。」

その会話を聞いたカルロは驚きの声を上げた。

「サークの下宿先って、グレンさんのお屋敷だったのか！」

「ああ、そうだよ。言ってなかったかな？」

「親父さんの昔の上司の家に下宿しているしか言ってなかったぞ。」

「そうだったかな？けど、何でそんなに驚いているんだ。」

僕がカルロに驚いている訳を聞いてみると、僕の頭を叩いてきた。

「世間知らずにも程があるわー！グレンさんと入ったら、前元帥であり、歴戦の戦で軍神の名で伝説を残すような方だ。こんなこと子供でも知っているぞ。」

確かに、只者ではないと思っていたが、ここまで凄い方だとは思っていなかった。グレンさんのことで僕とカルロが言い合っていると、ランスイート様が段々と不機嫌になっていったらしく、軽く咳払いをしてきた。

「2人とも私のことを忘れていませんか？私は蔑ろにされるのが一番嫌いなのですが……」

言葉と一緒に殺気を掛けてきた。

・・・僕とカルロは顔を見合わせ、アイコンタクトによる第一回脳内会議『危機的状況による生存方法』が開かれ、討議すること約0・5秒・・・素直に「ごめんなさい」をする事となった。

それから暫くランスイート様と会話をしていたが、何故か話の流れで僕とランスイート様が模擬戦をするようになってしまった。

ランスイート様は今御結婚されて、軍籍から離れられているが昔は近衛隊の2番隊の隊長だったらしく、偶に広場に来ては訓練している兵士達を指導していく事があり、今でもカルロより実力は上らしい。

ランスイート様は準備をしますと言いき残り、僕達と別れた。残された僕達は兵士達が訓練している訓練場に移動し、ランスイート様を待つことにした。

「全員、集合！」

カルロの呼び掛けに兵士達は訓練を中断し、カルロの前に一糸乱れず整列をした。並んだ兵士の1人が何があつたのか質問をしてきた。カルロは今から僕とランスイート様が模擬戦を行うことを告げると兵士達からざわめいた。

ざわめきの内容を聞き取ると、血の雨が降る。とか、ご愁傷様。とか、医師の手配を。とか、死亡確定。とか、不吉な言葉ばかり聞こえてくる。僕は少し不安になり、カルロにランスイート様のことを尋ねた。

「・・・皆から聞こえてくる言葉に少し不安を覚えるのだが、大丈夫なんだろうか？」

カルロは僕から視線を逸らしながら、答えてくれた。

「・・・大丈夫だ！・・・と思う。・・・ランスイート様は優秀な方だから・・・まあ、少しばかり・・・いや、何でもない！」

「そんな、台詞でどこをどう安心できるか！少しばかり、何なんだ

「?教えてよ。」

カルロは答え辛そうに言ってきた。

「・・・熱くなられたときに手加減がな、ほんの少し苦手と言うか、不得意と言うか、そんな感じ?」

僕はすかさず問い詰めた。

「具体的にはどんな事があった?」

「・・・え〜っと、そうだな・腕を切り落としたり、吹き飛んだ相手が壁にめり込んで全身骨折になったり、鎧ごと胴を切り裂いて深手を負わしたり、かな?」

僕はカルロに恨みを込めて、何故に模擬戦の話の時に止めてくれなかったかと言ったが、

「大丈夫だ!ここには優秀な魔法使いも医師もいる。今までも的確な回復魔法と治療で死人は出ていないから安心しろ!」

「カルロ・・・僕の体質のことを忘れているだろう。」

「あ!・・・すまん。・・・え〜と、そうだな、まあ、無事を祈っている。」

カルロにこれ以上言ったところで仕方がない。覚悟を決めて怪我をしない様に防御に徹しよう。

ざわめきが静かになり、ランスウィート様が訓練場に入ってきた。

軽装の鎧を身に纏い、凜とした姿はまるで戦女神の様に美しく、神々しささえあった。僕は場違いにも目を奪われ、見惚れてしまった。僕達の前までランスイート様は来られて、模擬戦のルールを説明して開始となった。ルールは刃のない模擬剣で有効打が入るまで行い、致命傷にならなければ魔法も有だ。

僕とランスイート様は向き合ったまま、お互いに相手の出方を待っている。

2人の張り詰めた緊張感に周りの兵士達も固唾を呑んで、今から始まる戦いに期待を寄せている。静かな空間にあつと誰かの声が響くのと同時に2人が動いた。

ガツキーン！

お互いの真ん中で剣と剣がぶつかり合った。剣に込められた力が拮抗し、お互いの体勢を崩す為に激しい鏝迫り合いが繰り広げられる。純粋な力比べでこの細腕に僕と同じ位の力が込められていることに素直に驚かされた。

その時、隙とは言えない間を見逃さずにランスイート様は連撃を放つ。

回避は間に合わない。剣で防ぐ為に同じく連撃を放つ。

キィーイーーン！

余りの速さの為、剣同士のぶつかる甲高い音が連なって、まるで一つの音のように鳴り響く。お互いに間合いをとり、仕切り直しをし

た。回りの兵士達は近衛隊に所属する言わばエリート集団であったが、今の攻防を全て見て理解した者は一部しかいなかった。殆どの者は連撃をお互いに放ち、間合いを取ったことしか分からなかった。僕は全ての斬撃を相殺する事が出来ずに脇腹を掠める一撃を貰った。刃がない模擬剣であったが、あの速度で振るわれると十分殺傷能力があり、僕の服や皮一枚は切れて、脇腹からは血が流れてきた。僕とランスウィート様の力や速度は、ほぼ互角といったところだった。先程の連撃を防ぐ為に後手に回ったが、捌き切れずに一撃を貰ってしまった。

「流石はお父様が見込まれた事がありますね。並みの方なら最初の一撃で何が起きた分からない内に終わりますのに。」

「いいえ、これもグレンさんのお陰です。いつも相手をよく見る様に指導して貰っています。それより、もう少し手加減をして頂けたら有難いのですが？」

「手加減ですか、貴方なら必要なくて良いのでは？次は魔法も使わせてもらいますわ。」

ランスウィート様はそう言うと目の前に肩幅位の火球を作り出し、僕に放ってきた。

ボオオオーーーーー!!!

ザシュ!

目の前に迫ってくる火球を剣で切り裂いた。

ボオオooooooooo!

切り裂かれた火球は爆発し、視界に爆炎が広がる。爆炎の中からランスウィート様が飛び出してきて、間髪入れずに斬撃を放つ。

僕は爆炎が広がった際にこの攻撃を予測していたので剣で受けずに回避して、ランスウィート様の背後に回ろうとしたが、すれ違い様にランスウィート様は僅かに微笑んだように見えた。

次の瞬間には微笑んだ訳が分かった。

ランスウィート様の背後にも先程と同じ大きさの火球が迫っていた。普通なら火球の直撃で終わっていた。

パキイイooooooooo!

時が止まった……の様な静寂に包まれる。

この時、何がどうして起きたか理解出来た者はいなかった。目の前で火球が防いだ訳でもなく、相殺した訳でもない。サークに当たる直前に火球が消え去った。通常では有り得ない事が起きた。

「……貴方、何をしましたの？」

ランスウィート様の質問はここにいる全ての者が思っていることだ。僕は質問にどう答えようか迷ったが、思わぬ人物が乱入してきた。

「サークさん！」

乱入してきた人物に皆が気付き、一斉に頭を下げた。

「セシリア・・・様」

僕は危うく敬称を付けずに名前を呼びそうになり、慌てて頭を下げた。

「皆さん、顔を上げて下さい。突然の訪問、すみません。カルロ、サークさんと一緒に来て下さい。」

セシリアの登場で模擬戦は中止となり、僕とカルロはセシリアの所に行った。

「サークさん、お腹の処に怪我をされています。今、回復魔法を掛けますね。」

「いえ、大した怪我ではないですから大丈夫です。」

僕が遠慮しようとしたが、セシリアは回復魔法を唱えた。

「生命を司る光よ。彼の者の傷を癒し給え。」

傷が癒されていく。他人には当たり前の事でも、魔法の効かない僕には何か違和感がある。

「ここは他の方々がいるので、2人とも私に付いて来て下さい。」

僕達はセシリアの後に付いて行った。

44話（後書き）

ここまで読んで頂き、ありがとうございます。

最近は忙しくなかなか続きを書く時間がありません。

読んでくれている方には申し訳ございません。

物語自体まだまだ続きますので宜しくお願いします。

ユニークが1万を超えました。読んでくれた皆様に感謝いたします。

ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0500o/>

物語から伝説へ・・・

2011年5月22日12時41分発行